
赤のエージェント

万武 秋彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤のエンジェント

【Nコード】

N3576J

【作者名】

万武 秋彦

【あらすじ】

マルチプラットフォームで展開している、オンラインRPG「FINAL FANTASY XI」を題材にした二次創作小説を掲載しています。世界観や設定は作中で使用していますが、ゲーム中における「メインストーリー」や「サブストーリー」に触れることはありません。いわゆる「ネタバレ」になるような内容は一切含んでいませんので、これからゲームを始めたい、ゲームの内容が分からないから入りづらい、といった読者の方々にも安心して読んで頂ける作品になっています。

一章 一節 プロローグ（前書き）

>i15982—2219<

あらすじ

退屈な田舎の騎士の国サンドリアを出て、世界の中心的都市ジュノで傭兵になったソレ。非日常だった憧れは、もはや退屈な日常と化していた。そんなおり、傭兵団を取り仕切るティルダが、政府から仕事を依頼された。

麻薬取締局の捜査官二人と協力し、新型麻薬を密造するグループを捜査せよ、という依頼だった。莫大な報酬、そして追い求めているスリルがそこにあった。

女好きで不真面目の代名詞とも言える男。過去を見つめ、悪を許さぬ正義に生きる男。

両極端な二人の捜査官を傭兵団に加え、光と影の大都市ジュノを中心に大規模な捜査が始まった。

一章 一節 プロローグ

祖国サンドリアでは『騎士道精神』とやらを小さな頃から叩き込まれた。

親父は神殿騎士団の一員だが、ペーペーの二等兵だった。騎士団といっても、神殿騎士団の主な役回りは、犯罪者や異端者の検挙、王城や聖堂の警護、暴徒鎮圧。と、主に王都内の仕事だ。

親父の仕事は、王城の前で突っ立ってるだけの仕事だった。生まれてきた時代が良かったのか悪かったのか、親父の言う人々を守る騎士道が発揮される機会は無かった。毎日家に帰ってきては『有事の際には、国を背負って立てる男になれ』そう言い、剣の稽古をつけられた。体を動かす事は嫌いじゃなかったし、親父の事も好きだった。

お袋が死んでから俺の事を余計に構ってくれる親父だったから、不器用な愛情も憎めなかった。だからと言って騎士道精神は理解できなかったけど、剣を振るうのは得意に思ってる。

サンドリアじゃいっぱしの大人の男になっていた。騎士団にだって入れる。もちろん過酷な入団試験はあるが。

十六になって俺は決意した。こんな時代で剣を満足に振るえるのは、冒険者か傭兵しかない。寂れた田舎王国に住んでいたんじゃ、剣の腕だって宝の持ち腐れになる。サンドリアを出てジュノ大公国に行くって親父に伝えたら、猛反対を食らった。そりゃそうだ、親父は俺が騎士になることを望んでいたんだから。その為に毎日飽きもせず、俺に剣を教えてくれていたはずだ。

でも、俺は王城の前で警備なんてまっぴらごめんだった。一度限りの人生をもっと刺激の溢れる生活で満たしたかったんだ。流石に、王城の警備なんて……とは、親父には言わなかった。親父の一番の誇りだったから。あの時は喧嘩のせいで、体中青アザだらけになった。親父にも同じくらのアザを作ってやったけど。

こうして、故郷であるサンドリアを飛び出した俺だったが、『わたしもソレと一緒にいく!』なんてのたまう余計なオマケが付いてきてしまった。

俺には幼馴染が一人いる。アイって名前だ。こいつは本当に馬鹿だ。あろうことか、この幼馴染がサンドリアを出立する俺についてくると言っただけで聞かなかった。当時のアイは十四でただのガキ、そして女。しかも、サンドリアでも有数の名門貴族の娘だ。そんなアイが、幼馴染の男について行って、ジュノに上京するって言い出したもんだから、アイの家族一同はてんやわんやの大騒ぎ。それでも自分の意志を曲げないアイを両親は泣きながら、蠟で補強した縄を使ってベッドにぐるぐる巻きにしたらしい。けどアイは家庭教師から習った物体を蝕む魔法を使って、縄をフニャフニャにして抜け出してしまったという。アイの両親は、自分達の教育をさぞ呪ったに違いない。

そんな事が毎日のように続いて、両親は結局根負けした。ジュノの住まいに使用人を二人置き、三日に一度手紙を寄越すことを条件に。

俺はアイの事を兄妹のように思っていた。でも本当の事を言えば、最近では異性としても気になり始めていた。自分で自分の人生を決めて、一人で出て行くことを誇らしく思ったし、過去と決別して故郷から離れる事を寂しくも思った。だからアイがついてくる事は嬉しかった反面、男としての誇りを一つ格下げされたような、複雑な気持ちだった。

ともあれ、俺はアイと共に、『ジュノ大公国』に移り住むことになった。

『ジュノ大公国』は思った以上の都会だった。『サンドリア王国』と『バストウーク共和国』のある、西の『クオン大陸』。『ウィンドス連邦』のある、東の『ミンドルシア大陸』。両大陸を繋げるように橋をかけ、その橋『ヘヴンズブリッジ』の上に築いた、世界で唯一の海上都市国家だ。

他の三国に比べたら歴史と言えるものは全然ないけど、十数年前に勃発した『クリスタル戦争』では、当時まだ争いあっていった三国をまとめ上げ、『アルタナ連合軍』の盟主となったんだ。そして見事『獣人連合軍』を撃退した。歴史の長さよりも、歴史に名を残す偉業を成し遂げた方が立派に思える。サンドリアへの皮肉国家みたいだ。

三国をまとめたのは新興国家としての勢いだけじゃなかった。重商主義・中立主義を国の方針として、関税を始めとする様々な国家規制が他の国に比べて緩かった。薄暗い路地を歩けば、世を捨てた人を見かけることもある。犯罪者もきつと多いんだろう、警備隊の連中が、大勢で妙な奴らを取り囲んでる光景はざらだ。欲の皮の突っ張った商人も大勢いる。なんせここじゃ手に入らない物なんてないんだから。

そういう事から、ここには様々な目的をもった人たちが流入してきている。そして色んな種族の人間がいた。

背が高くて、耳が尖った『エルヴァーン』。

エルヴァーンよりも背が小さくて、世界で最も人口の多い『ヒューム』。

兎みたいに小さくて、魔法が得意な賢い『タルタル』。

猫の耳と尻尾を持って、ヒゲまで生やした『ミスラ』。

エルヴァーンよりも大きくて、岩のようにゴツゴツした『ガルカ』。

差別なく色んな人間がいた。

下層区には、『獣人』の『ゴブリン』も住んでいた。背が小さく、タルタルと同じ程度だ。

俺はあまり話さないが、カタコトで人間の言葉を喋る。マスクが好きなのか、ないと生きていけないのか、必ず鉄製や皮製のマスクを着けている。こいつらは邪神『プロマシア』の子、その一種族だった。俺達人間は、女神『アルタナ』の子で、そもその生まれが違っていた。そのせいか、昔からいがみあって生きてきた。

個人的な感情を言えば、俺はゴブリンが嫌いだった。がめついし、人を襲う。以前、俺がこいつらの店から好物のかぼちゃのパイを買い取った時だ。『クロウラー』の卵の入った、ゴブリン族伝統のパイの方がうまいなんて言いながら、焼きたてのかぼちゃのパイに平気でそれをねじこみやがった。蟲の卵なんて食いたかねえが、せめて調理しやがれてんだ。しかもこれで金を請求するんだ、どんだけ面の皮が厚いんだか。一度マスクを剥いで顔を拝んでやりたいね。

こんな事もあって、五年経っても慣れやしない。アイは、ゴブリン達の容姿を見てかわいいと言う。どこがだ。どいつもこいつもマスクをしていて、そもそも顔の区別なんてつきやしない。やっぱり馬鹿だ。

人間でも獣人でもないが、チョコボという大きな飛べない鳥もいる。経済の中心であるジュノでは欠かせない動物だ。馬車を引かせるためだ。とても力が強い。もちろんサンドリアにもたくさんいる。王立騎士団の連中が飼育しているのは、戦場で騎乗するための戦鳥だ。品種改良をされていて、持久力に優れて少し大きい。免許がないと乗れないが、俺達は傭兵団の経費で試験を受けさせてもらった。当然俺は一度で合格した。

けど、アイは規定のコースを覚えられずに、四回も落第してたな。顔馴染みになった教官だけじゃなく、チョコボにまで馬鹿にされていた。気位が高い、よく羽根の手入れされていた赤いチョコボがいた。そいつが騎乗拒否の合図を出したのを見たときは、大爆笑させてもらった。あいつは絶対に一人で仕事できないな。

俺たちはジュノについてすぐに、ミスラの『テイルダ』に出会った。

下層区の競売所の喧騒に耳をやられ、行きかう人々の熱気に当てられてアイは参ってしまった。少し休ませてやろうと思って、やせっぽっちの体を背中に抱えると、海に見えるテーブルとセットにな

った椅子に座らせてやった。

海が運んでくる潮風は、少し磯のかおりがしていた。時折カモメが、少し低くなった太陽の日差しをその体でさえぎった。

参っていたのはアイだけじゃなかった。俺も正直、どうしたらいいのか分からなかった。こんな都会に知人や友人はいなかったし、ましてや親戚もいなかった。アイに仕えるはずの使用人達も今はまだいない。勢いだけで飛び出して、やつとの事でついたジュノで既に精根尽き果たしていた。街を行きかう人たちはみんな忙しそうに歩いていた。田舎から出てくる人間なんていくらでもいた。だから俺達に声をかけてくれる人なんていなかった。

アイと一緒に、椅子に座ってうな垂れていると、不意に背中を小突かれた。振り返ると、座った俺と同じくらいの背のミスラが首を少し傾げてテーブルを指さしていた。

「あんた、そこは休む場所じゃないんだ。勝負する気がないんなら、とっとどいておくれ」ミスラは、右手にサイコロを二つ持って器用にもてあそんでいた。

サイコロで勝負？ どうやらこのテーブルでは、普段ろくでもないことが日々繰り広げられているようだった。

「勝負ってなんだよ。今、連れが調子悪いんだ、ほっといてくれ」

「いいよ。邪魔になるから別の場所で休もう？」アイは、杖を手に取りとふらつきながら席を立とうとする。

「ここは『コルセア』って海賊の、ダイス遊びをするところなんだ。女の子は、そのままでもいい」けど――とミスラが続け「あんたはどきな」と、俺を睨みつけて言い放った。

高圧的な台詞を受け、俺は黙って目の前の小さなミスラを睨み返した。

「ふんっ。いかにも田舎の騎士の国から出てきたって顔してるね。威勢ばっかよくて、怠け者の顔してるよ。この程度でへばってちゃ、この世界じゃ生きていけないよ。だいたい調子が悪いのはその女の子じゃなくてあんただろう？」猫のような左耳をぴくりと動かして、

挑発を仕掛けてくる。

「ごちゃごちゃとうるさいな！ そんなに勝負したけりややってやるよ！ ただし、俺が勝ったら黙ってここから失せろよな」ミスラに凶星をつかれた俺は、ついカッとなった。

俺は人差し指でコツコツとテーブルを叩くと、椅子に座るようにミスラに促した。

アイが困った顔で俺を見つめている。やめろ、と言われても無理だ。こいつを追っ払わないと気が済まない。ミスラがチョコボにまたがるように、向かいの席につく。

「条件が――そろってないね。あんたが勝ったらあたしはここから消える。けど、あたしが勝ったらどうするんだい？」

「おまえの好きなようにしろよ！ いいからさっさと始めるぞ。ルールの説明はいい、田舎の騎士の国の人間だってテーブルゲームくらいするんだ」

「言ったねえ、覚えておきなよ」クスクスと小さく笑って、サイコロを差し出してきた。

ルールは簡単だった。この『ベンチャーロール』という遊びは、出目が一から六までのサイコロを振って、数字を十一に近づけた者が勝つ。出目の合計が十二以上になると、『バスト』。つまり、どぼんだ。サイコロをこれ以上振らない場合は『ホールド』を宣言して、出目を確定する。十一を超えない範囲で高得点を出さなきゃいけない。

サンドリアの『獅子の泉』って酒場で、ゴロツキ連中が一夜で人生を破滅させるほどのギルを賭けていたのを見ていたことがあった。品のいい遊びじゃなかったから、親父は嫌ってたな。

アイもルールを知っていたので、しぶしぶディーラーを務める。ディーラーと言っても、プレイヤーの出した結果を確認をするだけの簡単な役回りだ。

俺はミスラからサイコロを一つ受け取り、指先で弾く。出目は――五。ミスラが既に二回目を振っていた。出目に納得したのか、不

敵な笑みを浮かべ、ちらりと俺を見る。

十か？ 十一か？ 自信満々な顔してやがる。十一を引き当てないと負ける。せめて同点を狙わないとな。じわりと汗が滲む。

二回目のサイコロを弾く。出目は――四。だめだ！ 出目の合計は九。次の出目が、一か二じゃなきゃバストだ。期待値は低め……、でもやるしかない。

三回目のサイコロを弾く。出目は――四。

――やっちゃまった。出目の合計は十三。バストだ！

「ホールド！」ミスラが、出目を確定した。「どうやら勝負あったようだね」

「十三だ。バストだよ」もう投げやりな気分だった。

アイが、ミスラのサイコロの合計値を言う。「ミスラさんは、えっと、七です」

「は？ 七……。なな？」聞き返す。

「なな、だよお」アイが言う。

「くっそお！ 自信満々な顔してその出目かよ！ 卑怯だぞ！」

はあ、とため息を一つもらすとミスラが口を開いた。

「勝負つてのはねえ、時にはハツタリをかますことも大事なんだよ。あたしは一見賭博師に見えるかもしれないけど、案外堅実なんだ。あんたがあたしの表情から勝手に何かを汲み取って、変な汗をだらりと流してるから付け入れられるんだよ」ミスラは続ける。「あたしがホールドしたのは、あんたがおわっちゃった後さ。やっぱりこの世界じゃ生きていけないかもねえ？」ミスラが嫌味に視線を送る。「うるせえ！ どけばいいんだろ。でもアイは関係ないからな。そのまま休ませろ！」

俺は席を立ち、静かな波音を立てる海に体を向けた。変なミスラとサイコロで遊んでいたら、少し元気も出てきていた。

「誰が立ってって言ったんだい？」

「はあ？」俺は後ろから聞こえたミスラの言葉に耳を疑った。

俺はすっかり自分がこの場から消えればいいと思っていた。何を

言い出すんだこいつは、と涼しい風に少しのお別れを告げて振り返った。

ミスラはサイコロをテーブルの上から拾い上げると、俺の目を見て『条件』とやらを語りだした。

「あんたは言っただろう？ 好きにすればいいって」一息もせず続け、そして声を荒げた。「誰が立てと言った！ あたしの命令を聞く前に立ち上がるバカがいるかい！」

街を行く人々が足を止め、俺達のテーブルを見て何事かと目を見張る。でも一番驚いているのは俺だ。

「いいかい？ あんたには今日からあたしの子分になってもらおうよ。大体こんな年端もいかない女の子を、無理やり都会に引っ張ってくる男にはまかせてられないんだ。いいね？」

「ちよっ……」

「ちよっとも何もない！ もう決まった事だよ！ さあ、分かったら座るんだ」

俺は自分よりも、遥かに小さなミスラの剣幕におされて仕方なく座る。

「よし！ いい子だ。契約成立だね」

「いや……」

言いかけると、ミスラはさえぎるように喋る。

「あたしの名前はティルダだよ。ティルって呼びな」

この人にはきつと勝てない、俺はそう確信しつつ、軽はずみな自分の発言を恨めしく思った。男を上げるためにも俺はここに来たんだ。男に二言はない、……はずだ。

「俺の……、俺の名前はソレ」

「そう、ソレかい。いい名前じゃないか。あたしは好きだよ、お日様」ティルは口の端を上げて、空に輝く太陽を眩しそうに見上げた。顔を下ろして、「その子はアイだね。今日からよろしくね」と、アイを見て優しく微笑んだ。

「はっ、はい」アイも、雰囲気流されるまま承諾した。

こうして俺達はティルの子分になった。都会に出てきて一日目にして職にありつけたのは、幸運だったのかもしれない。でも、あの時のティルは本当に怖かったな。サンドリアの周りをうろついているオークなんて比べ物にならない。

ティルは傭兵団を組織していた。『セイント』って名前だ。傭兵はギルドで仕事を請けて、主に街の人たちや行商人を魔物から守って生計を立てている。冒険者と違って、魔物や動物を狩って毛皮を剥いだりはしない。傭兵団を組織するにはジュノ政府のライセンスが必要だった。政府公認になるには、『とてもとても』厳しい審査があるらしいが、どんな条件なんだろうな。

しかし、ティルの顔とあの性格を思い出すと妙に納得のいくところはある。とにかく俺はそんなティルに拾われた。ついで、という訳でもないが、その場にいたアイもその団員になった。ティル、すまん迷惑かけて。

本当のところ、どうして俺達を世話してくれる気になったんだろう。結局、それを聞く機会を逃して今に至る。

俺は『陽気な吟遊歌人のハチミツ酒亭』を出た。闇に染められて、灰色になった海を見ながら酔いを醒ます。ここで過ごしてきた五年間を思い返して、理想の生活を送っているかどうかを自問するんだ。最近ほぼ毎日だ。思ったほど都会ってやつも楽しいわけじゃない。ジュノで傭兵稼業を始めてもう五年になったが、求めていた刺激なんて手に入っちゃえば退屈な日常でしかない。一人で飲んでいるとこんな事ばかりを考えるようになった。

でも、今日は一人にはなれなかった。居住区の方から来たティルが酒場を一度覗き、外に出ていた俺を見つけて歩み寄ってきた。

「こーら、ソレ。あんた、また一人で飲んでたのかい？ たまにはアイも誘ってあげなよ。きっと喜ぶよ」

「ほっといてくれよ」右手をひらひらと振り軽くあしらう。

「そんなこと言ってるから、あんたとアイは一向に進まないんだよ」

ティルは小さな肩をすくませて続ける。「もう出てきて四年かい？」

「五年だよ」

「そうかい、五年も一緒にいるのに、なんて意気地のない男だよ。うちの旦那みたいに迫る時は勢いでいいんだよ」笑いながら俺の肩をぽんぽんと叩く。

「別に俺とアイはそんなじゃないよ。ただの幼馴染だって言うてるだろ？ ティルがそんなことばかり言ってるから、『キョウ』や『しっぽ』にからかわれるんだ。ほどほどにしてくれ」俺はティルのでたらめな態度に少し腹が立っていた。「アイの面倒はティルが見てくれればいいだろう？ だいたい、呼び出しておいて二時間も遅れてそれかよ」

ティルは困ったような顔をして、細い顎に手をやり後ろを向いた。そしてすぐに振り返り、本来の用件を話し出した。

「そうだった！ 今日はソレに説教を言いに来たんじゃないんだよ。ギルドから仕事ぶんどってきたから、退屈そうなあんたに回してあげようと思ってね」

いつもの事だが、この人は仕事を取ってくるのがうまい。ぶんどってくるなんて言ってるが、『セイント』に直々に仕事を回してくれるギルド員が大勢いる。賄賂でも贈ってるんだろうか？

「なんだい、その顔は。団長に向ける顔じゃないね、それは」

勘がするどいな。

「いいから話せよ。どんな仕事なんだ？ 退屈な仕事はごめんだよ。俺は剣で稼ぎたいんだ」俺は強引に切り返す。

「まあいいわ」ティルは、ふんつ、と鼻を鳴らすと真面目な顔をして続ける。「今回の仕事は結構ハードだよ。最近、『ジャグナー森林』に出没するようになった『ゴブリン盗賊団を退治しろ』というお達しだ」

一章 二節 行商人

ジュノとサンドリアを結ぶ陸路の、その中程に存在するうつそうとしげった森。大きな甲虫が羽を広げて木々の間を飛び、夜には黒く大きな虎が跳ねるように我が物顔でうろつき、肉を求めてさまよう。『樹人』と呼ばれる巨木の姿をした化け物もうようとし、一度街道を離れば命の保障ができない魔の森。

中でも恐ろしいのは人間を狙う『オーク』族だった。ガルカのような大きな体、鋭く濁った目、大きな口、尖った歯。ずる賢く、強い力を持った、邪神の子の一種族だった。サンドリアの――エルヴァーンの宿敵と言える種族だった。

南にはかつて、サンドリア領地の村『ラヴォール』があり、今はオークの軍勢に支配され忘れ去られた村となっていた。

ジャグナー森林はそういった恐ろしい者達や敗北の影を、巨大な緑の手で覆い隠していた。

ジュノとサンドリアは空路でも結ばれており、『飛空艇』と呼ばれる空を飛ぶ船で貿易をしていた。飛空艇は、ジュノ大公国だけが持つ最新技術の粋を集めた乗り物だった。

商品の輸入と輸出は陸路が二十五%、空路が七十五%と、ほとんどを空路が占めていた。それでも陸路を少し外れた所にある、冒険者が集う砂丘の町『セルビナ』には飛空艇が運行しておらず、行商人の独占市場であった。

もう冬も間近な時節だった。どんよりした空が獣人達を喜ばせた。ここ最近、この森林を根城にして金品や武具を奪うゴブリンの盗賊団が出没している。行商を守るために傭兵は存在しているが、あまりにも頻発するのでギルドだけでは手が回らなくなっていた。

まだ昼を少し過ぎた頃だった。うすら暗い森の中を、四人の行商人が辺りを警戒しながら馬車を引いていた。行商人は皆、ローブを

目深に羽織り、早足でならされた街道を歩いていた。警護をする傭兵は連れていなかった。

季節のせいかな、しんとした森には車輪が発する軋んだ音だけが響く。

短い銀髪をツンツンと尖らせた利発そうなエルヴァーンの男が一番前を歩き、チョコボの手綱を引いていた。意志の強そうな瞳を輝かせ、魔の森を楽しんでいる様子さえ窺えた。

そのすぐ左には、ツンツン頭の袖を掴んで歩くヒュームの女の子。小柄だ。セミロングの黒髪が歩みに合わせて揺れ、表情の一部を隠しているがどうやら怯えているようだ。

馬車の左後方にはポニーテールを短く結ったエルヴァーンの男が歩く。背中には大きな荷物を背負っていて、ローブに無様な膨らみを持たせていた。研ぎ澄まされた目つきで真っ直ぐ前を見ている。

馬車の右後方には、スキンヘッドのヒュームの男がゆらゆらと足を進めている。こわもてのその男は堅気の人間には見えなかった。

「ううっ、寒いし暗いし怖いし、もう帰りたいよお」ヒュームの女の子が行商という仕事を後悔し、ぼやいている。

「おい、これは仕事だぞ。もっと緊張感を持てよ」先頭に立つ背の高いツンツン頭が女の子をたしなめる。

女の子は、その言葉を意に介さず手を重ねてブツブツと祈っている。

「ゴ布林さん、ゴ布林さん、どうか出ないでください」

「あのなあ、それじゃ仕事にならないだろ」ツンツン頭は女の子に困った顔を向ける。

「……しっ、気配がする」ポニーテールの商人がつぶやくように言った。

「ひえ！」女の子が動転して、足元の小さな石につまづきそうになる。

「ジェイの勘はいつもどおり鋭いな。それにしても、呼んでもないのにご苦労なこったねエ」

スキンヘッドはポニーテールの商人に感心しながら、腰に下げた東方の剣の柄に手をやり、シャリシャリと小気味よい音を立てて引き抜く。見るからに切れ味のよさそうな白刃が全身を晒した。

「遠慮してねえでかかッてきなッ！ こいつのサビにしてやるぜッ！」

スキンヘッドが刀を抜いて叫ぶ。それと同時に、既に馬車を囲んでいた二十数匹のゴ布林達が樹木や岩の後ろから一斉に現れた。

「ちょッ！ こんなにいるのかよ、ちきしょうッ！ こりゃ割りに合わねエなあ、ソレ隊長」

スキンヘッドが苦笑いを浮かべ、頭に手を滑らせながら軽口を叩く。じゃまくせエ！ とローブをはぎとり、その場に投げ捨てた。

ゴ布林達は、マスクの隙間から覗かせる目をぎらぎらさせながら、ゆっくりと円陣を縮めてくる。

チヨコボがグエツと鳴いた。

「ああ。確かに割りに合わないなッ！」

名前を呼ばれたツンツン頭はそう言い放ち、目の前のゴ布林にローブを投げつけると、即座にロングソードと小型の盾を構えた。

突然暗闇に襲われたゴ布林は、ブエツブエツ、と奇声を発しながら必死にもがいていた。ゴ布林の仲間たちがそれに反応し、攻撃態勢に入る。

木々の間を身を切るような風が吹いた。

「ジェイ！ キョウ！ 馬車の前面に活路を開け！ アイ！ ジェイに続け！ 俺は後方を守る！」

「あいよッ！」

「……おう」

「はいい！」

ジェイと呼ばれたポニーテールの商人は、ローブを素早く脱ぎ馬車の前方を目指す。そして走りながら背負っていた大きな戦斧を構え、横に一閃薙ぐ。飛び掛ってきていたゴ布林二匹に、鋼鉄の塊が命中する。斧に弾き飛ばされ、弧を描いて地面に落下し、二匹は

勢いでゴロゴロと転がっていった。

キョウと呼ばれたスキンヘッドが、ジェイに続き走り出す。それに怯む事無くゴ布林達が続けて地面を離れ、ジェイと女の子の喉元を狙い、一直線に剣を向けてくる。女の子が反射的に座り込んだ。「おらよッ！」

スキンヘッドが、一つッ！と刀を振るう。ジェイに剣を向けたゴ布林が体を横に真っ二つにして、暗い森に真っ赤な花をはじけさせる。その勢いを活かし、全身をくると一回転させ、二つッ！と女の子の頭上を飛ぶ、目標を失って啞然としているゴ布林に叩き込む。刃先のみで喉を切り裂き、宙にささやかな紅葉を咲かせた。

女の子は目の前の光景に腰を砕いて座り込んだままだ。

スキンヘッドは、へへッ、と満足そうに笑うと、血走った刀が次の獲物に目掛けて鋭い白刃を突き立てる。刃先が次へ次へと、革鎧や金属の鎧を裂き、皮膚を貫通してゆく。

団子のように串刺しになった三匹のゴ布林をそのまま持ち上げると、右後方で弓を構えていたゴ布林に向け、振り子の原理でぶん投げる。ギャツと一鳴きすると、弓矢のゴ布林は三匹の死体に押しつぶされた。

ゴ布林達はなおも前進してくる。どうやら数の多さで圧倒できると考えているようだった。

もう、と女の子が不満を口にする。「キョウシロウ！わたしに当たったらどうするのよお！」と、キョウシロウの手を借りて立ち上がり、お尻を払いながら怒っている。

「おいおいアイさん、つれないねエ。俺の生まれた国じゃあ、かわいい女の子に花を贈るのが礼儀なんだぜ」

「うれしくない！」

「あら？ 団子の方がよかったか？」

「いじわるっ！」

「花も団子もあれば、お花見になるぜエ？」

「それにしてもキョウ、刀つてのはつくづく恐ろしい武器だな!」
ソレがキョウシロウを冷やかす。

「ちげエよ。俺自身が恐ろしい武器なのよッ!」

「……油断するな」キョウシロウの背後を狙った弓矢のゴブリンは、
ジエイにクロスボウで射抜かれた。

「ヒュー! 相変わらず器用だねエ!」キョウシロウが軽く口笛を
吹く。つるりとした頭と、尖らせた唇が相まってタコのようなだ。

ソレは、チョコボと荷車を結ぶ縄を剣で切り離した。チョコボは
クエッ! と鳴き、羽根をバタバタとさせると、空に舞った落ち葉
に紛れるようにして一目散に逃げ出した。ゴブリン達はそれに一瞬
たじろいだ。

ソレは狙いすましたようにその機会を捕まえて、
「アイ、敵の目を潰せ! ああ岩場まで走るぞ!」と、前方のゴツ
ゴツした岩場を指す。

「はい!」

アイという名前の女の子が、得意の白魔法を詠唱し始めた。もう
その顔に怯えはない。彼女を中心にしてまばゆい閃光が走り――木
の上で休んでいた鳥たちがそれに驚き、こぞって枝を離れていく。
枯れかけた葉が降ってくる。

合図をしなければ仲間も巻き添えになるほどのまばゆい光だった。
目をくらませたゴブリン達を尻目に、四人は大きな一枚岩の後ろに
潜んだ。

ふう、と一息ついてキョウシロウが口を開いた。

「行商人に化けるたあ、ソレもなかなかおもしろえ事を考えついた
じゃねエか。敵さんはまんまと引ッかかってくれたな」

「アイが、『武器を構えて歩いたら、ゴブリンさんも襲ってこない
よ』なんて言うからな。なるほど、と感心させられたよ」ソレはア
イに視線を向ける。

「うう、変な事言わなきゃよかったよお」アイは、ソレのイタズラ
な目を見て恥ずかしそうにうつむく。

「……どうする？」クロスボウに矢を装填しながらジェイが言う。
ソレは、自分達を隠している大きな岩の姿を一度確認すると、うん、と一つうなずいた。

「ジェイ、上からの援護を頼む。アイ、おまえは魔法で動きを止めろ」

返答の代わりに、アイが呪文を唱え始める。

さきの閃光の魔法は効き目が長く持たなかった。ゴブリン達はすぐさま四人を追いかけ、身振り手振りで合図を送りあって、一枚岩の横両面から挟み撃ちを仕掛けた。

だが、一番最初にそこを覗き込んだゴブリンは不幸だった。バコッ、とソレのなまくらなロングソードが、鍋を被ったゴブリンの頭を叩き割る。鍋頭は火花を散らせてその場で倒れ伏した。その反対側では、キョウシロウがまたも鋭い一撃でゴブリンを貫いていた。

アイが岩の上に顔を出す。彼女をほとんど投げるような形で、ジェイが上に押し上げていた。

「ビリビリ痺れていてくださいい！」アイが片目を閉じて両手を前に差し出すと、手の平の前方に魔力が集中する。

辺りの空気が一瞬ヒヤリとした。アイの手から強烈な冷気が吹き出し、勢いをつけて放射状に広がり、岩のゴツゴツしたラインに沿って降りていく。冷気は岩の表面に小さな霜をプツプツと造っていくと、そのまま数匹の敵に降りかかっていった。

猛突進してきていた三匹のゴブリンの内二匹が、冷気に絡め取られ足をもつれさせた。一匹は突然持っていた武器を落とし、繰り返し何度も拾おうとしているがうまく手を動かす事ができないようだった。

麻痺の魔法は成功した。

「アイ！ちゃんと敵を見て狙え！麻痺の魔法が味方に当たったら大惨事だぞ！」ソレが叫ぶ。

「三匹に当たったよお！」泣きそうな声を出しながら、ジェイの肩を借りて滑るように下に戻る。

すぐさま、ジェイは超人的な跳躍で岩に飛び乗ると、クロスボウの矢を降らせてゆく。丁寧な素早く正確にゴブリン達の胴や、マスクを着けた頭に木製の棒を生やしていった。

うおおおおっ！ とジェイが大きな声で叫ぶと、ゴブリン達は岩の上の大男に視線を集中させる。

キョウシロウが、その一瞬、まばたきする間の隙について岩の前面に躍り出る。

「背後からブスリなんて、武士の風上にも置けねエがな！」

ゴブリンの後ろを取り、真っ直ぐに上から刀を振り下ろし一刀両断する。ついでのように、足を止められた二匹のゴブリンに迅速に近づいて、柄を逆手に持ち替え、つまようじを扱うように急所を狙ってブスリ、ブスリ、と差し込んでいく。ニヤつきながら、やわいねエ、とこぼした。

「俺は生き残るためなんでもするぜエ？」

「キョウの辞書には『正堂堂』という言葉は無いようだな……」

ソレがそう毒づくくと、ゴブリン達もやっとこの事態を察したようだった。彼ら傭兵団には、騎士道も武士道もあらゆる信念も、一度戦闘が始まれば関係がなかった。

生き残る事のみが唯一のルールだった。

「さあ！ どうするゴブリンども！ これで終わりか！」ソレは、これを機としてゴブリンを揺さぶる。

あつという間に数を減らされたゴブリン達は、相手にしている人間達が自分達よりも恐ろしく狡猾で強大な力を持っている敵だと判断した。そして誰の命令もなく一人、一人と顔を見合わせ、背を向けて南の方向へ逃げ出した。

最後尾の大きなバグを持ったゴブリンが、走りながら黒い玉をソレ達の隠れる岩の前——キョウシロウの背後へ投げつけた。石の地面に落ちた玉はゴトリと鈍い音を立て、灰色の煙を上げている。

「まずい！ あれは爆弾だ！ キョウ、戻れっ！」ソレが大声で知らせる。

「なんだなんだッ？」

「ええーっ！」

「……問題ない」

うろたえるキョウシロウとアイをよそに、ジェイは岩の上から爆弾の前に飛び降りた。そして胸のホルダーからナイフを抜き、息もつかせぬ早業で導火線を断ち切った。刃の先には、行き先を失った火花が短い線を辿り、ふっと消えた。

既に、玉から伸びている導火線は二ミリもなかった。

「……これで大丈夫だ」

「おいおいおいッ！」とキョウが目の前のお出来事に声を高くする。「人間技じゃねエぜそれ！　ツつかすげエ度胸だな！　俺でもできるかな？　今度挑戦してみねば！」興奮し、唾を飛ばしながら喋る。

「……やってみたらいい」

「うーん……、ジェイって人間なのか？　どうも同じエルヴァーアンとは思えないんだが」ソレが思ったことを口に出した。

「……慣れればどうという事はない」

「ジェイってやっぱりすごいね！」

アイが素直に褒める。ジェイは少し照れながら口元を緩めた。

「にしても、予想外の敵の数だった。追っ払って正解だったな」ソレは安堵の表情を浮かべながらロングソードを鞘に納めると、肩を回しながら緊張をほぐした。

「うんうんっ！　怖かったしい！　でも、私達ってとんでもない行商人だね！」アイが茶化して、クスクスと笑う。

「追うか？　分かりやすくあっちだけに逃げてくれてるが」キョウシロウが親指で南を指しながら、ソレの判断を仰ぐ。

誰一人として怪我を負っていない事を確認すると、ソレは片側の口角をくいと上げて言った。

「もちろんだ」

一章 二節 行商人（後書き）

>i15982—2219<

一章 三節 キノコの谷のモスフングス

ゴブリンは案外バカにできない頭脳を持っている。さっきの奇襲じゃ、俺達に気付かれないようぐると周囲を囲んでいた。もつとも戦術に関しては褒められたもんじゃないが……。

奴らは薬剤を混ぜて爆弾を作ることだってできる。手先も器用だし、作った爆弾を人間社会に売りにくるぐらいの商売上手だ。

まあ囲んでいたのも、苦し紛れの爆弾にしても、傭兵団一の超人、ジエイによってことごとく失敗に終わってるんだけど。

しかし、惜しい気がする。もし、その頭脳を一層活かす事ができたら、人間とこんな風に争う事もないはずなのに。俺だってもつとゴブリンの事を身近に感じられたかもしれない。

俺達は生い茂った針葉樹の木々を避けながら走った。最後尾の、大きなバッグを担いだゴブリンのケツを追いかける。まだ気付かれていない。暗くなる前に決着をつけないとオークの餌食になっちゃうな。奴らは夜目が効く。この森林は奴らにとって最高の場所だ。ここで夜を迎えようものなら、たったの四人じゃ生きて帰れない。

ここにはサンドリア王立騎士団の手も届かない。ラヴォール村を盗られちゃった時点で、完全にここの管理を放棄してるんだ。

俺がもし騎士団に所属していたら、絶対にこんな状況にしたまま放ってはおかない。オークを片っ端から殺して、仲間が味わった苦しみを倍にして味わわせてやる。俺からお袋を奪った連中を、我が物顔でのさばらせたりはしない。

……やめよう。俺は騎士団には入らなかった。きらびやかな都会に憧れ、騎士道を捨て、親父の気持ちを裏切って、お袋の敵討ちも忘れ、自分の人生の充実だけを追いかけて傭兵になった——自分で選んだんだ。

「なあキョウ。奴らが逃げているのはやっぱり盗賊団のアジトだと思うか？」

俺は少し大きな声で問いかけた。

「だと思うぜ。ただあの場から逃げるだけなら、方向なんてどこだっていいだろ。きつとあのチビどもの秘密基地がこの先にあんだらうよ」キョウは前だけを見ながらそう返す。

「……ソレ。少しペースを落として走ろう。気付かれる」

時間を気にしすぎていた。少し焦っちまってる。ジェイの忠告に従い、俺達は速度を緩めた。

アイが何故かホッとした顔を浮かべている。こいつは何をしにきているんだ。緊張感のなさが目立ちすぎるぞ。後でおしりぺんぺんしてやる。心の中で八つ当たりを誓う。

しばらくすると視界の先に、ところどころに緑の苔を蓄えたそれほど高さのない崖を捉えた。どうやら森の南方は、この崖によって森の外と断絶されてるようだ。そう判断できるくらい東西の両方にずーっと伸びているのが見える。

ゴ布林達はその崖に向かっていているようだ。と、不意に大きなバツグのゴ布林が足を止めた。

みんな、止まれ、と顎で合図をし、全員で木の裏に隠れてかがんで身を潜めた。

ジャグナーにこんな場所があったなんてな。ジュノを目指して行商人と旅をした時は街道しか通らなかった。まあ道から大きく外れたこの場所に来るような人間は、世界に何も期待をしていない自殺者か、邪悪をたくらむ暴力団くらいなものだろ。前者は間違いなく自殺する前に、オークか虎に食われておしまいだろうが。

「どうやらそこが奴ら、ゴ布林盗賊団のアジトみたいだ」

切り立った崖にぼっかりと口を開けた部分を指差す。最後尾のゴ布林は辺りをキョロキョロと見回すと、洞窟の中に入っていた。俺を含め、四人が肩で息をしていた。結構な距離を走った。この辺りは湿気が多く、革の鎧の中には汗の滝ができていた。立ち上がると、胸の辺りに生じた小さな気流が一瞬体を冷やした。歩を進める。

こりゃ、すげエー——キョウが大げさに言う。

「何がすごいんだ？」

「おいおい、おまえには崖と洞窟しか見えてねエのか？　左を見てしろ」

俺はキョウに言われた通り、左に視線をやる。樹木が一切ない開けた場所があつて、そこには俺の倍くらいの背を持った巨大なキノコが、所狭しと群生していた。

「わああ！　でっかいキノコ！　これってモスフングスだよね？

ここまで大きいのは初めて見たよお！」アイが聞きなれない名前を出す。

「……キノコの谷」ジェイがぼそりとつぶやく。

「モスフングス？　キノコの谷？」サンドリア出身の二人が知っているんだから、常識的な事なんだろうか？

たくさんのキノコはでかいだけじゃなくて、笠の部分が毒々しい紫と赤のまだら模様で埋め尽くされている。火を見るより明らかな警告色だ。自らを捕食させないために『自分は毒を持っているんだ、食べればただじゃすまないぞ』と、色や姿で警告を出している動植物がある。

頭の形が三角に近い蛇ほど毒を持っている可能性が高い、とも聞いた事があるな。生物が持つ様々な姿はただの飾りじゃない。何かしらの意味があるものだ。不用意に近づいてはダメだし、匂いを嗅ぐなんて事はもってのほかだ。

「今日は曇ってるけど、雨は降ってないから大丈夫だよね」

一体何が大丈夫なのか全く分からなかった。アイはそう言うのと、大きなキノコの傍に寄り鼻先を近づけて、すう、と嗅いだ。

「お、おい、それは毒キノコじゃないのか？　なんか危なそうな香りがするぞ」実際に強い匂いはしないが。

「ふふんっ。このキノコはね、薬の原料になってるんだよお。ジュノでしか買えないような強力な治療薬が作れるの！　毒薬だって作れちゃうんだよ？　ウンディが作り方もぼっちり教えてくれたの」

アイが得意げに話す。このキノコには思い入れがあるんだろう。昔を思い出しているのか、嬉しそうな表情を浮かべている。ホームシックになんきゃいいが。

それにしても貴族の家庭教師は毒物の作り方も教えるのか。……アイなんかに教えるところくな事にならないぞ。間違えて自分で飲んじまいそうだ。いや、むしろ調味料と間違えて人に食べさせてしまいそうだ。こいつに薬を作らせてはいけない。

「ねえねえ！ 今度ソレにも作ってあげよっか？」

「いや、いいよ。アイが作ったものなんて怖くて飲めない」我ながらさざりどいひどいことを言った。こんな気色の悪いキノコから作られた薬なんて飲みたくない。

「ははッ！ 間違いねエや！ アイの料理も一向に上達の気配がねエしな！」

それは言ってる。

「ふんっ。誰も薬を作ってあげるなんて言っていないじゃない！ いもん、ソレには毒薬を作ってあげるから。キョウシロウには毛生え薬でも作ってあげるよ。ジェイにはちゃんと治療薬を作ってあげるからね」

「……ありがとう、アイ」

最初の被害者、ジェイ。

「俺はハゲじゃねッつうの！ 剃ッてるのッ！」キョウが頭をさすりながら、にしても、と続けて「これ、気にならねエか？」と、地面の黒くなった部分を指差して言った。

悠然とこの広場を支配しているキノコとキノコの合間に、焚き火の跡がいくつも点々としている。地面からは、雨を待っているのか小さな緑色のカエルが顔を出していた。

こんなところでキャンプもないだろうに、なぜこんなに焚き火の跡があるんだ？ 盗賊団と何か関係が？ よく見るとキノコの刈り取られた株もある。切断面を無造作に晒したその株も一つや二つじやなかった。

広範囲に渡るたくさんの焚き火の跡、刈り取られたキノコ。うーん……、分からんな。キョウも神妙な顔をして考えているようだ。不真面目なこの男も、任務上でぶち当たる謎や不思議な事に関しては人が変わる。思えばテイルと話してる時はいつもこんな顔だったかもしれない。……なんとかそんな場面を思い出そうとしたが、いつもの酒で酔っ払っただらしない顔しか浮かんでこない。考えすぎだな。無駄な労力を使った。

「なあ、これはキャンプの跡だと思うか？」

「うーん……、それはありえないと思うよお」アイが短くうなづいて答える。

「どうしてだ？」

「モスフングスはね、雨が降ると笠から胞子をばらまくの。その胞子はすごく強い毒性も持っていて、笠を使った雨宿りなんてできっこないよお？」アイが笠の部分の指先でつつきながら言った。

なるほど、雨が降ってないから大丈夫ってのはそういう事だったのか。しかし毒を飛ばすとはなかなか積極的だな。いや、それにしても結局のところ、これは毒キノコなのかよ。見つけてすぐに匂いを嗅ぎにいつていたが、アイの無防備さにはいつもながらヒヤヒヤさせられるな。

「しかしゴブリンだったらマスクをしてるから、胞子の影響なんてないんじゃないか？」

「確かにそうだな。すぐそこにチビどもの秘密基地があるんだ。こりゃキャンプの跡にちげえねえ」キョウが真剣な眼差しで、焚き火の跡を見つめて言う。

「……どうだろう」ジェイは何か疑問に思っているらしい。炭の力を足でいじりながら、物思いにふけている。

「もう！ マスクをしてるからって、ここでキャンプするわけないよお。焚き火の跡がたくさんあることもおかしいし、だいいち雨宿りならアジトの洞窟があるよお？」

——俺とキョウは顔を見合わせた。なるほど、こいつも見事にア

ホ面をさげているな。そして、キョウも今、俺と同じことを思っているに違いない。お互いにゴ布林より知能がある事を祈ろうか。

俺は都合よく本来の目的を思い出した。

「ま、まあこんな事はどうでもいいだろ。さあ、アジトへ踏み込もうか」

「……おう」

「はいはい……」

アイとジェイの視線は『計り知れない』ほど痛かった。

一章 三節 キノコの谷のモスフングス（後書き）

> i 1 5 9 8 2 — 2 2 1 9 <

一章 四節 人質

ジェイがキノコの谷で枯れ落ちた木の枝を四、五本拾っていた。腰に着けたバッグから油ビンと少し汚れた布を取り出し、簡素な松明を作っている。いつもながら準備がいいな。

「……カラ松はよく燃える」

「へえ！ ジェイって松明作れちゃうんだ！ わたしと一緒に器用なんだね！」

アイ、おまえは自分を器用だと思っていたのか。本気で思っているなら恐ろしい奴だ。キョウが笑いをこらえている。気持ちは分からないでもない。

そういえばジェイはラヴォール村の出身だったな。森林には街道が整備されていたとはいえ、村自体は僻地にあるから、食料のほとんどは自給自足だっただけ聞いた事がある。ラヴォール村に住むエルヴァーンは『フォレストエルヴァーン』って言われているくらい、サンドリアに住んでるエルヴァーンとは区別された存在だ。

村の父親は一家に男の子が生まれ、三歳になるころには弓矢での狩猟を厳しく教えると言われている。つまり幼い頃から森と親しんだジェイには、斧や弓を使う事も、火をつけることも生きるために不可欠ってわけだ。様々な武器を使い分ける器用さはそういう下地があっただろう。

俺もそろそろ見習わないと。……いや、まあ見習ってもこの人には一生追いつけないだろうが。

本当にこの上なく頼れる先輩傭兵だ。最近は俺がチームを指揮するようになったが、それはこの人の野生的な勘の鋭さ、知識、戦闘能力という土台があっただけ務められる役割だ。俺はジェイよりずっと傭兵経験が浅い。それでもついてきてくれるのは俺の成長を望んでいるからだろうか。もしそうなら、少しは期待に応えられているといいな。テイルに子守を押し付けられてるんじゃないかなおさら

いい。

故郷の村をオークに奪われた事を、どう感じているんだろう。親を殺される事と同じくらい辛いんだろうか。オークを憎んでいるんだろうか。不甲斐ない騎士団、国に憤りを覚えているんだろうか。この森に足を運ぶと、嫌な記憶が蘇ったりするんだろうか。

いつも冷静で、怒った姿を見たことはない。それどころか不満をもらしたこともない。いつも無表情のこの人からは、なかなか感情を掴みづらい。でも、きっと心の内に憎悪の火を抱えているんだろう。俺と同じように。

「……つかない」ジェイがカチカチと火打石を打ちつけながら言う。キョウがニヤけ面を向けている。おい、やめろ。ジェイとアイを一緒にするな。

「ジェイ、貸してくれ」

俺はジェイお手製の松明と火打石を受け取り、手早く火花を散らし火を灯す。森林の湿気のせいでつかなかったのか。もしや案外不器用なところがあるのか？ と、ジェイに親近感を覚え、同類を哀れむまなざしを送った。その意味を飲みこめないジェイは一瞬不思議そうな顔をして、にっこりと微笑み返してくれた。この人からしたらなんと失礼な事だろうな。すまん、でも心は自由なんだ。

「俺が前に立つ」そのまま松明を持ち、歩き始める。

洞窟の入り口に見張りはいなかった。エルヴァーンの背丈では頭がつかえそうなほど天井が低い。現にジェイは少しヒザを曲げないところに歩けないようだ。

洞窟の中は、目を凝らしても先が見えないほど暗闇がずっと続いている。ジメジメとした外気が、蒸れた鎧の中を不快さで満たしていく。

立て続けに起きたオマヌケ騒動から、俺達は完全に緊張感を失っていた。だが、ジェイが戦斧を両手で構えたと、辺りの空気がピンと張り詰めた。この寡黙な戦士が持つ集中力はいやでも俺達の戦意を奮い立たせる。キョウが刀の柄に手をやる。抜刀術の準備だ。こ

の状態から、攻撃も防御も自由自在にできるもんだから、『ひんがしの国』の剣士は恐ろしい。……たしかサムライだったか。

だが、この狭い空間で二人の武器は十二分に力を発揮できるんだろうか。もしかしたら俺達は敵の罠に誘い込まれているのかもしれないな。何にせよ準備を怠ると死に直結する。

「三人とも、よく聞いてくれ」松明を少し横に揺らし、三人の顔を見る。「洞窟の中じゃ、ゴブリンよりでかい俺達は不利だ。任務は殲滅だが、死にじまったら元も子もない。絶対に無理はするな。各自、逃走の準備をおろそかにするなよ」俺は口にした事で、自分の気持ちを引き締めた。

「そうだな。あの場から逃げたチビどもは、八匹だ。ここにはそれ以上いる可能性があるぜ。別の場所からここに戻ってくる事だって考えられる。挟み撃ちにされちまったら……、おじやんだ」

キョウが冴えてる。やっぱりただの戦闘狂ではないな。

「でもよお、刀ツてのは突く事もできるぜエ？ だから後ろは俺にまかせな」そう言い、へへっ、と笑う。前言を撤回する。

「ああ、分かった。でも油断はするなよ。アイは閃光の魔法の準備を頼む。暗いところで使えば、相当な効果を期待できるはずだ」

「うん。その時が来たらまかせて！」

「……アイ、頼りにしてる」ジェイが相変わらずの無表情で、アイを見て小さくうなずいた。

「うんうん、ばっちこいだよお！」

苔の生えた石の壁を伝って歩く。時折、小さな虫が手の上を這う。グローブをしてなきやアイが飛び上がるな。毒キノコは扱えても、虫はどうもダメなようだ。

ゴブリンが蟲の卵を使ったパイを食べると知ったら、あいつもゴブリンを嫌いになるかな。この任務が終わったら試してみよう。おしりぺんぺんの代わりだ。

虫を払いながら歩いていると、奥の方から明かりが漏れているのを見つける。目測四十メートル先、と言ったところか。

「……ソレ」ジェイが囁くように声をかける。

「ああ、分かってる。アイ、これを持ってる」持っていた松明をアイに渡す。「アイとキョウはここで待機しろ。ゴブリンどもが来たら知らせてくれ」

「うん、閃光の魔法を合図にするね」

俺はアイの肩をポンツと叩く。「二人とも、頼んだぞ」

「おう、片付けておいてやるよ」暗くて表情がよく見えないが、松明の明かりで頭が光っている。

「ジェイ、クロスボウで援護してくれ。まずは様子を見る」

「……分かった」俺から指示を受けたジェイは、すぐさまクロスボウを構えた。

ジェイと二人で薄く柿色に染まった壁を頼りに、慎重に歩を進めた。頬を伝う汗一つにも敏感になる。足元が真っ暗なせいで、時々小さな地面の隆起に足を引っ掛けた。

小部屋が見えてくる。何者かが手を加えて作ったようだ。

何やら騒がしく喋っている。しかし最低八匹はいると思っていたが、そんな気配はしない。洞窟に入ったのを正確に確認できたのは一匹だけだ。まだ奥に続いているのか？ それとも別のルートで逃げたのか？

俺は明かりを発している部屋を覗く。敵は——二匹だ。俺達が追いかけてきた大きなバッグのゴブリンと、金属マスクのゴブリンだ。喧嘩をしているのか、やたら大きな声で怒鳴りあっている。

他の六匹は洞窟内にはいなさそうだ。小部屋の右手にたくさん武器や防具が積まれている。行商人達から奪った物だな。その側に六十センチ四方の、頑丈そうな金属の箱がある。左右に取っ手がついていて持ち運びがしやすい。小さな壺もある。何を入れているんだろう？ 左手には小さな安っぽいベッドが二つ。

あれは——くそ！ なんてことだ。人間だ！ 盗賊団に捕まったのか。あいつら金や物を奪うだけじゃなく、人までさらってやがるのか。

ヒュームの男がベッドに寝かされていて、髪の毛は手入れされていない。長く監禁されているのか？ 歳は、三十前後と言ったところか。顔色は、暗くて確認できない。頼む、生きていてくれよ。

「ジェイ。見てみる」耳元で囁く。

「……人質か。身代金目的で捕まえている可能性が高い。……手足を縛られている様子はない。服装を見る限り、乱暴された気配はない」

ジェイの言うとおり、男は髪の毛こそ洗っていないさそうだが、綿の服と、その上に革の上着を着ている。目立って汚れはない。

「テイルから、盗賊にさらわれた人の話を聞いたか？」

ジェイが、かぶりを振って答える。「……いや。そんな話は一言も」

「そうか。とにかく助けるぞ」俺は一呼吸置いた。「気付かれないように仕留められるか？」これが確実だ。

「……まかせろ」ジェイがクロスボウに矢をつがえた。こちらに背を向けて喋る大きなバッグのゴブリンに狙いを定める。

その時だった。

「おまえらうるさいぞ！」

男は生きていた。体を半分起こし、ゴブリンに怒っている。元気はありそうだ。ゴブリン達が喧嘩をやめ、注意が男に向く。

殺されるぞ——この機会は逃せない。

「ジェイ、やれ！」

「……おう」

ビュッ、と風を切る音を放ち、矢は真っ直ぐに飛ぶとバッグのゴブリンに直撃した。後頭部から血が吹き出す。ひい、と男が声にならない叫びを上げる。

バッグのゴブリンが倒れきる前に、奥にいる金属マスクのゴブリンが曲刀を構え、突進してくる。既に二本目を装填していたジェイが、二発目を発射する。必然のように、矢先がゴブリンの金属の額に吸い込まれていった。そしてそのまま、ガシャリと音を立てて前

のめりにくずおれた。

早業だ。本来、クロスボウは連射に向かないが、ジェイならその性能を限界まで引き出せる。

「よし！」俺は何もしてないが、飛び上がって喜んだ。

「おい！ もう大丈夫だ。さあ、こっちへ」ベッドの側に寄り、男に声をかける。

「助けてくれえ！」

「大丈夫。大丈夫だから落ち着いて」

「どけ！ どけえ！」男は大声を上げて、俺達が通ってきた通路を目掛け走り出す。足がふらついている。ひどく顔色が悪い。恐怖で足がもつれたのか、俺の体に正面からもたれかかる。

「もう大丈夫だ！ もう、ここにゴブリンはいない！」さあ、と男の体を支える。

「離せ！ 離せ！ くそ！」

男はかなり錯乱しているようだった。俺を突き飛ばすと、フラフラとしたまま再び走り出す。

ジェイはそのあり様を静かに見ている。男が真っ暗な通路に消えていった。

ふう、とため息を一つつく。「監禁生活のせいで参っちゃったんだろうか？」

「……分らない。……ただ、妙な匂いがした」

「そりゃ、仕方ないだろう。こんな水もない湿気った穴倉に閉じ込められていたんだ」

「……違う。あれは……」

——通路の方から白い光が小部屋に溢れた。「アイだ！ ゴブリンがきたのか！」俺が合図に気付いて驚いている間に、既にジェイが向きを変え、閃光の散った方へ駆け出していた。

すぐさまジェイの後ろを追う。左手を壁になぞらせ、足を大きく広げて走る。もう音を気にしている場合じゃなかった。まずは二人を奥の小部屋まで呼ぶしかない。

「アイ！ キョウ！ 奥へこい、敵を誘い込むぞ！」俺は走りながら二人の名前を大きく叫ぶ。

この部屋なら戦える。通路から入ってくるゴブリンを一網打尽にしてやる。

「違うの！ 男の人が！」アイの声が少し先から聞こえた。そうか、人質の男が走ってきたから、か。

敵が来たら、魔法で知らせると言ったのに。あいつという奴は。二人を照らす松明の明かりが見えてくる。

「おい！ 閃光の魔法は敵が来たときの合図にしたらだろ」

「あう、ごめんなさい。でも……」

アイが謝っていると、キョウが口を挟んだ。

「待てよソレ。すごい剣幕で走ってきたんだぜエ？ 俺も、ちツとビビッちまったよ」

「まあいい。さっきの男は、ゴブリン盗賊団に捕らえられていた人質なんだ」

「そうなんだ。あの人は、怪我してないの？」アイが眉をひそめて言う。

「ああ、顔色はよくなかったが、どうやら怪我らしい怪我はない。ただ、ひどく混乱していて、助けた俺達にも怯えて逃げていったよ」男の事を説明していると、突然入り口の方から、ギャー、と悲鳴が聞こえた。

「くそ！ お次はなんだ！」

「……いこう」

一章 四節 人質（後書き）

> i 1 5 9 8 2 — 2 2 1 9 <

一章 五節 任務

ゴツゴツとした石の壁に手を滑らせながら入り口へ走る。敵が待ち構えていることを想定し、俺達は武器を構える。外に出ると、森は先程と変わらない静けさを保っていた。

ただ一つだけ違っていた。松明の明かりが、洞窟に入るときにはなかった地面の膨らみを煌々と照らしていた。人質の男が地面に突っ伏していた。

「おい！ 大丈夫か！」

声を掛けても反応がない。既に事切れている。胸の辺りから出血しているようだ。仰向けに倒れている男は、大量の真っ赤な血液を、惜しみなく苔の生えた地面に吸わせている。

「なんで……」アイが言葉を失っている。

周りには人影が一つもない。どうやら何者かがこの男を殺害し、すぐさま立ち去ってしまったようだ。

ジェイが男の側に座り込み、胸の辺りをまさぐっている。

「やめなよお、その人はもう死んじゃってるんだよ」アイは涙声で制止をかける。

革の上着をめくったジェイが、動きを止めてこちらを見る。

「どうしたんだ、ジェイ」

「……ナイフを持っている」ジェイの指し示した先には、ナイフの柄が見えた。

「おいおい、これはどういう事だあ？」キョウが眉をしかめる。「この男は、ゴブリンによって人質として捕らえられていたんだろ？ 得物を取られていないのはおかしいぜエ？」

どうということだろう。あの洞窟に監禁されていたと思われるこの男は、武器を持っていたのに抵抗しなかった。そして、身体検査も受けなかった？ いや、あり得ないな。

しかし、髪の毛も手入れはされていなかったし、ひどく生白い顔

をしていた。しばらくあの中で生活をしていたことは事実だろう。

そうになると、思い当たる答えは、自ずと一つになる。

「この男は、ゴ布林盗賊団の一味だったってことか？」みんなの表情を確認する。

「……手足を縛られていなかった。怪我もしていなかった。服装に乱れも見られなかった。……それらの事から仲間であつた可能性が大いにある」ジェイが俺の目を見て続けた。「……それに、この男からは特殊な匂いがする。……アイなら分かる」

そう言い、ジェイは革の上着の一部をナイフで切り取ると、アイに向ける。

アイはジェイを見据えて、コクリとうなずくと、その一部を鼻に近づけた。

「これは……、モスフングス……だと思う」

「分からないぞ。ジェイ、何が言いたいんだ？」俺はジェイの言おうとしていることが分からなかった。

洞窟の前に広がるたくさんのモスフングス。衣服にその匂いがつくことは、ここに長くいればごく自然なことじゃないのか？ 訝しげにジェイを見る。

ジェイの代わりに、先にアイが答える。

「ごめん、正確にはモスフングスの胞子だね」

「……分からないが、気にかかる」

ジェイも分かっているのか。でもこの人が気に掛ける事なら、不自然なことの一つなんだろう。

キョウが大真面目な顔をして、男の胸の辺りの傷口を見ている。顔色一つ変えないで、上着を丁寧に脱がしている。男の胸があらわになった。

「おい、これを見てみる」キョウが脱がせた上着で血を拭いながら、傷口の部分を指す。

「うう、みんなお願いね」アイが口元を押さえながら後ろを向く。おまえは仮にも手当てを得意とする白魔法の使い手だろう。そん

な事でいいのか。アイの反応に呆れる。いや、まあいい。いつもの事だ。

「こいつぁ……、かなり特殊な傷だぜ。心臓の辺りを、細く先の尖った刃物で一突きされてるようだ」キョウが、数センチの穴をぽっかりと開けた部分の周囲を、人差し指と中指を使って、視線の案内をする。

「この辺りは焦げちまってる。この痕を残せるのは、かなりの近距離で銃をぶっ放した時くらいだ」でも、とキョウが続ける。「火薬の匂いもしねエ。そしてこの傷は間違いなく刺し傷、……刃物の痕だ」

俺達が男の悲鳴を聞いた時、銃声はしなかった。傷口は、刃物傷。しかし、その周囲の皮膚の火傷。さらにモスフングスの胞子の香り。ダメだ。ぜんっぜん分からん！ 分かるのは、この男は正面から一刺しされたということだ。死体を発見した時にまだナイフを抜いていなかったという事は、顔見知りの犯行の可能性が高い。油断したところをやられたと見た方がいいな。

外の光を浴びたところで、そのまま永遠の闇に閉ざされたこの男の瞳は、何かを訴えるようにして、うすら曇った空を見上げていた。俺達にできることは多くはない。そんな目で期待したって、あんたの無念を晴らす事なんてできやしない。他を当たってくれ。

俺はパンツと、手を一つ叩き、

「この事はテイルに報告するということで、おしまいにしよう。俺達の任務は盗賊団の退治だ」と、アイの慈悲の思いを湛えた視線を見ないふりをした。「暗くなる前に帰らないと、オークどもの晩御飯になっちまうぞ」

「この人は埋めてあげないの？」

直球で来たか。まあそうするのが人としての道理なんだろうが、こいつの墓を掘ってたら自分達が墓に入ることになるだろう。いや、その前に胃袋に入ることになるか。

「そんな時間はない。さあ行こう」

「う、うん」

「……ソレ。待て」

おい、ジェイおまえもか。

「時間を気にするのは分かるが、今からお楽しみ時間だぜエ？ 折角だから宝の山を持ッて帰ろうぜ！」ニヤニヤと口元を緩めながら、キョウが言う。ジェイもうなずいている。

いつもの事だが『正規の戦利品』、つまり依頼者からの報酬じゃ満足できないのか。キョウだけならまだしも、ジェイまで言い出すんだもんなあ。

俺もこの先輩方を見習って、うまい汁を吸った方がうまくやっていけるんだろうか。

「分かった分かった！ でも、男は埋めないし、戦利品は手早く持ち帰ろう。ゴブリンも戻ってくる可能性があるんだ。本当に危ないんだからな」

俺達は、ジェイが松明をもう一本作り終えると、また洞窟へ足を延ばした。

今後のいきさつは大体分かる。アジトの場所を報告したら、ギルドがいくつかの傭兵団から成る部隊を組んで、本格的な討伐が始まる。もちろんその時に、奪われた金品は回収され、持ち主の行商人達に返される。それを見越して、ちよろまかすってわけだ。

役得……いや、せこい。バレてもお目こぼしはしてもらえるが、あまり気持ちのいい事じゃないな。いわゆる『騎士道精神』に反するってわけだ。まあ傭兵だけど。

「おおッ！ こりゃ宝の山だぜエ！」キョウがキョウたる反応を示す。

「キョウシロウ……」アイがあからさまな不快感を顔に出している。二人は、さっそくお目当ての戦利品、武器防具の置いてある方へ歩いていった。

俺は二つあるベッドの内、男が寝転んでいた所に腰をかけた。ア

イも続いて隣のベッドに座る。キシキシと音を立てる。思った以上に安物だな、これは。

枕の側に一枚のくしゃくしゃになった紙切れを見つけた。広げてみる。

『上層区工房橋二十三部隊』と、ハッキリ書いてあった。

なんだ？ 上層区工房橋。ジュノだな。……たしか、工房橋って、『バタリア丘陵』とジュノ上層区市街を繋いでいる橋か。

「アイ、これ何だか分かるか？」向かいで、退屈と哀れみの表情を浮かべているアイに見せてみた。

「じょうそうく、こうぼうばし、にじゅうさんぶたい」うーん、とうなって続ける。「分かんないっ！ なんだろうねえ」

分かる訳ないよなあ。まあいいか。

戦利品を値踏みしていると思っていた二人は、意外にも武具のすぐ横にあった金属の箱の、鍵の掛かった錠をガチャガチャといじっている。バキッ、と音が鳴った。強引に錠を壊したな。

「おい、変なものに気を取られてる場合じゃないだろ。さっきも言ったが、のんびりしている暇はないんだ」俺は二人に呼びかけた。

二人はそれに構わず金属の箱を開けた。

「それが何だっつてんだよ」俺は呆れながら立ち上がり、二人が見ている箱を覗き込む。

中には、――粒？ 五ミリ程度の、黄みがかかった小石のような粒が入っていた。それも箱いっぱい。

「……孢子」

「孢子？ モスフングスの孢子なのか。キノコがでかいから、飛ばす種もでかいんだな」毒性がある、そうアイが言っていたのを思い出し、口と鼻を手で抑える。「なんでこんな物が、金属の箱に入ってるんだ？」

「ふむ……、ジェイ」キョウは粒状の孢子を右手で一すくいし、ジェイに差し出す。

おいおい、なぜそんな物を掴む。毒だぞ。やめろ。

ジェイは黙ったまま、バッグの中から紙製の包みを取り出し、キョウの手から零れ落ちるその粒を、包みに受け止めている。

「お二人さん？ 何してるんだ？」

「え？ え？」

俺とアイはこの展開に置いてけぼりになっていた。

二人はそのまま、すぐ側にあった壺に手をやった。少し泥のついた茶色の木のフタを持ち上げ、中身を確認している。

キョウがまたもジェイに話しかける。

「どうだ？」

「……間違いない」

「おい！ だから二人は何してるんだよ！ 時間がないって言うてるだろ！ 早く盗るもん盗っていくぞ！」

俺は時間が迫って焦っていることよりも、二人が十分な説明をしないまま、目的とは別のことを繰り返していることに苛立っていた。

「もういいだろ！ 早くしろよ」

キョウは、一瞬何かを思い出したかのような顔をした。

「わ、わりイわりイ！ 何か気になっちゃってな！ ああ、残念だけど時間がねエ！ このかぐわしい香りを発する鎧をかつぱらってとんずらしようぜ！」箱の横に置いてある、一番身近な物を手に取り、苦笑いを浮かべながら頭を掻いている。

このハゲ。革の編み鎧一つかよ。どうせ危険を冒すんだからもっといっぱい持っていけよ。とんだ徒労だよ。

「……早く出よう」ジェイは何も持たないまま、既に通路の闇と半一体化していた。

この二人はいまいち分からんな。結局、『特別手当』は革臭い鎧とモスフングスの胞子。

『お楽しみ時間』は、『俺のいらいら時間』に変わっていた。

すっかり暗くなった夜のジュノ下層区。街灯がぼつりぼつりと歩く人たちの影を、冷たい灰色のレンガの地肌に作っていた。

道中、チョコボで帰りたいだの、早く飯が食いたいたのと馬鹿とハゲがうるさかった。ずっと警戒を解かなかったジェイの顔にも、安堵が見られる。

居住区の『セイント』詰め所の扉を開けた。大広間のどこにも団員が見当たらないが、ランプは点いたままになっている。天井のシーリングファンだけがブンブンと音を鳴らし、乾いた部屋の空気をかき混ぜていた。

任務だろうか。いつもなら、この立て付けの悪い入り口の扉をきいきいと鳴らすたびに、『しっぱ』が歓喜の声を上げて出迎えてくれるはずなのに。

「珍しいな、あのしっぱが外勤だなんてよほどの緊急事態か」

「ソレ、そんな事言っちゃダメだよ！」

しっぱこと『テール』は、万年補欠員だ。ほとんどの時間を詰め所で過ごしている。いつも詰め所入り口の扉の一番近くにある大きなソファアの上で、足を組んで寝転んでいる。

要領のいい彼女は、自分の仕事をさっさと終えてそんな風にだらけてばかりいる。それがよっぽど退屈なのか、団員が帰ってくるのが楽しみで仕方がないらしい。だからか、足音だけで誰が帰ってきたのか分かってしまうほど、耳に労力を割いているようだ。犬かよ。

正確には、補欠というよりも事務担当なんだろう。しかし、傭兵団であるセイントには、戦地に足を運ぶ屈強な戦士が多いせいで、一際目立つ存在になっていた。

彼女は主にテイルとの連絡役だ。忙しい団長と俺達戦闘員を繋いでくれるパイプ役。難点は、彼女は喋るのが苦手なのか、発言している内容がよく掴めない事が多い。バストウークの荒涼した地にある小さな村の出らしいが、もっと語学を勉強してもらいたいもんだよ。本当に色んな所から色んな人たちが集まっているな。ジュノしかり、セイントしかり。

三人とも顔に疲れが見えていた。「テイルも居ないみたいだし、今日は解散にしよう」ああ、と言って続ける。「報告は、しっぱが

いないから俺がしておくよ」

「そうか！ わりいなソレ。まあ、でも俺はちっここで、これの手入れしとくぜ」キョウが腰に下げた刀に手をやり、スリスリと鞘をさすっている。

「……ソレ、ありがとう」ジェイが目をつむって軽く頭を下げる。「いいって。ジェイはいつものことだけど大活躍だったもんな。ゆっくり休んでくれよ」

「じゃあ、ソレ。わたし、もうクタクタだから部屋に戻るね。しっぽさんすぐに戻ってくると思うけど、冷えるからあの掛け布団使って休んでね」アイはそう言って、広間の一番奥にあるソファアを指差す。後輩の遠慮からか、アイが休むのはいつも奥のソファアだ。

「ああ、ありがとう。明日はみんなで打ち上げでもやろう」

——時が一瞬止まったようだった。部屋がシンと静まり返った。アイが静寂を破る。

「ええ！ ソレが誘ってくれるなんて珍しい！」

「おいおい！ マジかよ！ おごりか？ おごってくれんのか！」

キョウが大興奮している。俺は一言もおごりだとは言っていないだが。まあいいか。

「まあそれでもいいよ。ただし、明日は絡み酒してくれるなよ」

「分かッてる！ 分かッてますッてば！」キョウが手を合わせて、頭を上下している。

このタコ坊主もいい加減調子がいいな。

ジェイが腰のバッグから紙の包みを出し、キョウへ渡す。「……キョウ。これを」

「おう。分かッたぜ」と、キョウが包みを懐へしまった。

「……ソレ、また明日」

「おやすみい！ また明日ね！」

「ああ、また明日な」

ジェイとアイが扉を開けて出て行った。

アイがとても嬉しそうな顔をしていたな。こんな簡単な事で喜ば

せてやれるのなら、もっと前からそうしておけば良かったかもしれない。つくづく気の利かない男なんだな、俺って。

研ぎ石を取りに、右奥の調理場へキヨウが消えていく。普段はキヨウ専用のロッカーに入れてあるんだが、手癖の悪い団員が、調理用の和包丁を研ぐのに拝借している。

キヨウいわく包丁も元は刀だから、手入れをするのには研ぎ石が丁度いいらしい。だから勝手にロッカーを開けている事も大目にみているようだ。彼の国では物を大事にする精神があるらしい。それにしても、寛大なのか、無頓着なのか。

アイから借りた布団を掛け、横になる。革張りのソファアが、体の重みを受けてゆっくり沈み込む。今日は久しぶりに楽しい一日だった。なんせ珍しい仕事だ。都市の周辺地域を管理するのは、国の仕事だ。

ジュノには大規模な軍隊はないが、『ジュノ親衛隊』と『ジュノ警備隊』の二つの組織がある。親衛隊は、大公の直属部隊だが少人数構成。警備隊の主な仕事は街中の警備、つまり警察組織だ。なので周辺地域の害獣駆除や、獣人討伐といった仕事は金で雇われた傭兵がやる。

国からの直接の依頼ってことで報酬も飛び抜けている。でも、おいしい仕事は大規模な傭兵団が持っていくから、なかなかうちのよくな小規模な所には降りてこない。今回は珍しくギルド、つまり民間からの依頼だったわけだ。しかし、わざわざ商人達が結託して依頼をしてくるとはな。それだけ被害が大きかったって事なんだろうか。

ティルはこういった珍しい仕事を必ず掴んでくる。知り合いの小規模な傭兵団なんて、護衛しかやったことがないのにな。本当に賄賂を贈ってるんじゃないだろうか？

まあ、そんな事を考えていてもしょうがないな。俺がやるべきは、目の前の仕事を淡々と片付ける事だけだ。

……ああ、まぶたが重い。少しだけ目を瞑って体を休めよう。

——誰かが喋っている。

いつの間にか寝てしまっていたようだ。うっすらと目を開けると、テイルが椅子に掛けていた。話しかけているのはキョウだ。そうか帰ってきたのか。

キョウが真剣な顔をして紙の包みを見せている。テイルも真面目な顔つきでそれを受け取った。そんな物を何に使うんだ。

キョウが右脇に抱えていた革の鎧も渡す。おいおい、団長権限で回収ですか。テイルも案外ケチな事するもんだな。

……ああ、だめだ。眠い。——再び、俺の意識は夢の中へと消えていった。

一章 五節 任務（後書き）

> i 1 5 9 8 2 — 2 2 1 9 <

二章 一節 新たな任務を告げる鐘の音

上層区の、時計塔の鐘の音が聞こえている。乾燥して澄み渡った空気を伝って、安々と下層区へ音を響かせている。

東の窓から光が差し込んでいた。光を完全に遮るためのカーテンはなく、朝日がまぶたを貫通し、眼球に直接朝の到来を告げた。天井のファンが放つ一定のリズムと、外で、縄張りを主張し合っている鳥達の声が、心地よいまどろみを一層演出していた。

疲れが溜まっている。手入れのされていない森の中や、ゴツゴツとした岩場を歩いたせいで、足に、特にヒザを重点として動きが悪くなっているようだ。起き上がりがたくない。

アイの布団が俺の体温をしつかりと抱きとめ、まだ休めと言ってくれている。いい香りがするなあ。……ふふっ。……何かを忘れている気がする。なんだったかな。……うーん。尿意が溜まっている。鐘の音が止んだ。

——やばい！ もう朝じゃねえか！ 俺は飛び上がった。体を起こすと腹筋がぎゅっと収縮した。ランプは消えている。広間には誰も居ない。それどころか、本部のどこにも気配が感じられない。

昨日の事をおぼろげながらに思い出す。——ああそうだ、一度テイルは戻ってきていたんだ。キョウと話していたから、そのまま報告をまかせようと考えて二度寝していたんだった。

安心と、自分の責任感のなさを量りに掛けていると、入り口の扉がきいと鳴った。扉から現れたテイルは、きよとした顔で俺を見た。

「あんた、まだ寝てたのかい？」クスクスと笑って、真っ直ぐに左奥の机のある方へ歩いていく。

一人掛け用の椅子とセットになっている、テイル専用の机だ。俺が団長なら、ベヒーモス革の椅子を買うだろうが、鼻の利くミスラにとっては臭いだけらしい。だから、ローズウッド製の見た目が地

味な机と椅子だ。

「まあかなり大変だったみたいだしね。よくやってくれたよ」

「ティル……、おはよう」目をこすりながら、掠れた声を出した。

「はいはい、おはようさん」ティルは二度手を叩くと、さあ、と言
って続ける。「早く顔を洗ってらっしゃい。折角あんたがいるんだ。
次の仕事の話をするよ」

「仕事って、俺達にか？ ゾッド達は？」

「三人には既に別の仕事に当たってもらってるよ。今頃はもうバス
トゥークさ」

「他国へ出張か。いい仕事だったのか？」俺は洗面台にヨタヨタと
向かいながら、ティルへ投げかけた。

「まあね。あんたにも面白い仕事を用意してあるから安心しなよ」

ジュノを活動の拠点にしているセイントは、主にジュノから旅立
つ行商人達の護衛をしている。他国の仕事をする場合は、よほど報
酬がいいか、大手の商会や、政府からの依頼くらいだ。上からの信
頼を得られれば今後も仕事を取りやすいからな。多少割りに合わな
くても、先行投資と割り切って依頼を飲む事がある。

実際はそれだけじゃない。特に政府に目を掛けてもらえれば、三
国を空で繋ぐ船、飛空艇用のパスポートを無償で貸与してもらえる。
パスがあれば、仕事だけじゃなく旅行の際にも飛空艇が使えるんだ。
このパスを手に入れるために、傭兵団は必死こいて過酷な任務に赴
いている。

……しかし、なぜかセイントは顔パスで乗れる。ティルいわく『
あたしの魅力でイチコロ』らしいんだが、いまいち嘘くさい。

用をたし、冷水を浴びて、さっぱりした顔と頭を取り戻した。

「それで、仕事って何なんだ？」俺はソファーに腰掛けると切り出
した。

「あんた、ジュノで流行っている麻薬の話は知ってるわね？」

「ああ、嫌でもな」

近年ジュノでは、薬物乱用での暴力事件が多発している。原因は、

一年前頃に突如現れた、依存性の高い麻薬のせいだ。特に若者を中心に流行している薬らしいのだが、流通ルートが巧妙に隠されていて、バイヤーを捕まえても、すぐに次のバイヤーが現れ、不毛なイタチごっことなっている。

上層区にはアイの家庭教師が勤めている病院がある。そこに、日に二人は麻薬関連の事件に巻き込まれた人が運び込まれている。アイも非番の日には病院の手伝いに行っているが、息子に刃物でお腹を刺されたなんて患者も来るそうだ。精神が錯乱すると身近な、大事な人をも傷つけてしまうことはよくある事らしい。

そんな胸くその悪くなるような事を、毎日のように目の当たりにしている悲しそうな顔を見てみると、俺まで辛い。

根本的な解決を図るために政府も色々と手を尽くしているらしいが、なにせ件の麻薬の原材料が未だに分からないらしい。だから、知らず知らずのうちにそれをジュノに運び込んでいる可能性もある。皮肉なもんだ。

「今回の依頼は、なんと。ジュノ政府からの直々の依頼だよ」

「俺達に麻薬の捜査をしろって？」

「そうだよ」

俺は、はぁ、とため息を一つついた。

「できるわけないだろ。俺達は一介の傭兵だぞ。俺達に麻薬に関しての知識がないどころか、政府ですら原材料やルートを把握仕切れてないんだろ？ まだ引き受けた訳じゃないよな？」

ティルの表情を確認する。俺の不安そうな顔を見つめ、いたずらに微笑む。その笑みの意味を理解した。

「おいおい、まじかよ。なんでそんな無茶な依頼を請けるんだよ。

……というか政府は何故セイントにこの仕事を回したんだ？」

「うちが少数精鋭だからよ」そう言って笑みを崩さない。

「確かに人数は少ないが、精鋭って事はないだろ。普段から、軍の代わりとして機能してる大所帯の傭兵団があるんだ。なぜそっちに……」俺は、はっ、として、「やはり賄賂か？ 金に物を言わせて

無理やり仕事を取って来たんだろ」と、日頃から感じていた疑惑をぶつけた。

「やはりとは何よ、やはりとは。失礼な事言うんじゃないよ。あたしはそんなみみっちい事しないよ。いいかい？ 受けちゃったもんは、もうしょうがないんだ。キツチリこなすんだよ」それとね、とテイルが左手の手の平を突き出してきた。「報酬は五千万ギルだよ」「ごせんまんぎる……。は？ 五千万ギルだって！」俺は耳にしたあまりの金額に驚き、立ち上がった。

「いい反応するじゃない？ それでこそ傭兵ってもんだよ」テイルは書類に目を通しながらクスクスと笑っている。

「なあ、でも何をすればいいんだ？ 何をどうしたらいいかさっぱりだぞ」

俺は異例な依頼に戸惑った。今までも珍しい仕事はあったが、捜査依頼なんて受けた事がない。切った張ったの単純仕事ばかりだったからだ。

「はあ、朝はやっぱ鈍いのかい？ それともあんたは元々そうだったかねえ」テイルが呆れている。

どういう意味だろう？ 朝のせいだと思いたい。

「いや、だって初めての事だからさ……」

きな、とテイルが手招きをする。俺が机の側に寄ると、二枚の書類を手渡してきた。

ふむふむ、なにに？ 『麻薬取締局 人事異動通達』。……ジュノ政府直轄の、麻薬取締局内部の通達書のようだ。二人の捜査官へ宛てられた、人事異動を伝える書類だった。

二人は、他国にある支局の捜査官らしいが、どうやらジュノ本部に転勤してくるようだ。

「こんな依頼、うちらだけじゃできないのは承知だよ。あくまでもこれは、麻薬取締局との合同捜査なのさ」テイルが尻尾を手入れしながら言った。

ああ、そうか。よくよく考えれば当たり前の事だ。今まで蓄積さ

れた麻薬関連の情報にアクセスするには、相応の権限を持った人間が必要だ。

「いいかい？　まずはその二人を迎えに行くんだよ。一人はバストワーク大使館に、もう一人はウィンダス大使館で所定の手続きを行っているようだからね。大使館の連中はきつとお役所仕事してるだろうから、手続きを終えるまであんたが接待しておきな」

「ってことは、もうジュノに着いてるのか？」

「もう昨日の朝には着いてるそうだよ。ただし、手続きが遅れているせいで大使館に缶詰だとさ」

分かった、じゃあ、と言った時、入り口の扉がきいといって開いた。アイが顔を覗かせた。こいつは朝に強い。

「あ！　ティルさんおはようございます！」

「はいはい、おはようさん」ティルが、指先四本を数度折り曲げながら挨拶を返した。

「俺もいるぞ」

「ソレ！　早いね！　……もしかして朝までここで寝てたの？」

「あ、ああ。あの後朝までぐっすりと」俺は頭を掻いた。

「風邪ひいちゃうよ！　もう！」

「どうしてここで寝ていたんだろうねえ？　ソレにしては珍しい」ティルがクスクスと笑って俺に視線を向ける。

「そ、そんな事はどうでもいいだろ。それよりアイ、早速だが仕事が入った。今回麻薬取締局と合同捜査を行う事になったぞ」

「え？　本当に？」

「ああ、本当だ。捜査官が二人赴任してきているから、大使館まで迎えに行くぞ」

「へえ……新人さんだね！　分かった！　なんか楽しくなりそうだね！」

「うまくやるんだよ」ティルが満足そうな顔をして言った。

俺とアイは顔を見合わせ、ティルに一言告げると詰め所を出た。五千万という大金と、政府直轄組織との合同捜査という二つの異

例が、すっかり目を覚まさせてくれた。五千万あれば、ジュノ上層に一軒家を建てられる。まさに一攫千金だ。

俺達は、ジュノの塔の階段を上がっていった。とても長い、石造りの螺旋階段だ。

ジュノは、橋の上にある唯一の海上都市国家だ。それだけでなく、都市そのものが特殊な造りをしている。四つの区画から成っていて、それぞれの区画を巨大な塔を中心にした階層状で結んでいる。ジュノの区画間を移動する際は、ジュノ中央の塔に入って上がったたり下ったりするわけだ。

一番上の階層にあって、ジュノを治める大公の私邸や執政室がある『ル・ルデの庭』。サンドリア王国、バストウーク共和国、ウィンドス連邦の大使館も存在している。つまり、政治の中心となる区画だ。ここに、今回の件で協力してくれる捜査官が二人滞在している。

上から二番目の区画は、上層区。ここには病院がある。アイの家庭教師だったウンディも、今はここで看護婦をやっている。

この区画ならどこにいても見える、巨大な時計塔がある。毎朝けたたましいい音で俺達をたたき起こしてくれる。うるさい親父みたいなもんだ。実際、この時計塔の整備をしているのはガルカのガンコ親父らしい。ガルカってだけでも、やたら図体がでかくて怖いのに、その上ガンコなら、……友達はいるんだろうか？

女神アルタナを祭った聖堂もある。サンドリアの大聖堂ほどの規模じゃないが、参拝客が多いおかげか手入れが行き渡っていて、とても気持ちのいい空気で満たされている。

俺も、たまに死んだお袋の事を想ってこの聖堂にお祈りを捧げている。お袋は樂園へ辿り付けただろうか。わずか二年足らずの戦争の間に亡くなっちゃったんだ。……運が悪かった。親父は毎日熱心到大聖堂でお祈りしていたな。とどのつまり、不甲斐ない自分達の懺悔の場所みたいなものだ。

三番目の区画は、下層区。一般市民の住宅都市になっている。

しかし、塔からここへ立ち入るとすぐにガラの悪い連中が目に入る。『海神楼』という高級宿屋があって、なぜかその周りにたむろしている。宿屋の向かいの噴水にもそういった連中が大勢いて、市民の憩いの場所が遺憾にも失われている。

本来は一般市民の区画のはずなのだが、もう一つイメージを悪くしている物がある。『ジャンク屋』だ。ゴブリンが経営している店だ。毒薬、爆弾、怪しげな料理。とにかくヤバイ物を色々扱っている。

下層に住んでいるゴブリンはカタコトながらも人語を話せる。市民権を得ているし、攻撃的でもない。とても友好的なのだが、大きな文化の違いのせいで、ほとんどの人間は快く思っていないようだ。下層にはなんといっても酒場がある。俺のお気に入り場所だ。

ゆつくりと一人で飲む酒はうまい。毎日、吟遊詩人の連中が舞台で歌と演奏を披露してくれるんだ。

『戦士達のピーアン』って曲には本当に癒されている。日々戦いに明け暮れて疲れ切っている傭兵の安息の場所だ。

『アイとはどうなっただよー』と、いやらしい顔つきをして、二人の関係をせつついてくるハゲ頭がいると台無しになってしまうが、加減を知らない先輩には困ったもんだよ。

居住区には我等が『セイント』の詰め所がある。団員はみな居住区に自分の部屋を持つてゐるが、非番の連中は大概ここに入り浸りだ。常に誰かしらいて暇をつぶせる。

ただ、そのせいで私物が置きっ放しになっていたり、ゴミをそこらに散らかす『お馬鹿』が二人ほどこいて、俺とアイが自主的に掃除をするハメになっている。もっと気持ちよく使いたいもんだよ。なるほど、そういう事が休む事無く続いたから、逃げ出すように酒場に通っているのかもしれない。心のオアシスって大事だな。

一番下の区画は港区。ここは連合三国と、遙か南にある『エルシモ島』の、『カザム』との定期便を発着させる、四つの飛空艇の

空路玄関口だ。

あの大きな船が空を飛ぶなんて今でも信じられないな。原理は一切公表されてなくて、ジュノ大公国の一番の強みとなっている。空からの攻撃を仕掛けられるのはジュノだけだ。もし、戦争になったら、いや、考えたくないけど。もしそうなったとしたらサンドリアはあつという間に滅ぼされるだろうな。

ジュノが歴史に姿を現すまでは、バストウークが機械技術の代名詞と言われる国だったんだが、もはや逆立ちをしても追いつけないだろう。

そういった背景から他国の過激派が不穏な動きを見せている、という話も最近をよく聞くようになった。獣人との戦争が終わった途端に、次は人間同士で争うんだろうか。みんなで力を合わせて勝ち得た平和なのに、みんなで壊していく。なんて馬鹿らしい話なんだろうな。

二章 一節 新たな任務を告げる鐘の音（後書き）

> i 1 5 9 8 2 — 2 2 1 9 <

二章 二節 二人のエージェント

「この人はバストワークから来た人だね？」アイが通達書に目を通してながら確認する。

「ああ、二人とも今回の捜査のために他国から配属替えされたみたいだ」

「少しの間かも知れないけど、仲良くやれるといいねえ！」アイが嬉しそうだ。

しかし、新人ではないんだ。任務が終わればまた別々になる。深入りは禁物だ。

「そうだな。その辺りはアイにまかせるよ。さあ入ろう」

「もお！ ソレも努力するの！」

大使館の扉を開けると、すぐに大きなバストワークの国旗が目に入った。小さなロビーの、カウンターの向こうにいる受付のガルカが睨みを利かせてくる。紺色のベレー帽を被った軍人上りのようになりだ。

確かにここはもうバストワークの領土だが、一緒に街に住んでいるんだ、仲良くしてくれよ。

「昨日からここに滞在しているスタイルズ捜査官を呼び出してくれ」ベレーのガルカは黙ってうなづき、奥の事務室へ消えていった。

「怖いね」

「ああ、何だろうな。ジュノの人間を信用していないのか、傭兵を見下してるのか。あんなんで大使館員が務まるのか？」

やはり元技術大国だけあって、新興超技術国家を敵対視してるんだろうか。俺は関係ないぞ。巻き込まないでくれ。

受付のガルカがカウンターに戻ってきた。

左手の金縁の扉がガチャリと開くと、赤い羽根付き帽子を被った、背の高いヒュームの男が現れた。赤いマントをまとい、マントの留め具には、何かの動物が描かれた金色のバッジを付けている。キザ

つたらしい格好だが、端整で賢そうな顔立ちが嫌味を感じさせない。彼は俺達を見ると、帽子を脱ぎ一礼した。

「初めまして。エア・スタイルズと申します。あなた方が今回、私達に協力してくれる傭兵団の方々ですね」

「は、はい！ アイって言います！ ふつつかものですがよろしくお願いします！」アイは緊張しているようだ。何故だか悔しいぞ。

「初めまして。俺はソレだ。よろしく頼むよスタイルズ捜査官」

彼は、クスツと笑って言った。「今日から一緒に仕事をする仲間です。エアと呼んで下さい」笑顔がとても上品だ。

「ああ、分かった。よろしくな。……ところでエア、もう手続きは済んだのか？ 昨日から居るらしいが手間取っていると聞いたんだ」

エアは帽子を被ると、どうぞ、と言い俺達をロビーにあるソファーへ座るように促した。三人で腰を掛けた。

「ええ。いつも通りですが、まだここを動けそうにありません。夕方までにはなんとか手続きが完了するようです。一ヶ月に数度はジュノへ来てるんですが、顔なじみになっていても、手続きにはしっかり時間を取られてしまいます」言いながら苦笑している。

「一ヶ月に数度？ 今回が初めてのジュノじゃないのか」

「ええ、私はジュノ本部とバストウーク支部の橋渡し役のようなものです。今回は、本部へ異動となったのでしばらくはこちらで腰を落ちつけられそうです。……早く捜査を開始したいのですが、こういった面倒な手続きのせいで毎度この調子なんですよ。これだけ大きな都市ともなると、仕方のないことかもしれません」

エアが憂いの表情を浮かべている。この真面目そうな捜査官は仕事一辺倒なんだろう。俺ならこんな渡り鳥のような仕事はごめんだ。アイが落ち着かないようだ。隣でそわそわとしている。

「おい、アイ。そんなに緊張してどうしたんだよ」

アイは一瞬ビクツとして話した。「ソレ！ 赤い羽根帽子の意味知らないの？」

赤い羽根帽子？ エアの被ってる帽子か。

「意味ってなんだよ。おまえ仲良くやるんじゃないのか？ 人見知りしてる場合じゃないぞ」

「もお！ あのね、エアさんはね『赤魔道士』なんだよ」

「赤魔道士？」

エアの顔を見ると困った顔をしているようだ。

「エアさんの被ってる赤い帽子は、上級魔道士の証なんだよ。白魔法上級試験と、黒魔法上級試験の両方に合格して、なおかつ剣術も得意なエリート魔道士なの。わたしなんて白魔法中級試験すら合格できないのに……」

へえ、なんだかすごい人のようだ。麻薬捜査は危険な任務が多いだろうからな。戦闘においてもかなりの能力がないと勤まらないのかもしれない。

「ふむ、困りましたね。そんなに緊張なさらなくてもいいですよ。私は教師じゃありませんし。それにまだまだ未熟です。……そして何より今日からは仲間ですから、遠慮せずに意見や情報を交換しましょう」そう言うてにつこり笑うと、帽子を脱いで脇に置いた。アイへの配慮だろうか。

「にしても、そんな真つ赤な服装だと潜入捜査なんて出来ないんじゃないか？ 俺ならもっと地味なローブを羽織るよ」

「ええ、そうですね。ですが、現在は公式な場にいるので。……規則なんですよ。私としても、とても恥ずかしいのです。こんなに目立つ格好では、ここから出たくても、なかなか出られませんからね」エアはうつむき加減で口元を緩めている。

「早くそれを脱いでくつろげるといいな。そうだ、俺は捜査官二人を接待するようにうちの団長から命じられてるんだ。一緒にどこかでんびり過ごさないか？」

エアがかぶりを振って答えた。「いえ、申し出は気持ちだけで充分です。この格好も気になります。規則で手続きが終わるまでは、原則としてここから出られないのですよ。しかし、昨日の昼前からずっとここに居ますが、この人たちはとても親切にしてくれてい

ます。快適に過ごせているので問題ありませんよ」そう言ってエアは、ベレーのガルカをチラリと見た。しかし、ベレーのガルカは表情を崩さなかった。

「そうか。分かった。……じゃあ、とりあえず俺達はもう一人の捜査官にも会いに行ってくるよ。夕方過ぎにセイントの詰め所に足を運んでくれ。色々と話したいことがあるんだ。なにせ俺達は捜査のど素人だからな。頼りにしてるよ」

「はい、私にできることがあるならどんどん頼ってください」

「ありがとう。それじゃあまた後で」

「エ、エアさん、それでは失礼します！」

「はい、後ほど」

俺達は、エアが部屋に戻るのを見届けて大使館を後にした。

目の前の、三国の大使館の中央にある噴水が、丁度大量の水を天に噴き出していた。止んだ水柱の向こうに、赤色のマントを着た人物を見つけた。エアと同じ赤い羽根付き帽子を被ったタルタルだった。ジュノの住民であろう、ミスラの女性に話しかけている。

「なあ、アレって赤魔道士だよな？」

「う、うん。エアさんよりも派手な格好だね」

マントの背の部分に、銀色の獅子の刺繍がしてある。確か、ウィンドス大使館にいるのはタルタルの捜査官だったな。

「そんな事言わずにさあ、ウィンドスから来たばかりなんだよ」

どうやらタルタルはナンパをしてるようだが、うまくいっていないようだ。ミスラが去っていった。捜査官は大使館にいるはずだが、やっぱりコイツがもう一人の……。

タルタルの男はこちらに気付き、ひよこひよこ小さな足を動かして向かってきた。

「ねえねえそのオネエちゃん。僕、ウィンドスから来たばかりなんだよ。道案内してくれないかなあ？」

なんだコイツは。俺の事が見えてないのか。普通、男を連れた女

に話しかけるか？

「かわいいい！　いいよ！　行きたいところあるの？」

「お、おい！　なに軽く承諾してんだよ。俺達は今仕事中だぞ」アイの調子はずれの発言に驚いた。「それにチビ！　おまえ、俺の事を無視して、隣の女に話しかけるとはいい度胸じゃねえか。そんなんじゃこの都会じゃ生きていけないぞ」と、自分の半分もない背丈のタルタルに凄んでみせた。

チビがアイに近づき、手を差し出す。「抱っこして？」

アイがチビを両手で抱え、持ち上げた。「わぁ！　初めてだよお！」

「……おい、おまえら二人とも俺の話を聞いているか？　なあ、そうであって欲しくないんだが、おまえがウィンドラスから来た麻薬取締局の捜査官か？」

「うーん、どうかなあ？　道案内してくれたら教えてあげてもいいケド。でも、基本的に男からの質問は受け付けてないケドね」そう言いつつ、タルタルはアイの胸に手を軽く置き、勝ち誇った目を向けてくる。

こいつ……、殺す。

「おい！　傭兵ナメんなよ！　こっちは荒事でおまんま食ってんだ、ナメられたらお仕舞いなんだよ！　とっととアイから離れろ！　ぶちのめしてやる！」

「いじめないでよお」タルタルが泣きまねをしてアイの胸に食らいつく。

「ちょっと！　ソレ、怒りすぎだよお。この子、迷子になっちゃったんだよ。大目に見てあげよう？」

「アイ！　騙されんなって！　こいつ絶対もう一人の捜査官だぞ。赤魔道士だし、大使館の前にいるし。そうだとしたら迷子になるような年齢じゃなくて、おっさんだぞ！　泣きまねしてんなよ」

「誰がおっさんタル！　こっちは、この姿でおまんま食ってるのタル！」顔をこちらに向けて言った。

正直過ぎるだろこいつ。

「な？　ただの泣きまねだったろ。分かったら下ろせよな。話が進まないぞ」

チビはアイの表情を見た後、しぶしぶ下ろすように合図した。そして噴水の縁に、よっ、と言って掴まると足をジタバタさせながらよじ上った。

「で、何？　男に道案内されるつもりはないよ」
まだ言うか。

「道案内の話はいい。おまえがウィンダスから来た捜査官なら、どちらにしろ俺が接待するんだ。どうなんだ、おまえがそうなのか？」
チビが大きく息を吸い込み、

「そうだよ。僕がウィンダス石の区支部よりきた、赤魔道士のスーパーヒーロー、パンナ・コッタ様だ！　若干二十二歳にして、麻薬取締局の中級エージェントになり、今回、この光と影の大都市ジュノ本部に栄転してきたのだ！　この世の悪と言う悪はこの僕が成敗する！」言い切った。親指を立てて腕を前に突き出している。太陽の光を受けて、マントの留め具の、銀色のバッジがキラリと光った。噴水が噴き上がる。

キメポーズだろうか。アイが、わぁ、と言って目を輝かせている。いや、かっこよくないだろう。

「やっばりおまえがそうなのか」頭が痛い。

「おまえじゃない。パンナ・コッタ様だ」

「じゃあ、パンナ」

「パンナ・コッタ様」

「うるせえ！　パンナでいい！　おまえは今からパンナだ！　いいか、スーパヒーローだかんだ知らないが、ジュノの本部に着任して早々、やる事がナンパかよ。パンナがナンパとかギャグにも程がありすぎる！」

「寒い駄洒落タル」

「それはちよっと……」

パンナだけじゃなく、アイまでも！

「う、うるせえ！ いいか？ 今から俺達はおまえを 세인트 に引き入れなきゃいけない。おまえはむかつく野郎だが、こっちは仕事でやってんだ。くだらねえキメポーズなんかより、まともな人間性を構築しやがれ！」

パンナはくると後ろへ振り返り、「……やっぱヒーローは孤独タル」と、ボソリと言った。

噴水の広場に吹いた風が、赤いマントをはためかせた。……かっこよくないぞ。

「パンナさん！ ソレの言う事は気にしないでいいからね！ おいで！」アイがパンナに手を差し伸べた。パンナが笑顔で振り返ってアイに飛びついた。

「わたしはアイだよ！ こっちの怒りんぼうはソレ！ 一緒に仕事頑張ろうね！」

「うん！ 頑張るタルウ！」

ダメだ。こいつらダメ過ぎる。エアとの差がひどい。

「はあ……、まあいいよ。で、パンナも大使館で足止めされてんのか？」

「うーん、一応そうなるねえ。昨日の夜は酒場で楽しんでたケド。ジュノの酒場はいいねえ！ 置いてないお酒はないし！ なにより戦士達のピーアンが堪らないよお！ 常連になっちゃうかも」

おいおい。移籍の手続きが取れていないのに、抜け出して酒飲んでんのかよ。——しかも戦士達のピーアンだと？ ハチミツ酒亭じゃねえか。俺のお気に入りの場所がっ！

「おい。道案内が必要だとか言ってたが、その酒場は下層区にあるんだぞ。しっかり分かってんじゃねえか」

「お酒の匂いはどこにいても分かる物タル。ソレはまだまだ未熟タルねえ」

こういう理屈だよ。ああ、もういい。こいつの顔はしばらく見たくないぞ。

「はあ……、もう、そういう事でいいよ。俺達はセイントの詰め所にいるから、手続きが済んだら来てくれ。もう一人の捜査官エアも、夕方までには終わるって言ってたから、おまえもちゃんと来るんだぞ。あと、絶対に面倒は起こすな」

「えー！ もう行っちゃうの？ アイさんも？」

「うん、ごめんねパンナさん。わたしは、空いてる時間は病院のお手伝いに行ってるから。最近は麻薬の被害が本当にひどいの……」
アイも大変だ。

「……うん、そうだね。でも、僕が来たからにはもう安心して！ ジュノから麻薬を消し去ってやるタル！」アイに抱きかかえられながらガッツポーズをしている。本当に大丈夫かよ。

「まあ頑張ってくれよ。じゃあ俺達は行くから。また後でな」

「アイさんまたねえ！」ひよい、と縁に飛び乗って手を振る。チビだけあって軽快だな。

夕方には詰め所で集合するように伝え、上層区でアイと別れた。戻って事情を説明しないとな。あんなのといたら頭がおかしくなりそうだ。

詰め所の扉に手を掛けると中から話し声が聞こえた。昼前なのに珍しくジェイとキヨウがいるんだろうか。

「ティル、戻ったぞ……ええ！」

パンナがティルと話していた。

「お、おい！ なんでおまえがここにいるんだよ！」

「暇だったからタル」ソファアに寝転がりながら、お菓子を食べている。

「暇とかじゃねえよ！ おまえは政府の職員だろうが。規則を守れ規則を」

「ソレ」ティルが口を開いた。「あんた、あたしが何て言ったか覚えてるかい？」

「えっ？」

「はあ……。二人の捜査官を接待しろと言ったんだよ。なんで一人で戻ってきてるんだい？ あんたはそんな簡単な事もできない子なのかねえ？」

「いや、その。そう！ その説明をしに戻ったんだよ！ エアは格好が派手だから出たくないっていうし、パンナはなんかおかしいし、それに手続きが終わらないと大使館から出られな……」

ティルがドンッ、と手を机に叩きつけた。

「おだまり！ 規則だろうがなんだろうが、団長の言うことは絶対だよ！ あんたも五年間この仕事をしてきたんだ、今更そんな初歩的な事を忘れるんじゃないよ！ それにね、パンナはあたしの旧友なんだ。丁重におもてなししな！」一息もせずに声を上げた。

「ありがとーティルにゃん」

くそっ。なんだあの猫撫で声は。……。ニヤけ面で俺を見やがって。むかつく野郎だ。

「パンナ、すまないねえ。あの子はうちじゃまだ新人なんだ。よく面倒を見てやってちょうだいね」

「気にしないでティルにゃん。僕こういうのには慣れっこタル。ソレの事は僕にまかせて！」

「ありがとねえ」ティルはそう言うと、俺を睨みつけた。「いいかい？ あたしは別件で、すぐにここを発たなくちゃいけないんだ。

パンナにはくれぐれも迷惑掛けるんじゃないよ。それとね、チームの振り分けを言い渡すよ。あんたは、アイとパンナ。残りの三人の、キヨウシロウとジェイとスタイルズ捜査官の二チームだよ。うまくやりな」

「え！ ちょっとまっ……」

「ちよつとも何もない！ もう決まった事だよ！」そういうと、ティルは足元にあった布製のバッグを手を取った。

理不尽すぎる。よりによって、パンナと同じチームだなんて……。

「それじゃあね。後はよろしく頼んだよ」ティルは立ち上がり、バッグを背中に担ぐと扉へ歩いていった。

それを黙って見ていることしかできなかった。これ以上何も言えなかった。扉はボタンと大きな音を立てて閉まった。パンナが食べているスナック菓子の、パリパリという音だけが部屋に響いていた。

二章 二節 二人のエージェント（後書き）

>i15982—2219<

二章 三節 宿命は再び

「んじゃ、僕は寝るタル。アイさん来たら起こしてねえ」

パンナはお菓子を食べ終わると、そのままソファで横になって大きなびきをかいて寝始めた。

落ち着かない。ただでさえここが落ち着ける場所じゃないのに、むかつく野郎と同じ空間ならなおさらだ。

大体まだ昼前だったのに、なんて自堕落な奴だ。しかもそこは『古参専用ソファ』だぞ。名前が書いてあるわけじゃないがそういうもんなんだ。腹立たしい。

ティルの言いつけじゃ接待は絶対だが、寝てしまったものはしょうがない。

入り口近くの帽子掛けからマフラーを取った。下に掛かっている銀刺繍の赤マントが目障りだ。俺は扉をきいきいさせないようにゆっくりと開けて外に出た。

今日は見事に晴れだ。薄く青色に澄み渡った空に浮かぶ太陽が、長大な『ヘヴンズブリッジ』の端までも鮮明に映し出す。水面には真っ白で突き刺すような光を湛えていた。港区の、サンドリア行きの便が離陸していく。喫水していた船底から、ざあつ、と水が零れ落ちて、手のひらに収まりそうな小さな虹が出来ていた。

メインストリートに出ると、大勢の人たちが買い物をしていた。商人達が露店を開いて、果物や各国の特産品、近海で獲れた魚や家畜の肉、毛織物で作られた布団や防寒具を並べている。高級そうなマフラーを見つけた。晴れているというのに、それを目にした時に少し体が震え、ギュツとマフラーを締めなおした。

物持ちが悪いせいか、すぐに新しいものに目移りしてしまう。以前にも、剣を買い換えたという話でキョウと口論になったな。切れ味があまりに悪すぎるもんだから、金のあるうちにもっと強力な物を買おうと思ったのに、『中の国のロングソードはそういうもん

だぜ』なんて、最後には一言で片付けられてしまう。叩き斬るより、斬ってみたいんだけどなあ。

——これと言って目的があってここへ来たわけじゃない。一人になりたかったのと、強いて言えばお腹が空いている事か。

誰も居ない『ベンチャールール』のテーブルに腰を落ち着けた。海鳥が高い声を発しながら、クルクルと空に円を描いている。もしゲームをやりたい人間がいても、どいてくれ、なんて言ってくるのはテイルくらいだ。

いつ来ても賑わっているこの通りは好きだ。初めてここを訪れた時は、この雑踏が少し怖かったけど、やっぱり人がたくさんいる街は過ごしやすい。街を行きかう人たちを見ると、ただ毎日を過ごしている自分を少しだけ誤魔化せるような、そんな気がする。

「ソレさんですか？」

聞き覚えのない声に名前を呼ばれた。振り返ると、顔にタトゥーを入れた白髪のスラが立っていた。少し息を切らせている。

「セイントのソレさんですね？」

「ああ、そうだけど。あんたは？」

「良かった。さっき事務所にお訪ねしたんですが、パンナからはもう出て行ったと言われたので」スラの女は呼吸を整えて、「私は、麻薬取締局の捜査官パーパ・ビツフェと言います」と名乗った。

パーパは、今日出会った捜査官達とは全くのあべこべに、深い茶色の地味なマントを羽織っていた。留め具には銅色のバッジがついていて、光を反射して鈍く光っている。

「パンナの知り合いか。俺に何か用事が？」

「はい、是非小耳に入れておいてほしい話があります。ここでは何ですから、どこか静かな所でお話をさせてください」遠慮がちにセイントの詰め所へ招け、と言っているようだ。耳を少し前に曲げている。

「うーん、詰め所はちょっとまずいな。俺、あいつが苦手なんだよ。近くの酒場でどうだ」

「……彼は、早速迷惑を掛けているみたいです。行きましょう」

ハチミツ酒亭は、昼間はレストランとして営業している。ストー
ンチーズを使ったパスタがすごくおいしい。今日も賑わっているよ
うだ。店の前に来ると、食事を終えて出てきた家族連れとすれ違っ
た。

扉を手で押さえ、どうぞ、と言ってパーパを先に案内する。カウ
ンターに程近い二人掛けのテーブルを見つけて席に着くと、すぐに
パーパが口を開いた。

「パンナがご迷惑を掛けてすいません。彼は、少しお調子者なん
です。悪気はないのでどうかうまくやってください」

「パーパが謝る事じゃないよ。あの性格には我慢ならないけど、仕
事だからな。なんとかするさ。……先に注文いいか？ 昨日の昼か
らろくに飯を食えてないんだ」

「あ！ ええ、どうぞ」

一息しているウェイトレスを見つけ呼び寄せた。

「ストーンカルボナーラを一つくれ」

「私はコレで」パーパが、メニューを指差してグリモナイトやサン
ドフィッシュを使った魚介パスタを頼む。ウェイトレスは注文を確
認し、厨房へ向かって歩いていった。

「やっぱりミスラは魚が好きなのか？」

「え！ あ、いや、特別そういうわけじゃないですよ。ペスカトー
レだけじゃなくてマリナーラも好きですよ」

「それも、魚介パスタだよな。……やっぱり魚好きなんだな」

あつ、と言って頬を染めて俯いた。とても恥ずかしそうだ。不覚
にもその表情に背筋がゾクリとした。女性をからかうのは好きだ。
我ながら嫌な趣味だな。

「なあ、パンナの事を知ってるようだけど付き合いは長いのか？」

「あ、はい。彼とは、幼少の頃からの友人です。と言ってもここ数
年は疎遠になってましたけど」

へえ、あいつにも友人がいるのか。……男には嫌われてそうだな。
「それでセイントまで？」

「いえ、彼が局の本部に転勤してくると聞いて、大使館に顔を出しに行っただんですよ。手続きが面倒なのは、ジュノならどの役所もそうですから。だから、退屈しないようにと思ってお菓子も持っていたのに」

なんとなく分かってきた。

「職員の方に部屋を案内してもらって扉をノックしたんですが、返事が無かったんです。何かあったのかと思って、鍵を使って開けてもらったんですが、窓が開けっ放しになっていて、既にもぬけの殻でした。職員の方もとてもびっくりされてましたよ。世界一の魔法都市ウィンダスでも、赤魔道士の称号を持つ魔道士は少ないですからね。『荣誉と人格は比例しないんですかねえ』とぼやいてましたよ」

「全く同意見だよ。赤魔道士には、人格を問う試験はないようだな」
パーパがクスリと笑った。俺も釣られて笑う。

「それで、捜査に協力してくれる傭兵団の所にお邪魔になってるんじゃないかと思って」

「見事的中したな」

「ですね。彼の行動はとても読みやすいですよ、昔から」

パーパがまた、あ！と言った。

「すいません、話がそれちゃいましたね」

「いいよ。それで？」

テーブルに注文した料理が届いた。

パーパが頼んだ魚介パスタの独特な香りが、食欲を刺激した。胃袋が自分の取り分を思い出し、大きな声でうなり始めた。

「実は、傭兵団との合同捜査に対して、当局の職員達の間には疑問の声が多く挙がっているんです」

「まあ、そうだろうな。俺達はただの戦闘要員だ。捜査の素人が現場に出るとなったら邪魔でしょうがないよな」パスタをすすりなが

ら何の気なしに言った。

「あ！ 文句を言いに来たんじゃないんですよ！ 麻薬密造グループにも武装している連中が多いいます。だから当局の捜査官だけでは対処ができなくなっているんですよ。それと、合同捜査に加わっているのはセイントさんだけじゃないんです」

「へえ、そうだったのか。他の傭兵団にも依頼が行ってるんだな」

「ええ、はい。それだけじゃなくて、支局の捜査官が続々とジュノに呼び寄せられてるんです。それで、捜査官が二名ずつ各傭兵団へ派遣されていて、今までに類を見ない大規模な捜査になってきているんです」

「それだけ麻薬による被害がひどいってことだな」

「はい」

「にしても、ジュノにそれだけの被害が出てるのに、他の三国に麻薬被害の話を聞かないのは不思議だよなあ。新型の麻薬での被害はジュノでしかないんだろ？」

「その通りですね。それは我々も疑問に思っていた事なんです。それに気付けたからこそ、一つの仮説を生み出せたと思います」

「仮説？」

パーパは、少し何か考えているようだ。喋り通しで、食事に一口も手をつけていない。

「……ところで、ソレさんは、バストワーク過激派集団を知っていますか？」

「え？ ああ、少しなら。ジュノ大公国に対して、飛空艇の技術を公開しろ、と武力で脅している連中だろ？ 前に知り合いが所属している大きな傭兵団が、その一派と派手にやりあったって聞いた。でも、多くの傭兵を擁しているジュノに武力で挑むなんて、馬鹿な奴らだよな」

「ええ、とても馬鹿げた事だと思います。中立を宣言したジュノが、その科学力で他国を侵略するはずなんてないのに」

目の前の皿をからっぽにした。全く手のつけられていないパーパ

の皿を見て、胃袋がもう一度うなった。

「なあ、食っちゃまった方がいいよ。冷めたらおいしくないぞ」本当は、ただ目の毒だったからだ。

「あ！ はい。頂きます」パーパが、スプーンとフォークを使って器用にパスタをすすする。

なかなか食べるのが早いな。仕事のできる人間は食べるのが早いって聞くが、やっぱり政府直轄の組織に勤めてる人間は一味違うんだろうか。

あつという間に皿の上が空になって、グリモナイトの貝殻が一つぽつんと乗っている。

「それですね」パーパはナフキンで口を拭い、喋りだした。

慌てて俺も自分の口を拭いた。

「最近、正確には一年ほど前からですが、過激派の連中がほとんど姿を見せていないんです」

「一年も前にか。諦めたのか？」

「……いいえ、そうではありません。彼等は地下に潜伏しているようなのです。一年前……、今回私達が追いかける新型の麻薬が回収り始めた頃と、時期が符合するんです」

「つまり、過激派の連中は武力行使を諦めて、内部からジワジワとジュノを弱らせる、そういう作戦に変えたっていう事か？」

「はい、確証はありませんが、当局の職員の間にもそういった見解があるのです。ただ、大っぴらに表明してしまうと国際問題に発展しかねない事から、真意を伏せられているのだと思います。そのせいで、当局には大きな混乱が訪れています」

「なるほどな。仮にそれが真実だとするなら、過激派のアジトを見つけて殲滅すればいいんだよね？ 数なら圧倒的に傭兵団が勝るだろう。結構簡単な仕事になりそうだな」

合同捜査だなんて言っても、結局荒事担当なんだな。ほっとした気持ちと、少し残念に思う気持ちと同時にわいた。

ふう、とため息をついてパーパが口を開く。「それが、そうもい

かないのです。一部の捜査官がその仮説を元に捜査を進めていたのですが、どうやら過激派の連中は獣人と手を結んでいるようです」
「なんだって？」

「馬鹿な！ やっと人間と獣人の戦いが終わったのに、また獣人が出しゃばってくるっていうのかよ！ しかも、人間と獣人が手を結ぶ？ そんな馬鹿な話があったてまるかよ！」

「あ！ ソ、ソレさん、落ち着いてください」

店内の客が俺を見ていた。ウェイトレスが困った顔をしている。

無意識の内に拳をテーブルに打ち付けていたようだった。

「……すまない」

「い、いえ、いいんです」

「……あんまりだろう。俺達人間は、先の戦争でどれだけ多くのものを失ったんだよ。バストワークの連中だってそれは同じじゃないか。なのに、何故またそんな事を繰り返すんだ」

「本当に愚かな事ですネ。……でも、私達はこうして手を組みました。ジュノ政府は、そういった馬鹿げた事を繰り返させないために、傭兵団との合同捜査を決意したのではないかと思いますよ。だから何としても、麻薬密造グループを捕まえましょう」

「そうだな。ありがとなパーパ」

「いえ」パーパは少し俯き、照れている。

いい奴だな。どっかの誰かとは大違いだ。

「これが、話したかった事なんだよな？」

「あ！ はい、そうです。……ソレさんは、何かお仕事をしていますか？ 気付いた事や気に掛かる事はありませんでしたか？」

「え？ 気付いた事？ うーん、まだ捜査も開始していないしなあ。今はこれといって何も」

「……そうですか。もし、何かそういった事があれば私に連絡をしてください。きっと力になれると思います」それと、とパーパが続ける。「セントの団長、ティルダさんは今どこにおられますか？」

「ティル？ 仕事が入ったとかで俺達とは別行動してるよ。いつも

行き先は言わないんだ。この件に関しては俺に任せているようだから、用件があれば俺に……」

パーパが遮るように喋る。「あ、いえ。そうではないんです。確認したかっただけなので気にしないでくださいね。……ソレさん、頼りにしてますね」

「ああ。俺に何ができるか分からないけど、全力を尽くすよ。パーパこそよろしくな。パンナよりも頼りにしてるよ」

パーパがクスリと笑った。「ええ、至らない点は多くあると思いますが、こちらこそよろしくお願いしますね」

いつものゲームテーブルに座る。

パーパと別れた後、もやもやとした気持ちを抱えながら、ただ時間が過ぎるのを待っていた。パスタ一皿じゃ足りなかったお腹に、デザートのかぼちゃのパイを入れる。過激派の連中の邪悪なくらみに胸焼けを起こした。

やはり、人間と獣人は争う宿命にあるのだろうか。神々が生み出したそれぞれの種族達。俺達はあまりにも血を流しすぎた。世界は血と恨みの海で満たされている。一つの世界で生きていくには、もうこの陸地は狭すぎるのかもしれない。

下層区の街灯を、ボランティアの連中がせつせと灯している。無償で誰かを思いやれる人たちが暮らすこの街を、俺達が守らなきゃいけないんだ。

——そろそろ、エアやジェイ達も来る頃だろうか。寒さに、身を縮こませながら歩く人たちをよけ、居住区へ歩き出した。

詰め所の扉をゆっくりと押し開くと、目障りなマントがまた目に入った。はあ……、あいつはずっといるんだな。

「ソレ、遅かったねえ」パンナがソファアの向こうから呼びかける。「なんだ、起きてたのか。スーパーヒーローさんはいい気なもんだな」

ソファアの背もたれの影から顔を出して、パンナがジッとこっち

を見ている。

「そんなトコロに突っ立ってないで、こっちに来たらどうなのタル？」

「言われなくてもそうするよ」帽子掛けにマフラーを雑に掛け、パンナを避けて奥のソファアへ向かった。

「カルボナーラはおいしかったあ？ 僕も昨日あそこでランチしたんだよねえ」パンナが視線で追ってくる。

「は？ なんで知ってんだよ。こいつ跡をつけてきたんじゃないだろうな。」

「パンナ、おまえ尾行してたのか？」

「うーん、どうだろうねえ。でも、口元にクリームソースがべったりついてるタルよお」

「え！」慌てて口を袖で拭った。袖は汚れなかった。

ぷぷぷ、とパンナが笑いをこらえている。……こいつ。

おー、と入り口の扉の方から声がした。キョウだ。

「ソレ遅かったじゃねエか！ 今おまえを探しに行ってたんだぜエ？」

「ソレ！ どこ行ってたの？」アイがキョウの影から顔を出す。

「……ソレ、遅い」背の高いジェイの顔が、アイの後ろからぬっと現れた。

「三人とも来たようだな。あとはエアだけだ」

キョウが、眉をひそめている。「何が『来たようだな』だ！ おまえが一番の遅刻だぜエ？ 全く困った隊長さんだな！」

「隊長はやめろよな。とにかく三人とも座れよ」

「へいへーい。ご命令通りにしますぜエ」

キョウとジェイが、パンナを挟むようにして座った。

アイは俺の隣に来ると、布団を畳んでヒザの上に掛けた。

「今日も冷えるね」

「ああ、もう真冬もすぐそこまで来ているな」

「そいやパンナよ。おまえが俺達と組むことになったのは偶然なの

か？」キョウがパンナに話しかけた。

「うーん、どうだろうねえ。ティルにゃんに聞かないと分からないよお」と、パンナが首を傾げて答えた。

「え？ おまえら何で自然に会話してるんだよ。パンナとキョウは知り合いだったのか？」

キョウがニヤつきながら俺を見る。

「こいつにはウィンドスに行く度に世話になってんだよ。いい店知ッててな。ソレも一度『ミスラパラダイス』に連れてッてもらうといいぜ」

ジェイが顔を伏せている。ほんのり赤らめているようだ。この人もパンナに毒されてんのかよ。

昼間会っていたパーパを少し思い出した。なかなかの美人だったな。ミスラも悪くない。

「ソレ。そういうお店に行きたいの？」アイが唐突に疑問をぶつけてきた。

「は？ な、なんでそうなる！ 別に俺はそんなところ興味ないって」

「だって、何か考えてる顔してるんだもん」

女ってのは妙に勘が鋭い。

「ちよっと疲れてるだけだよ。そんな事より、新しい仕事の話は聞いたな？」そう言い、キョウとジェイの表情を確認する。

ジェイがコクリとうなづいた。

「へへッ。ソレは不安かあ？ セイント史上初の大掛かりな仕事だからな」

「いや。もう大丈夫だ。俺達がやる事はいつもと変わらない。だろ？」

「……ふむ。分かッてるようじゃねエか。だてに、ただブラブラとしてた訳じゃないッてことだな」

コンッコンッ、と扉が軽い二つのリズムを鳴らした。

「どうぞー！」アイが大きな声を出して扉に駆け寄る。

きいきいと大きな音を発して扉が開いた。熟知していない者が開けると、こんな風に豪快に音を出してしまう。

「みなさんこんばんは。大変遅くなって申し訳ございません」
脇に帽子を抱えたエアが詰め所を訪れた。

二章 三節 宿命は再び（後書き）

>i15982—2219<

二章 四節 打ち上げ

「エアさん！ こんばんはあ！ マントをお預かりしますね！」そう言っ、アイが手を差し出したが、エアは首を横に振って応えた。アイは一瞬当惑して、「じゃあ席に案内しますね！」と、古参専用ソファの向かいの席へ歩く。エアはアイに案内されるがままついて行く。空いていた一人掛けソファの前で立ち止まり、一つ咳払いをした。

「エアさん、ここどうぞ！」アイが席に座るよう勧める。

エアは何となくはつきりしない表情をして、座る様子を見せなかった。

「エア、立ってないで座ってくれよ。あと、マントなら入り口に掛けておけばいいよ」

みなさん、とエアが口を開き、

「もう一つ謝らせてください。……是非ゆっくりお話をしたいと思っていたのですが、今回の件で設置された捜査本部に、急遽出向く事になりました」そう言いながら深く頭を下げた。

「おいおい、別にエアのせいじゃないだろ、頭なんて下げないでくれよ。……それにしても、休む間もなしだな」

「パンナさんも行くの？」アイが尋ねた。

パンナに視線を送ったつもりだったが、ソファから姿を消していた。

「僕は呼ばれてないタルよお」パンナの声が調理場の方から小さく聞こえた。

また食い物かあいつは。まあ、打ち上げに参加されても困るから、今の内にたらふく食ってくれ。

「分かった。じゃあ、顔合わせって事でチームメンバーの紹介だけ済まそう」

「ええ、申し訳ございません」エアが俺に目を合わせて謝る。うな

ずいてそれに応えた。

「ソレとわたしは二人に会ってるからもういいね」

「ああ、そうだな」

じゃあ早速、と言ってキヨウに視線をやった。既に立ち上がったいたキヨウは、胸に手を当てお辞儀をした。

「俺はキヨウシロウだ。ちっとなと長ッたらしい名前だから、キヨウと呼んでくれて構わないぜ。俺はコイツを使う事くらいしか能がないが」そう言いながら、腰に下げた刀を左手で掴みカチャカチャと鳴らす。「まあ、うまいこと使ってくれや」

「はい、キヨウさんよろしくお願いします」エアはそう言って、キヨウと同じ様にお辞儀をした。

「ほう。キレイなお辞儀するねエ」キヨウが感心している。

東方の挨拶『お辞儀』とやらにも、キレイや汚いという概念があるらしい。

ジェイが立ち上がった。そして、おもむろに右腕を前に突き出し、親指を真上へ立てた。

「……ジェイだ。よろしく」

——パンナの奴、いらんこと仕込みやがったな。アイが目点を点にしている。キヨウが上半身を後ろに向けて、肩を小刻みに震わせていた。こいつも共犯か。

「あ、え、ええ。よろしくお願いしますねジェイさん」エアが右腕を前に出した。

「エア、それはやらなくていいぞ」

「ええ？ そうなんですか」

「おいパンナ戻って来い！ 余計なことしやがって」

「何タル？」

足元から声がした。

「うおっ！」

パンナは大きなガルカンソーセージを右手に持って、俺を見上げていた。無垢な表情が憎らしい。こいつにとっては人をからかう事

など、息を吐くのも同義なんだろう。

「いきなり人の足元に来るなよ。おまえはちっこいんだから踏み潰しちまうぞ。あとな、ジェイに変な事ばかり吹き込むなよ。うちのエースなんだぞ」

「ええー？ 変な事ってわかんないけど分かったよお」

どっちなんだ。まあいい、気を取り直して。

「と、まあ少人数だが、うちはこの六人で捜査を行うことになった。それと、うちの団長からのお達しで、二班に分かれて捜査をする事になった」

「頼りない部下を持つと大変タルウ」

「誰が部下だ。……ジェイとキヨウはエアに、俺とアイはパンナの協力を得てこの件を解決するぞ。要領が掴めず思わぬ苦勞をする事もあるかもしれないが、何か気になった事や分からない事があれば、すぐに捜査官の二人に相談するんだ」

パンナとエアに目配せをする。視界の隅で、キヨウとジェイも黙って首を縦に小さく振っていた。

「わたしとソレはいつも同じ班だね！」

「おまえなあ、そんな嬉しそうな顔するなよ。テイルが『子守』をさせてる事を理解してないのか」

アイの無邪気な口調と笑顔にため息がこぼれる。

「ああ、そうだ。エアとパンナは顔見知りなのか？」

「知らないタル」そう言いながらソーセージを咥え、滑りこむようにソファアに飛び込んだ。

「取締局は大きな組織ですからね。彼が私の事を知らなくても当然でしょう。……パンナさんよろしくお願いしますね」

「うん、よろしくタルウ」

ケツを向けながら挨拶するやつがいるかよ。

「……と言う事は、エアはパンナの事を知ってるのか」

知っていてもおかしくはないか。誰もが認める変人だもんな。

「取締局の人間でパンナさん知らない人はいませんよ」そういつ

てエアはパンナを一瞥した後、すぐに俺の方へ顔を戻し、「私は、彼ほど優秀な捜査官を他には知りません」

店内のテーブルフロアの中央辺りの一つ。隣席との間仕切りは無いが、ぽうつ、と静かに辺りを照らすランプの薄明かりが、周りを意識させない。ここに来ている客は皆、思い思いに憩いの時間を楽しんでいる。

キヨウは、いつにもまして猛烈な勢いで串焼きを口に放り込んでいる。ジョッキを持つ左手も、お留守ではない。そんなキヨウをよそに、ジェイは相変わらずいつもの調子だ。兎の姿焼きを一人、もくもくと食べていた。

「にしてもよお、ソレからメシに誘ってくれるなんて久しぶりじゃねエか？ いや、別に何があつたかなんてどうでもいいんだけど。なんつツても『おごり』だからな！」

キヨウは豪快に笑いながら唾を飛ばしてくる。口を開くたびに、酒と食べ物混ざり合った強烈な臭気が襲い掛かってくる。

キヨウが食べている串焼き――こいつの好物でもある『ミスラ風山の幸串焼き』の材料は、コカトリスの肉、野生の玉ねぎ、ニンニク、カザム辛子。コカトリスの肉は、鳥の肉とも爬虫類の肉ともつかぬ風味で、匂いも独特だ。しかし、この強烈な臭気の元はなんといつてもニンニク。このニンニクは、コルシュシュ地方で多く栽培されている。

とても滋養効果が高く、重い鎧をつけて走り回る騎士だって、これを使った料理を食べれば一日の疲れを吹き飛ばし、次の日には馬車馬のごとく働ける精力がつくんだ。……この匂いがなければ俺も食べたい。

でも、食べるわけにはいかない。ある意味、何かを匂わせる男ならかっこいいが、いくら慣れ親しんだ仲とはいえ臭い男は駄目だろう。今日、みんなを打ち上げなどといって食事に誘ったのは、キヨウにタダ飯を食わすためじゃない。アイとの距離を今より少しでも

縮めるためだ。

今になってこんな事を思うようになったのは、お節介な団長さんの影響——もあるかもしれない。俺は何をやってるんだろうな。五年間も幼馴染と都会で暮らしているのに、サンドリアで暮らしていた時と何の変わりもない。親父は十八の頃にはお袋と恋仲だったっていうし、なんか情けないぞ。

だというのにアイの奴は少し遅い。無理に連れ出したパンナが悪いのは分かってるけど、一体何をしてるんだ。

——ふと、エアから聞いたパンナの話を思い出した。若干二十二歳で中級捜査官になり、今から二年前——二十四歳という異例の若さで上級試験を受け、見事合格。本来なら上級捜査官になるはずだったが、現場主義を徹底したため中級捜査官に留まる。

確かにこんな伝説を残せば有名にもなるな。見た目も言動もちやらんぽらんなあいつに、そんな経歴があるなんて信じ難い話だけど。そんな話を前にしても謙遜すらせずに、さも当たり前、と言いたげなあいつの顔を思い出すと、むしろくしゃしてしようがない。

「なんで酒ツつーうまいもんがあるのに、わざわざクスリになんて手を出すかねエ？ 俺にゃあ全然わかんねエぜ」キョウは酔っ払っているが、えらくまともな事を言った。「これさえありゃ、他に何もいらねエだろ。なあ？」

酒の重要さを問いかけられたジェイがコクリとうなづく。賛同してる割に、酒は全く進んでないみたいだ。

「まあ酒はともかく、娯楽が有り触れてるジュノで、薬物を選択する理由は理解できないな」

「だろオ？ それに、ここにはいい女がたくさんいるしな」
「そうだな」

「女と言えば、アイとはどうなッてんだよ」

「またそれか。その話はしないって約束だろ。それとも勘定は自分ですか？」

「あッ！ そんな話はどうでもよかったな！ はッはッは！」そう

言って視線をテーブルに戻し、串をほおぼる。

まったく。キヨウの調子のよさは、お酒を飲むと拍車がかかるな。
「なあキヨウ、ティルが今どこにいるか知ってるか？　いつも行き先を教えてくれないんだよ」

パーパに言われて俺も疑問に思う。しっぽの居ない今、俺達は完全に団長の手を離れて行動している。

信頼を置かれていて、そう考えれば悪い気はしないが、さすがにこの規模の依頼で肝心の団長がいないっていうのは、傭兵の常識で量ってみても何かがおかしい。

そもそも、ティルって何者なんだ？　俺の考えていた賄賂説は本人に否定された。小さな傭兵団ながら、飛空艇にパスポートなしで搭乗できる高待遇。行き先も言わず、フラリと消える。

「ん。さあな。姐さんには何か考えがあるんじゃないかね」

「考えて？」

「そりゃ、アレだよ。バックアップに専念したいとか、稼ぎのいい仕事を探してるとか、ソレに成長してもらいたいとか、……そんな感じじゃねえか？」

「ふうん。……俺さ、今まであまり気にしたことなかったんだけど、ティルってジュノでの顔がやたらと広いだろ？　それについてキヨウは何か知ってるのか？」

「ああ、その事かあ。昔、姐さんはジュノの軍に籍を置いてたんだよ。エライさん方に顔が利くのも、そんな時の功績のおかげじゃねえかな」

「軍？」

「ああ？　軍だよ軍。軍隊。サンドリアにもあるだろう？　……軍人が嫌で逃げ出してきたソレには分かんねえかな。はッはッはッ！」
「別に逃げ出したわけじゃねえよ、田舎が嫌いなだけだ。大体そういう言い方は――」キヨウの無神経さに深く突っ込んでも仕方ない。
「そうじゃなくて、だ。サンドリアには軍があるけど、ジュノにはないだろ？」

「え？ ああ！ 警備隊だったかな！……なんせ昔の事だからなッ！」

「あんまり適当な事ばっか言ってんなよ。結局キョウは何も知らないってことか？」

「……ソレ、酒が空になった。軽めのものを一杯もらってきてくれ」
ジェイが空になったジョッキを突き出して、カウンターの方をちらりと見た。

ついさっきまで、ジョッキにフチきりいっぱい入っていたのに、何がそんなに酒を進ませたんだか。

「わかった。ちょっと待っててくれ」

ジョッキを片手に、隣のテーブルの人たちにぶつからないようにカウンターへ向かう。酒場の入り口をちらりと見ると、ガルカの男が一人入ってきていた。どこかで見たことのある顔だ。

ガルカの男は、真っ直ぐにカウンターの一番奥へ歩いていった。いかにも一人で飲むため、という雰囲気の一部だ。頑丈に出来た椅子に大きな体を預けると、一度伸びをし、人差し指を立てて飲み物を注文した。

そうだ、バストウク大使館の、愛想の無いガルカだ。昼間に被っていたベレー帽はないが、間違いない。髪には少し白髪が混じっていて、表情には壮齡の落ち着きがある、ようにも見えるが、どこか人を寄せ付けない雰囲気放っている。

カウンターの傍にある酒樽の栓をひねりながら、昼間の事を思い返してみる。テーブルに戻り、炭酸の小気味良い音を立てるジョッキをジェイに渡した。

「……ありがとう」

「二人とも。悪いがちょっと席を外す」

ジェイはこちらを見てコクリとうなずいた。

「なんだあ、ソレがナンパか？ どれだ？ どの女だ？」キョウが目周りを真っ赤にしながらキョロキョロと店内を見回している。

「どうしてそうなるんだ。あそこのな」親指でガルカを指す。「カ

ウンターのガルカにちよつとな」

キョウの目の色が変わった。大げさに驚いている。

「ソレ……。アイに一切興味を示さないと思ッたら、おまえはそういう趣味だったのか！ 気付いてやれなくてすまん！」

「はあ？ ちげえよ！ 俺は正常だ！ 冗談も程々にな！ じゃあ、行ってくるぞ」

そう言い残し、テーブルに背を向けた。後ろで、ハゲがまだくだらないことを言っているようだ。あんな酔っ払いに付き合ってたら変な話で時間がつぶれちまう。

ガルカの左隣の席が空いていたのでそこに腰掛けた。俺には気付かず、グラスにつがれた黄金色の酒を飲んでいる。ガルカは酒をチビリと舐めて、グラスを置いた。

「なああんた」声をかけると、ガルカがこちらに顔を向ける。「バストウーク大使館の受付の人だろ？ 俺の事は覚えてるか？」

ガルカは、俺を頭のとっぺんからヒザ辺りまで見て、

「昼前に来た傭兵か。何の用だ」抑揚のない、無愛想な声色で答えた。

「喋ってみてもやっぱり無愛想なんだな」

「やっぱりとは何だ？ 突然話しかけてきて無礼な小僧だ」

「すまん、そういうつもりじゃなかったんだ。別にあんたに文句を言ってるわけじゃないさ。ただ、どうにもあんたの態度が気になっちゃってな」

「なおさらぶしつけな小僧だ。……何が言いたい？」ガルカは俺から視線を外して、グラスを手を取った。

「昼間、俺達の事睨んでたろ？」

「……さあな、貴様の気のせいだろう」

「そうか。じゃあ……あんた、この国が嫌いか？」

ガルカはカウンターの正面を見ながら、飲んでいたグラスをゴトツとカウンターに打ち付けた。

少しの沈黙の後、

「貴様が何を考えてそんな事を聞くのかは知らんが、ガキの問答に付き合う気はない」

「ただの興味だよ。俺はこの国に憧れてやってきたからな。でも、住めば都……じゃなく、案外退屈な場所だったよ。この国が嫌いってわけじゃないが、あんたと同じで好きではないかもな。俺はいつもあの席で一人で飲んでるんだ」そう言って、観葉植物の陰に隠れた隅のテーブルを指した。

「来たばかりの頃はさ、この国で楽しく暮らしてやろうって思ってたんだ。もう、一切過去の事なんて忘れて、思うがままに生きてみようって」

ガルカは黙って話を聞いていた。

「でも、何かが引っかかってるんだよ。それが何なのかは分からないけど、こう……、喉の奥に張り付いた魚の小骨みたいに、ずっと……傭兵になる事を反対した故郷の親父の事？ 一緒に飛び出してきた幼馴染の事？ 本当は何がしたかったんだろうってな。……って、あんたの話を聞くつもりが、俺の話をしちまったな。酔っ払ってたのは俺だったようだ」

「下らん話だ」ガルカはふんつ、と鼻をならし、グラスの酒を一気に飲み干し、俺のほうへ体の向きを改めた。

「下らない酒のつまみをくれたことの礼だ。……この街の住人は、ワシらバストウクの間人を敵視している。舐めるように人を監視して、隙あらば抗議の一つでも飛ばしてやろうかという目で見てな」
「ここは自由の国だ。まともな人間を責めるような連中はいないさ」
「……小僧。傭兵のおまえは知っているだろう。バストウクの馬鹿な輩どもが、この国の技術を欲しがっている。その一部の馬鹿なものせいで、ワシらまで色眼鏡で見られているんだ」

「そうなのか？ 俺はここで仕事をしちやいるが、サンドリア出身だ。ジュノの事は、わりあい客観的に見えてると思うんだがな。ここはそんなに居心地が悪いか？」

「ふん。貴様がサンドリアの木偶だというのは分かっている。喋り

方が妙に田舎臭いからな」

「はあ……、それでも今日は匂いに気を遣ってるんだがな」

俺が苦笑いを浮かべて言葉に詰まっていると、ガルカが神妙な面持ちで、

「ここの住人に全ての責任があるとは思わん。軽率な行動をとる者が、わが国にもいる事は確かだ。……さっきの言葉は忘れてくれ。

どうやらワシも軽率だったようだ」小さく頭を下げて詫びた。

「いいって、俺だって遠慮してないしな」

「……ワシはな、おまえらと話してた奴も気に食わんのだ」

「エアの事か？」

「そうだ。ジュノとバストワークがこれだけの緊張状態にあるにも係わらず、あの若造も大概に浅慮だ。連邦捜査官だかなんだかわからんが、勝手に部屋から抜け出しおって」

「それは本当か？ あの実面目一本のエアが……」

「昨日の昼過ぎ頃にはもうおらんかった。あの若造、来たときにえらく咳き込んでいたからな。この季節だ、乾燥で体を壊さないようにと、風邪薬と水差しを持っていったんだがな、……あの派手な赤い装束を脱ぎ捨てて窓から出て行ったようだ」

ガルカは上着のポケットから、薬の入った小瓶をちらりと覗かせた。無骨なガルカが、こんな分かりやすい形での気遣いをするのか、と考えたら可笑しくて笑いがこぼれそうになった。

それにしても、エアがパンナと同程度の違反を犯すとはな、いや、さすがにナンパをするために外に出たわけじゃないだろうな。きつと、止む得ない事情があったに違いない。

「我が国の代表とも言える立場の者が、こういう事ではいかんのだ。今や国同士が、経済で静かな戦争を行っているようなものだ。信頼を貶めるような行動は謹んでもらわんとな」

「まあそんなに堅く考えるなよ。今はジュノが率先して動いているんだ。過激派の連中を一掃するための、俺達傭兵団との合同捜査なんだ。これが無事に解決すれば、バストワークの信用も保たれるさ。

……それよりも、周りの人間があんたらに冷たいからって、意固地になって無愛想に接しても、事態は好転しないぞ？」

「ふんっ、やはり生意気な小僧だ。……ワシが無愛想なのは生まれつきだ」ガルカは、表情こそ変えなかったが、微かに優しげな声色でつぶやいた。

二章 四節 打ち上げ（後書き）

>i15982—2219<

二章 五節 暁の独断先行

アイが目の前にいた。小さな体で俺を揺らし、甲高い声で頭をガングンと叩く。アイの手がやけに冷たくて不快だ。

「ソレ、起きて！ 大変なの！」

二日酔いのせいで体がだるい。出し抜けに『大変だ』なんて言われても、案外、体は危機回避を行おうとしないんだな。

「うーん……、大変って何だよ？」

「パンナさんが詰め所にいないの！」

あいつが詰め所にいないと、どう大変なんだ。アイの思考回路はよく分からない。いや、いつもみたく正しく情報を伝えられていないんじゃないか。困ったもんだ。

それとアイ、こんなにも頭が痛くなる程飲んだのは、おまえのせいだぞ。『パンナさんの用事が終わったらすぐに顔出すからね』なんて、期待させるからずっと待ってたのに。

「ソレえ！ ぼーっとしてる場合じゃないの！ 早く探しに行かないと大変な事になりそうなの！」

腕を引っ張るな、そこを引っ張られても痛いだけだ。鉛のように重たい体を起こすと、アイが剣を渡してきた。

自室の暖炉のある壁に飾った、サンドリア王国の国旗を見る。本来なら、国旗の下に設置した飾り台に置いてある俺の剣だ。『剣とは国の為にあるべきだ』と、口酸っぱく言っていた親父の言葉が、祖国を離れようとも、騎士道を捨てようとも、今でも俺の生活の中にあっただ。

「もう！ どこ見てるの！ 本当に緊急事態なんだから！」 そう言うのと、アイはブツブツと何かを喋り始めた。いや、これは――。

一瞬で目の前が真っ白になり、意識の波が、遠くの沖から一気に岸へと押し寄せた。

「馬鹿やろう！ いきなり閃光の魔法を使う奴がいるかよ！」

「やっと起きてくれた。ソレ、本当に大変なの！ パンナさんを助けて！」

真っ白だった視界がはっきりしてくると、アイが大粒の涙を零してひざまずいていた。

「……何があった？ 落ち着いて話してくれよ」

「わたしのせいなの……」

居住区を抜けて、歓楽街まで一気に走ってきた。もうじき夜が明けると言うのに、俺やアイと同年代か年下であろう若者達が、そこかしこで浮かれ騒いでいた。

「ここなんだな？」

「うん……、たぶんここだと思う」

アイに案内された薄暗い路地の入り口には、『マーチャンテイクス・スコルニクス通り』と書かれた、明らかに最近になって据え付けられた小汚い看板があった。

「どうしてすぐ俺に知らせなかった？」アイは目を逸らすと、俯いて黙りこくった。

「なんで黙るんだよ。言えない事情でもあるのか？ もうそんな風にしてる場合じゃないだろ！」

「ごめんね……、わたし、ソレに無茶をしてほしくなかったから」

「何言ってるんだ？ 今の状況を考えてみれば無茶をしたのは、パンナとおまえだろ！ 気になる事があったらパンナとエアに相談しろと言ったが、まずはセイントの俺達に話すだろ！」

「ごめん……」

「はぁ……、馬鹿だな。……まあ、済んだ事は仕方がない。とにかくパンナを探すぞ。あいつは何を考えているか分からんからな」

パンナは今、この路地の先にいるはずだ。独断で先行をした事にも腹が立つが、アイを悲しませた事にはもっと腹が立つ。何より、やはり心配だ。

——パンナめ、アイを長々と連れ回したと思えば余計な仕事を増

やしやがって。俺達が飲んだくれてる間に、アイの勤める病院へ事情聴取とは。案外、仕事人間じゃねえか。

……『業突く張りのスコルニクス』が新型麻薬『ネオモスタミン』を売り捌いている、か。しかも傭兵団の屯所が多く存在する下層区で。その名の通り凶太い性格の野郎なんだろう。確かにアイに頼めば、病院に入院している麻薬中毒患者と話しはできる。だがどうやってパンナは、今まで聞けなかった情報を引き出した？ 患者の男は入院して二週間も経つが、ずっと精神錯乱状態だったというし……。アイは心配してこっそり様子を見てたようだが、特に乱暴な事もしなかったようだ。

にしても、アイのやつ。深く考え込んでいたパンナが何かをやらかすと踏んで、詰め所まで送り届けたのはいい。しかし、外から見張っていたくせに、いつの間にか眠りこけてこのザマとは。……まあ、勘は悪くない。

一步踏み進んだ路地は、予想以上に複雑に入り組んでいた。道は前後左右にあるだけでなく、上にも下にも続く階段があらゆるこちらにあり、パンナがどの道を進んでいったのか全く見当がつかない。

上を見上げると藍色に染められた空が、建物と建物の間に切り取られていた。狭い通路には雑に置かれた樽があり、雨水が自然と蓄えられていて、藻が繁殖して水は緑色に変わっている。足元からは、割れたガラスの欠片が音を発している。

こんな場所なら怪しげな連中を多く見かけると思ったが、余程質の悪い連中が普段からたむろしているのか、誰一人として姿を見かけない。

右の通路を進めば行き止まりに出会い、左の通路を進めば道は途絶え、真下には海が覗けた。戻ろうと引き返すが、道を一つ間違える。居を構えた小さな蜘蛛と目が合った。蜘蛛の巣には何の虫も捕まっていなかったが、根気よく待ち伏せをしているこの小さな蜘蛛は、獲物が掛かれば一瞬でその毒牙にかけるんだろう。まるで路地の奥で待つ運命を暗示しているような、嫌な予感が頭をよぎる。

「くそ！　こんなんじゃないぞ！　アイ、あいつがどこに行っただのかこれ以上は分からないのか？」

「分かんないよぉ！」　あ、と小さくつぶやいて、「上から見下ろしたら分かんないかな？」

「――それだ！　冴えてるぞ！　アイ、はぐれるなよ！」

上りの階段を手当たり次第に駆け上がっていく。よく考えられて設計されたジュノにしては珍しく、無意味な道が多い。くすんだ色をした石造りの足元は、案外最近になって作り足されたものかもしれない。スラムの住人が、好き勝手に道を作ったと考えれば、この通路の出来にも合点がいく。

麻薬密造グループはここに目をつけたってことか。悪さをするには、まさに打って付けの場所ってわけだ。

俺達は行き止まりにあえば引き返し、次の階段へ向かう。何度もそうしてゐるうちに、ようやく、下層区全てを見渡せそうな高い建物の屋上へ辿り着くことができた。視界の端には、今にも消え入りそうな最後の星が瞬いていた。

「どこだ！　パンナっ！　どこにいる！」　目いっぱい叫んだ声は、薄暗い寒空に鈍く反響した。早朝だからか、急な階段を全力でのぼったせいか、心臓がチクリと痛んだ。

「パンナさん、どこにいるの！」

見下ろして周囲を見ると、薄暗闇の中で何かがキラリと反射した。少し開けたその場所には、――パンナのマントだ！　あいつの目立ちたがりな趣味がこんな所で生きてくるとはな。

だが、どうやら既に人間の男達に囲まれているようだ。やりあって負傷しているのか、パンナは左の二の腕を押さえ、ゆっくりと後退し続けている。

やっぱりこうなってるよな。悪い予感の外れてくれない。

あの場所まで、どのくらいかかる？　間に合うのか！

「アイ、おまえは引き返せ。あれだけの人数だ。それに、地の利も向こうにある。……おまえは来るな」

「でも……」

「でもじゃねえ！　こうなっちまったのはおまえにも責任はある！　この状況を打破したいのなら、何が何でもジェイ達を呼んでこい！」

「ソレは一人で行くの？　そんなの……、そんなのダメだよ！　絶対にダメ！」アイが瞳を濡らし、泣きわめく。

泣き虫め。おまえにもしもの事があってみる。俺は生きて帰ったって何も嬉しくないぞ。

「いいか、よく聞け。俺はこの二年、おまえら三人を引っ張ってきたろ？　いくらでも修羅場をくぐってきたじゃねえか。今更この程度の事、屁でもないぞ」

「だったらわたしも行く！　わたしだってもう五年間も傭兵やってきたんだから！」

「リーダーの言う事は絶対だ！　五年間もこの仕事をしてきて、そんな初歩的な事も忘れたのか？　……それにおまえの脚には結構信頼を置いてるんだぞ。ジェイやキョウがいればあんな奴ら、一瞬で片付くさ。だから、頼む。急いで二人を呼んで来てくれ！」

——思えばティルの口癖が移ってる気がするな。

「ソレ……、分かった！　すぐに呼んでくるからね！　絶対に無茶はしないで！」唇を噛み締め、意を決したのか、何度も頷く。

「これ、使って！」腰のポーチから小さな小瓶を二つ取り出し、「この青い薬は、怪我に塗りこむと自然治癒力を高めてくれるの」そう言っ、小瓶を握らせてきた。二本持っても、手のひらに収まるほど小さい。

「おまえ、こんな物をいつの間に……」

「言ったでしょ、薬を作ってあげるって！　……わたしがいない時はこれを渡すようにするから！」

「ってことは、あのキノコのか……？」

「ううん、これはセージと『モルボルのつる』から作るの」

うげえ！　どっちにしても口にしたいくない植物かよ！　まだ動か

ない分、キノコのほうがマシに思えるぞ。

「……で、こっちの緑の葉は？」

「それはパンナさんに渡して！ 『口封じの魔法』を解いてくれるの。魔道士必携の葉だよ！」

魔道士は、呪文を唱える事で魔法を行使する。ゆえに喋る事ができなければ、魔法が使えない、か。あえて原材料は聞かないでおこう。

目で了解の合図をし、葉瓶を無造作にバッグへ詰め込んだ。

「……アイ、道に迷うんじゃないぞ」

「……バカ」アイは、そう言って頬を伝う涙を拭い、駆け出した。アイが走り去る後姿を見送ると、頬を両手で打ち鳴らし気合を入れた。その自分の行為に、ふっ、と自嘲の笑いが漏れる。

ああは言ったものの、あんだけの人数どうすりゃあ——いや、奴らを殲滅させる必要なんてどこにもない。パンナを連れて、この路地を脱出する！

何も馬鹿正直に『道』を走らなくてもいい。通路を避け、幾重にも連なった家屋の屋根を飛び越えていく。朝露で濡れた金属や陶製の屋根瓦へ着地する度、湿った足場とは対照的に、無機質な乾いた音を立てる。これで、気付かれてもいい。奴らの注意を引けるのなら、なおさらいい。このまま、真っ直ぐパンナのところへ突っ走る！

「パンナーッ！」

まだだ！ まだ遠い！

高さの不揃いな段差を飛んで跳ねる度に、革鎧の上に着けた、鉄製の胸当てが上下に揺れ遊ぶ。ひざが衝撃を一手に引き受け、ギチギチと痛む。視界の下からは、ひさしで休んでいた鳥達が、屋根で踊る馬鹿に驚き逃げていく。

「パンナーッ！」

銀刺繍の派手マントが翻った——声が届いた！ 色とりどりの屋根瓦の谷を飛んで走る。もっと前へ踏み込め！ 一段と開いた谷を

飛び越えると、ようやく開けた場所に隣り合う屋根へ辿りついた。
最後の星は、色を取り戻し始めた空にさらわれて消えていた。

「パンナッ！ こっちへ来い！」

「ソレ！ どうしてここに！」驚いた表情を浮かべ、こっちを見上げる。

マントの随所には、刃物で裂かれた痕があり、真っ赤な礼装も破れてほつれていた。

「はっ！ どうしてじゃねえよ！ おまえの行動は分かりやすいんだってな！ まったく、俺達の周りの女はどうしてこんなに勘が鋭いのかね！」

「一体何を……」

「うるせえ！ 面倒は起こすなって、そう言っただろ！ 大体な、そんな派手な恰好してたら、悪党どもに『私はあなた方の敵です』って言ってるようなもんだ！ これに懲りたら、もう少し地味な服装を心がけ——」

ヒュッ、と音が聞こえると、目下の男が構えた弓の弦が揺らいでいた。矢が頬を掠める。

——ちよっ、あっ！ 濡れた瓦に足を取られ、——ドッ！ とパナナのいる高さまで背中から落ちた。落下の衝撃でバッグが緩み、青い葉の瓶がコロコロと転がっていく。

「……いてて」

「ソ、ソレ？」

「……すまん。……やっちゃった」

瓶を追っていた視線を上げると、そこには剣や弓を構えた男達数名が、殺気立った表情で俺達を睨んでいた。数は——剣士が六人に、弓使いが三人。先ほど矢を射った男は、満足そうに鼻をならしていた。

一番奥には、貴金属や宝石を身に纏った成金よろしくと言った、小太りのゴブリンが屋根の縁に座していた。『成金』は、特注であろう悪趣味なマスクを被り、パイプ煙草の煙を静かにくゆらせてい

る。

「ジャマ、ハイッダ。ダガ、マヌケ、ヨワゾウダ」成金はブヒブヒと引き笑いを立てている。

「はあ……、これでも一応そこらのゴロツキよりは高給取りなんだがなあ」立ち上がりながら、同じ様に金で雇われたであろう男達を睨みつけた。

「んー、本当に邪魔が入ったよお」

「はあ？ おまえ、よくこの状況でそれが言えるな！ 助けに来てやっただから少しは感謝しろよな！」

「頼りない部下を持つと大変タルなあ。ティルにやんの苦勞も分かるよお」

「おい！ 話聞いてんのか？」

「で、これで全部なのお？」パンナが成金に問いかける。

「ブエツブエツ！ ゴウカ、ゾウシキ、ガ、ズキナノカ。オデノ、グンタイ、モットイルゾ！ オマエラ、デテコイ！」そう呼号すると、成金を乗せた家屋——これまた小汚い木製の扉から、四人の男達が現れた。手には、やはり物騒な物を持っている。よくもまあこんなにも。悪党つてのは、集まりやすいようにできてるのか、それとも群れるから悪いことをしてしまうのか。

「ダイイチブタイ、ト、ダイニブタイ！ オデハ、ザナガラ『ゾウシレイカン』ダ！ モットモット！ モウゲテ、グンタイ、オオキグズル！ ブエツブエツ！」

「いるいる。大人になっても『ごっこ遊び』に興じちゃう人。まあ、僕も好きだけどね！」

「ズコシ、ハナシ、ワカル、ヤツダ」

「おい、パンナ。あのゴテゴテと派手な装飾の奴がスコルニクスか？」

「うん、あの丸々太ったかわい子ちゃんがそうだよ」

「てか、さっきからあいつに同調したり、認めちゃったり、そんな体で余裕ぶってる場合か？」

「どんな時でも冷静さを失っちゃだめなんだよ、ソレ」

「あのさ、おまえ、自棄になってるだけじゃねえだろうな？ ……
とりあえずコレ」と、言って緑の薬を取り出して投げ渡し、「アイ
から、おまえにだよ」

「うわあ、プレゼントかあ！ ……まだあったかい！ アイさんの
ぬくもりを感じるタル！」

俺が全力で走ってきたからだよ、せいぜい俺のぬくもりを楽しみ
やがれ。——って、あれ？ 両手で瓶を見てるが、左腕を押さえて
いた右手に血がついていない。

「じゃあ、全員出揃ったみたいだし、始めようかあ」パンナは薬瓶
を懐へしまうと、その手で腰のレイピアを引きぬいた。

俺もすかさず、背負っていた盾と腰のロングソードを構える。く
そ！ 二人でどこまでやれる？

「コスヌケ。ナカマ、キテ、ツヨキニナル。ツヨガリ、オモシロイ
！」ケタケタと笑い、腹を抱えているが、マスクの奥から覗く目に
は明らかな敵意が灯っていた。

「僕にはねえ、信条があるんだよ。この世の悪と言う悪は成敗する
ってね。だから……、この場にいる君達悪者は、みーんな捕まえる
よ！」

パンナはそう言うと、目を閉じ、レイピアを突き出した。そして、
今まで聞いたことのない言語で魔法を詠唱し始めた。いや、早口で
詠唱してるのか？

ゴロツキの男達に動揺が走る。今やっと、魔道士を相手取ってい
ると気付いたようだった。

心なしか肌にジリジリと熱さを感じる——突然、パンナの剣が持
つ鋭い切先から炎が立ち上り、見る見るうちにその刃を染めていく
——と思ったが炎はフツと掻き消えた。

「間違えた！ これじゃあ殺しちゃうところだったタル！」頭を小
突いておどけ、赤い羽根付き帽子をくいと脱いで上へ放り投げた。
「ア、アイツ、マハウツカウ！ アブナイ！ コロゼ、コロ——」

前兆もなく突風が間近を通り過ぎ、音を奪い去る。あまりの風圧に目を閉じずにはいられなかった。

——バチィッ！ とチヨコボを鞭で打つよりも鋭い音が前方に弾けた。目を開けると、弓を構えていた男が倒れ込んでいた。

パンナの姿が無い。ほらっ！ とパンナの声が一瞬耳に入った。素早く辺りを見回したが、どこにも姿が見当たらない。姿を捉えられずにうろたえているのは、敵も同じだった。

「ついつい、炎を出しちゃうんだよねえ！ てゆうか、『赤の称号』ってこっちゃあまり知られてない？ 僕らってもっと有名だと思ってたのになあ」

頭上か！ 昇り始めた朝日に目を細める。まだ、周囲に気流が發生し続けている。風？ 風を操って飛翔してる？ 魔法はそうやって使うものなのか！

「お、おい！ パンナ！」

——ドサツ、ドサツと、またも弓使いが二人倒れた。何が起こったのか正確には把握できないが、成金が太ももに灰をこぼして小さな悲鳴をあげていた。

「ふう、三丁あがりい！」

パンナが風に乗って、俺の側へ舞い降りた。風に揺られて落ちてきた帽子を器用に受け止め、頭に納めた。剣からは紫電がほとばしり、無数の小鳥がさえずるような音を放っている。

「パンナ——」

「これで、弓矢に狙われる事はないよお？ さあ、ソレも協力してくれる？」

「あ、ああ。……分かった。話は後って事、だな？」

「そういう事！」

衝撃の先制攻撃はもう通用しないってことだな。こうなったら地道に数を減らすしかない。金で雇われてる連中だ、あと一人、二人やっちまえば命惜しさに逃げ出すハズだ。そうなった時が逃げ出す機会！

「ヤ、ヤツラ、シャベツテル！ イマノウチ、ヤ、ヤレ！ カネ、タグザン、ヤル！」

号令を掛けられた先頭の男が、パンナ目掛けて剣を振り下ろす。パンナが横目でレイピアを振り上げ、その力を受け流す。同時に、パシッ！ と音を立てて、剣士の男は糸が切れた操り人形のように倒れ、それっきり動かなくなった。

「ああ、それと。……殺しちゃだめだよ。みんな捕まえるんだから」「はあ？ 『殺すな』は、いくらなんでも難しいだろ！ ってか、この状況なら当然逃げの一手だろ！ 馬鹿が過ぎるぞ！」

「はあ、これだから傭兵は荒っぽくて困るタル。殺しは戦争の時だけで充分だよ。無闇な殺生はダメダメ！ ……君達も、理解してるう？」言い切る前に、地面を蹴り、急襲を仕掛けると、また一人倒れ込んだ。……聞いておいて不意打ちとは、外道め。

敵はじわじわと距離を詰めて来ていた。こっちはもうほとんど下がれねえっていうのに。

パンナの奴、どうしてこんな場所に追い詰められるまで——まさか、敵さん全部引きずり出したってのか。『信条』ってやつのために。

……くだらねえ。何ものも、命と引き換えになんてできるかよ。

「アイツ、カラ、ヤレ！」成金が、宝石で飾った指で俺を指す。

敵さんの標的は、どうやら俺に移ったようだ。後ろの方に隠れていた『第二部隊』の視線が俺に集まる。へっ、魔法が使えない俺なら殺れると踏んだわけか。……目に物見せてやる。

「だんなあ！ このマヌケを倒したら報奨金を出してくれよな！」

「ソツチ、ノ、マヌケ、ハ、ヤズイゾ！」

長髪の剣士が成金にせびる。誰がマヌケだ。あつたまきた。

「ソレ！」

「馬鹿！ 分かってる、俺なら大丈夫だ！ 捕まえるんだろ？ あいつを」突進してくる長髪の剣士から目を離さず答えた。「言ったからには、絶対に逃がすじゃねえぞ！ 行け！」

「まっかせといて！」

パンナが成金に付いた護衛五人に刃を向ける。

パンナの『信条』は悪党を全て捕まえる事だろうが、この危険な捜査の真の目的は、成金スコルニクスを捕まえて情報を得ることだろう。せつかく張った命だ、無駄にしてもらっちゃ困る。

——『長髪』の剣先が肩をすれすれに振り抜かれる。造作もねえ！ 最初の一撃を、二歩前進で長髪の右横へかわし、すれ違いざまにすねを斬りつけた。ぐう！ と呻いて、長髪が倒れこむ。間髪を入れず顔面に蹴りを叩き込む。手足をジタバタさせてもがき呻く長髪から剣を奪い、背面の屋根の上へ放り投げた。もう一度顔面に蹴りを入れると、観念したのか体を丸めて大人しくなった。

「死ぬよりはましだろ？」残りの二人を真っ直ぐ睨みつけ、威圧する。

耳の至る所、鼻に口にと、節操無しにピアスをつけた男と、金色のチェーンネックレスを何重にもぶら下げた男が顔を見合わせ相談している。『ピアス』と『チェーン』が同時に動き出した。

……成ってねえ。

「ぜんっぜんっ成ってねえんだよおめえら！」

左手で、胸のホルダーから投げナイフを引き抜き横手投げ——宙を舞った黒光りの殺意が、ピアスの肩口に突き刺さった。ピアスが、ぎゃあ、と低い声で悲鳴をあげた。不測の攻撃にチェーンがたじろぎ、後ずさる。——逃がすかよ！

風化し、砂利に姿を変えつつある地面をジャツと蹴り、低い姿勢のまま盾を前に突き出し、チェーンの剣を——バンツ！ と撥ね付けた。下方向からの強烈なタックルを見舞い、チェーンが体勢を崩しかけたその瞬間を狙い、足を掛ける。右手を振り上げて剣の柄頭で胸を殴打し、勢いをつけて転倒させた。硬い地面と背骨の一部が接触したのか、石がずり落ちるような音が鳴った。

仰向けになって顔をひきつらせたチェーンの首筋へ剣を向け、ピアスを睨む。

「おい！ 針刺しみたいな顔したおまえ！ 動いたらこいつを殺す！」

「ガキィ……、でめえ絶対ゆるぎねえ！ ぜっだいにゆるぎねえ！」
ピアスは、目を真つ赤に充血させながら、刺さったナイフを抜くとその場に投げ捨てた。……あーあ、んなことしたら血が止まらなくなるぞ。ってか、当然のように仲間意識はないのな。

チェーンの鼻柱を思い切り踏みつけ、「動くなよ！」と、言ったが、うーうー呻くばかりで聞いちゃいなかった。

「ふうん、結構やるねえ！ セイントのお荷物担当だとおもったけど、見直したよお！」パンナが手を広げて大げさに驚いた振りをした。目を見開いた表情は一層わざとらしい。

「誰がお荷物だ！ ……こちら五歳の時から剣術を磨いてきたんだ。そこのゴロツキじゃ相手になんねえよ。ってか、前だけ見てろ！」

「おい！ ガキィ！ でめえ俺様を無視しでんじゃねえ！」

「……はあ、息巻いてんのはわかるんだけどよ。俺の相手をできるのはもうあんただけだぞ。三人仲良く星空観察でもするか？ もうとつくに時間外れだけだな」

「うぐっ……！」

「こちらら朝っぱらに叩き起こされていらついでんだ。……これ以上やるってんなら命の保証はできねえぞ」

「……くぞっ！ 覚えでろよクソガキィ！」

ピアスは左肩を押さえながら、小悪党然とした言葉を吐いて、背を向けて逃げだそうとした——狭い空間を木霊する低い破裂音が響く。ピアスは声になり損ねた吐息を漏らし、崩れるように倒れこんだ。

「ニゲルヤツ、ユルザナイ！」そう怒号を上げた成金の手には、小型の銃が握られている。「コレハ、バズトウグ、ザイシンシキ、シサグヒンジュウ！ ゼンゴヒヤグマン、ギル、カカタ！ タマ、イッパツ、ゴマンギル！ オマエ、イノチ、ゾレダケ、カチ、アル

カ？ ブエツブエツ！」

「ソレ！」

バンッ！ と、二発目が発射され、パンナの足元を掠め去る。

「ヒトノ、シンパイ、ハ、マヌケ！」

「パンナ！ どうするんだ！ あんな風に連発できる銃なんて相手したことねえぞ！」

右手に、レンガで壁を作ったゴミ置き場がある、まずはあの物陰に隠れるか？

——三度目の破裂音が響くと同時に、左の脇腹に焼けるような熱さ。肉を押しつぶしていく音が、体の内から聞こえた気がした。脚の力が急速に抜け、ヒザで地面を打つ。

「があっ！」

「ソレえ！」

「マヌケ、フタリ、イラナイ。ヨワゾウナ、マヌケ、タイジヨウ！ ブエツブエツ！」

くそ……ここまでか。……血が、止まらねえ。とっさに押さえた左手のグローブは、とっくに真っ赤に染まっている。

……土台無理な話だったんだ。あーあ、なんでこんな事に首突っ込んでしまったかな。あいつが泣いてたから……、あいつに責任を負わせたくなかったから、か。覚悟できてたつもりだったけど、やっぱり死にたくねえな。……俺が死んだらあいつは悲しむだろうな。

——俺が死んだら誰があいつの面倒を見るんだ？

「……たいじよう……？ 退場なんてする……かよ！ 俺は……最後まで戦ってやる！ おまえのそのマスク……引っぺがしてやるからな……！」

投げナイフの有効射程距離はせいぜい五メートル。成金野郎との距離はその約三倍。当たらねえ。当たっても、まず有効打にはならない。いいとこ一秒、二秒の時間稼ぎにしかないだろう。……だが、パンナならあるいは——。

ロングソードをその場に置き、右手でホルダーからナイフを引き

抜き、力任せに上手投げ——渾身の最後っ屁は、成金の横をゆっくり回転しながら通り過ぎ、朝焼けの空へ消えていった。

「ブエツブエツ！　ワルアガキ、オモシロイ！」

渾身の一投が掠りもしない事に落胆する。——意識がかすんでいく。体温が低下しているのか、寒気が体中を襲う。震える自分の手を恨みつつ目を凝らそうとしたが、重いまぶたを支える力は既に無かった。

——ブエーッ！　と成金が叫び、何かが落ちる音を耳が拾い上げた。

「……ソレ。遅くなった」

続けざまに、すぐ後ろの屋根上から声が聞こえた。……ジエイ……？　応援が来たの……か。

「……レ？　……ソレエ！」

消えゆく意識の中、あいつの声も聞こえた気がした。心配かけた、すまん……な——。

二章 五節 暁の独断先行（後書き）

>i15982—2219<

三章 一節 大都市の光と影

「つてえ……」

「ソレ！」

脇腹に感じる鈍い痛みで意識を取り戻すと、アイが心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

「……動くなよ。落ちる」

大丈夫だ、そう口に出して言いたかったが、動く気力も喋る気力すらも、体からすっかり抜け落ちていた。ジェイの大きな背中におぶさり、情けない事に自分の体を全て預けていた。

見慣れない陰気な細い道をジェイとアイは歩いていた。もしかしたら一度通った道なのかもしれないが、視界の端から端へ移動していく薄汚れた壁の染みを、ただただ目で追っていた。

「ソレっ、もう……大丈夫だから、ね」

小さく頷き、それに応える。アイは輪をかけて大粒の涙をこぼしている。……そんなに泣くなよ、死んじまったみたいじゃないか。

「ごめんね、わたしのせいで……。わたしね、ソレがいつも無茶するから……。怖かったの。ソレ、お母さんが亡くなってからずっと剣を振り回してばかりで……。どこか、自分を傷つける場所を探してるみたいだった」

そんな事、考えたこともなかった。

「だからね、傭兵になるって言い出した時、本当はすごく反対だったんだよ！ でも……。でもね、『サンドリアの民ならば、常に志を持って』って、いつもわたしのお父さんが言ってたから。だから本当は……。本当はイヤだったけど、すごく我慢したんだよ」

そうか、アイは――。

「でもね、一つだけ我慢出来なかったことがあったの。わたし、ソレを止める事はできないけど、そばにいて守ってあげるくらいはできるって……。だから、わたしもソレと同じ傭兵になろうってそう

思ったんだよ。……あの時は、いっぱい怒られちゃったね」アイが無理矢理に表情を緩ませる。

「今……、我慢してたこと全部話しちゃった。自分への約束破っちゃった……あはは」

——本当に『子守』をしたのは、アイの方、だったんだな。

「……アイ……、あり……がとう……な」

「うん……うん。もう、絶対に無茶しないで……ね。約束だからあんなに目をこすったら腫れちまうぞ。泣き虫め。……本当にありがとうな。」

「うっ！」

「ソレ！ 大丈夫？」

ジェイが立ち止まる。

「頭に……」背の高いジェイにおぶわれていたせいで、羽虫を捕まえようと、高く居を構えていた蜘蛛の巣を引っ掛けた。

「もう、びっくりしたよ！」

ジェイが無言のまましゃがみ込み、アイは少し背伸びをして、頭に絡まった糸を優しく払っていく。これじゃまるで、父親におんぶされて母親に頭を撫でられてる子供だな。

「ふっ……」

「ど、どうしたのソレ？」

「なんでも……ない」

「ふうん……、変なお」アイは少しだけ不思議そうに首を傾げていたが、すぐに嬉しそうな顔を浮かべた。

まだ捕らえられて死ぬわけにはいかないんだ。俺はこうやって生きて戻って、アイの笑顔を守って暮らして生きていくんだ。悪いな。路地を抜けると、ジュノ警備隊と数人の若者がもみ合っていた。人目をはばからず、大通りのど真ん中での騒動だ。珍しい事じゃない。

一際体格の大きなガルカの隊員が、けたたましく罵声を放つ、威勢のよい若者の首根っこを乱暴に掴んで軽々と上へ持ち上げた。隊

のリーダーであろうヒュームの男が、すぐさま制止をかける。他の若者達は強烈な出来事を目の当たりにして戦意を喪失し、大人しく連行されることに決めたようだ。市民を守るための組織としてはやりすぎな気はするが、日々荒事の中で生きている俺が言える筋合いではないだろうな。

警備隊が、うなだれて歩く若者達を急かしながら、騒ぎの場を去っていく。リーダーの男は隊列の一番後ろを歩いていたが、不意に立ち止まった。男の視線の先には、赤い髪を頭の横に一つ結ったタルタルの女がいた。タルタルの女は、不安げな表情を隠す事無く浮かべていた。男は女に軽く会釈をし、女もそれに応じる。

察するに、過剰に騒いでいた若者達——きつと、酒を大量に飲み我を忘れて暴れていた——を、危険と感じ、警備隊へ通報したんだろう。ジュノでは、市民がお互いの事を思いやる気持ちを忘れないが、代わりにお互いを監視し合う様な風潮がある。治安を守るのは警備隊だけでなく、自分達でもあるという自負がある。それがいい事なのか悪いことなのか、セイントの中でも意見は割れているが、世間的には概ね理解されているようだった。アイもジェイもその光景に対し、特に何も思う事はないようだ。俺を気遣いながら、騒ぎを尻目にゆっくりと通りの歩道を歩いて行った。

「悪いなウンディ」

「いいのよ、いつもお客さんが来られても良い様になってるから」

こんなことを真面目に言う。『客』じゃなくて『患者』だろう。

やはり、アイの天然さ加減は家庭教師譲りだな。

「それじゃ、私はもう行くわね。一応個室は用意させてもらったけど、あんまり大騒ぎして他のお客さんの迷惑にならないようにね。……傭兵の方たちって声の大きな人が多いんだから」ウンディはしかめていた表情を崩し、背を向けてドアノブに手をかけた。

言い忘れた、とでもいわんばかりに素早く振り返り向いた。

「あと、あまりアイちゃんを悲しませちゃだめよ？ あの子は本当

にあなたの事ばかり考えてるんだから」

「わかってるよ。気をつける」

若さっていいわね、にしても傭兵は……と、ブツブツ独り言を言しながらウンデイが出て行った。

横になったまま部屋を見渡す。左手のサイドチェストに飾られた青い花は、清流を思わせる爽やかな香りを放っていて、病室然とした独特の匂いを感じない。様々な花をかたどった模様の薄茶色の壁紙。右手の壁には威厳漂う骨董品の時計が掛けてあり、短針が十時を指している。

窓からは海が覗けるが、今は日光をさえぎるためにカーテンが閉まっている。ベッドの両側には、蝶のレリーフを象った椅子がそれぞれ二つずつ、左手側には三人掛けのソファがあって、大勢でも見舞いに来られるようになっていいる。足を向けた先の壁に飾られた一枚の絵画。確か、アンなんとかっていうウィンドスの画家が描いた『太古の血潮』だ。雷やら卵のような物が、一見不規則に描かれているが、何か意味があるんだろう。

意外にもジェイは絵画や彫刻といった物が好きで、気まぐれに自分の部屋に呼びつけては小さな鑑賞会を催してくる。この絵もジェイの部屋にも飾られていたな。以前画家からの仕事を受けた時に報酬として貰ったらしい。どうせ貰うなら世界に一枚だけの絵が欲しいと思うんだが、量産品でもいいものはいいんだろうか。

まったく品のいい部屋だ、何となく居心地が悪くなるくらいに。個室を貸してもらえたのも、アイの元家庭教師であるウンデイとの面識があるおかげだ。俺としてはあまり仰々しいのは好かないが、アイのたつての頼みで押し込められた形だ。切り傷や刺し傷ならアイの治療魔法だけで処置できるが、銃弾を受けたとなれば、弾を摘出しない限りは傷を塞いでも意味がない。アイが応急処置として傷を塞いだものの、結局は病院送りというわけだ。

ジェイが、『俺にまかせろ』と言ってナイフを取り出した時は、さすがにアイも止めたようだ。ジェイの事を信頼していないわけじ

やないが、人が気絶してる間に、物騒な物で体を掻き回されるのは勘弁願いたい。

物騒な物を扱う——この『モンブロー大病院』の医者も同じ事か。元々は、上層区の一角にあったこじんまりとした個人病院だったらしい。今や教会の鐘塔はおろか、上層区名物の時計塔すらをも超える高さの大病院だ。件の麻薬で精神を侵された人間も、ジュノ所属の傭兵団もみんなここに厄介になっている、もちろん例に漏れず俺もだ。

七階建ての病院は、病室もめまいがするくらいにある。以前セントに緊急の依頼が入った時に、非番のアイを呼びに訪れた事がある。その時は、本当にめまいがするくらい走り回って——もちろん病院の廊下は走ってはだめだが、あの時は一刻を争う事態だった——やっとの事で、倉庫から医療器具を運び出していたアイを探し出せたんだ。『受付で呼び出してもらえばよかったのに』とアイに言われた時は、顔から火が吹き出るほど恥ずかしかったな。……あの時は本当に緊急だったんだ、俺がマヌケなわけじゃないぞ。

院長のモンブローは、優しい人柄と類稀なる医術の腕を買われ、ジュノ政府の支援を受けて国立の大病院を設立。友人にジュノ親衛隊隊長がいるらしいが、縁故などではなく実力だろうな。ここに通う患者達の顔を見れば分かる、ここへ来れば何とかしてくれると、みんなが安心しきっている。ここでは魔法に頼らず医術による治療をする。魔法に頼らないのは院長の意向ではあるらしいが、実際に魔法は万能の力なんかじゃなくて、病原体に感染したり精神を病んだ時はどうしても薬を使う必要がある。俺の脇腹から銃弾を取り出したのも魔法じゃなく、医術だ。——人を救うための刃と人を殺すための刃、さて、俺はどっちだろうな。

扉がノックされる。入るね、とアイの声だ。

アイが、ベッドの横にある椅子に腰かける。

「えへへ、気分はどう？　なんか病人さんみたいだね」と言って、クスクスと笑っている。

実際、似たようなもんだ。

「ああ、少しだるいが特に問題はないな。でも、この部屋はやっぱり大げさじゃないか？」

「いいの！ 魔法で傷は癒せてもどつと疲れが出るんだから。鉄砲で撃たれて、その上手術までしたら、いくら頑丈な人だって安静にしていなきゃだめなのっ！」

「うーん……、うん」

白魔道士に言われると説得力があるな。それにしても表情が少し怖い。

「それに、危険な目にはあったけどちゃんと成果は挙げたんだよ。少しくらい休んでも罰は当たらないと思うよ？」アイはそう言い、鞆から水玉模様のりんごを取り出して器用に剥き始めた。

「成果、か。……『危険の目』といえば、パンナは？」

「パンナさん？ うーん、わかんないけど……、あ！ 『とりしらべ』っていうのの最中なんじゃないかな！ パンナさん刑事さんだし！ なんかワクワクする響きだねえ！ とりしらべ！」

パンナは刑事じゃなくて、麻薬取締官だけだな。まあ、違いを言ったところで野暮ってもんか。

「ワクワクはしないけど、あのゴブリンは捕まえたってことだな？」

……あの成金野郎、一発ぶん殴ってやらないとな」

「ゴブリン？ ヒュームの男の人達じゃないの？」

「見たことないマスクを被った太ったやつだよ」

「ふうん、わたしは見てないよお。でも、ゴブリンさんで太ってるってちよっと面白いね！」

「はあ、何にでも喜べるおまえがうらやましいよ」

そうかなあ、はい、と照れながらツルリと剥いたりんごを差し出してくる。本当にかわいいやつだよ、おまえは。『たまには両親の顔を見せに、サンドリアに戻ったらどうだ？』なんて切り出してみようかとも思ったけど、『今朝言った事気にしてるんでしょ？ 別に無理して付いてきてるわけじゃないよ』と、返されるのは分かり

切ってるな。そんな無駄なことはやめて、アイの剥いたりんごをほおぼるとしよう。

アイと他愛もない話をして一時間程経った頃、再び扉がノックされた。

「ソレさん、失礼します」

扉を開けて現れたのはエアだった。あの赤い帽子を脱いで一礼すると、足音を立てないようにアイの横へ来る。

「エアさん、来て下さってありがとうございます！」

「わざわざ来てもらって、なんか悪いな」

「いえ、そんな。アイさんから取締局へ連絡が来ていたのですが、私はまだ自室で休んでいたもので、来るのが遅くなってしまいました。それで、お体の方は大丈夫ですか？」

「ああ、この通り」と、少し体を起こす。「ててっ……」動かしてみるとやっぱり少し痛い。

「ばか！ もう何してるの！」

アイに怒られるのも悪くない。

エアが壁際に据え付けてある三人掛けのソファアへ腰かける。ソファアとは少し距離があって、そちらへ顔を向けると少し首が痛い。「ふふっ、あまり無理はなさらないください。お手柄だったのですから、少々休んでも誰も文句は言わないでしょう」

見透かしたように、アイと同じ様な事を言う。退屈なのは苦手なだけだな。

「そうそう、パンナさんも呼んでおきました。昨日の夜から活動しているというのに、彼は本当に熱心ですね。私が局へ足を運んだ時も、容疑者の取調べをしていたところですよ」

「あいつが仕事に夢中だなんて、今でも信じられないな。サボる機会をいつでも見計らってる姿しか想像できないぞ」

「パンナさんについては、昨日お話した通りですよ。……っと、噂をすれば何とやら、ですね」

ぱたぱたと廊下を走る音が近づいてくる。その音は部屋の前で止

み、扉が唐突に開け放たれた。

「ソツレエー！ 元氣してるう？」

お馬鹿が、満面の笑みを部屋中にばらまく。エアは顔が引きつっている。静かにしろ、こっちはケガ人だぞ。

「元氣じゃねえよ。半分はおまえのせいでこうなったんだからな、もっと心配して早く来てもよかったんじゃないか？」

「あれえ？ まさにお荷物な人の言い分だねえ。男なら、『別に見舞いになんて来なくてもいいんだぜ』くらい言って欲しかったんだケド」憎まれ口を叩きながら歩いてきて、アイの左側の椅子に座った。

「てめえ、……たたっ」

「怒っちゃだめだよソレ！ パンナさんだってお仕事で来られなかったんだから」アイが、体を起こそうとするのを手で制止する。

「わかってるよ。……わかってるけど、一言言っただけでやらないと気が済まなかったんだ」

おまえを悲しませる原因を作ってるからだよ。くそっ、脇腹がじんじんと痛む。パンナといると血圧が上がるよ、まったく。

「冗談だよお？ はい、これ入院見舞い」そう言っただけでパンナが差し出してきた袋の中身は、チョコレート、スティックキャンディ、スナック菓子、と、おおよそケガ人が食べるような物はない。

「おまえなあ、自分が食べるもん持って来てどうすんだよ。……もういいよ、とりあえず大人しくしてろよな」

「はい」

そう言うのと、パンナは持ってきた袋に手をつき込んで、お菓子をまさぐりだした。

「ではソレさん、これは私からです」

エアが持ってきたのはパママだった。南国エルシモ島の特産品で長細い黄色の木の実。栄養価が高い上に体への吸収力が優れている、まさに打ってつけのお見舞い品だ。

「エア、ありがとな」

「いえいえ、病院へ寄る前に朝市で新鮮なパママがあったので……、アイさんとパンナさんもどうぞ」エアが房から二本ちぎってアイへ渡した。

「ありがとうございます！ はいっ、パンナさん」

「うん、なかなかおいしそうなパママを選んだタルね！」

「あはは、ありがとうございます」

なぜか上から物を言うパンナに、エアはそつなく対応している。礼を言うのはパンナだろうが。

「そおいえば、局に若いにーちゃん達が連行されてきてたよ。下層区で騒いでたから、警備隊がしょっぱいてきたみたい」パンナがパママを剥きながら言った。

「そいつらって……」

アイに視線をやったが、やっぱりパママを剥いていた。こいつが気に留めるはずもないか。エアはというと、何も口にせず考え事をしているようだった。

「そいつらは俺達も見た。酒でも飲んで暴れたのかと思ってたけど、……麻薬を？」

「うん、それも数種類の物をね。中にはこれもあったよお」

ちらっとエアを見たパンナが懷から差し出してきたのは、ヒュームの親指の先ほど大きさもある白い球体だった。タルタルのパンナが手のひらに乗せているせいで、とても大きく見える。

「それは……？」

「これが巷で話題の新型麻薬『ネオモスタミン』だよお。僕も資料では見たことあったけど、実物はこれが初めてだよお」

「こんなに大きな物だったのか」

顔を見合わせたアイも、この大きさには驚いているようだ。

「ネオモスタミンだけじゃなくて、以前に流行っていた麻薬も持っていたみたいだよお。仲間内で打ち比べでもするつもりだったのかなあ？ なんてね！」

「あながち間違いじゃないのかもしれないな。それにしても、噂の

麻薬とすれ違ってたとはな、俺の思った以上に薬物は蔓延してるんだな」

「うんうん、だからこそ僕がわざわざ来てあげたんだよお。せいぜい足を引っ張らないようにしてよね？」

「おまえは本当に口が減らないな。……もう慣れたけど」

「こうやって僕のペースに巻き込まれていけばいいの！ ふふっ、まあソレに手を焼かされたら、これで気持ちよくなってストレス解消だよお」そう言ってパンナは、上を向いて口を開けて白い球体を飲み込むフリをした。

「おい、それはま——」

「パンナさん！」

まずいだろ、と言いかけたところで突然エアが立ちあがり、怒鳴り声をあげた。二人の間に座っていたアイは、エアの尋常ではない怒声にまたがれて、早くも涙目になっていた。

「やめてください！ そんな事したら死んでしまいますよ！」

「冗談だよお、さすがにそんなことはしないタル」

「冗談でも不謹慎が過ぎます」エアがいつもの声色に戻り、パンナのそばへ行って、白い球体を強引に取り上げた。

「これは預からせて頂きます。……というより、パンナさん、これは持ち出してはだめでしょう？」

「捜査官なら麻薬の所持は認められてるよお？」

「ええ、ですがそれは手続きを踏んでいる事が条件です。これは、今朝押収された証拠物品ですよね？ 許可が下りるまで最低でも二日はかかります。それをあなたは黙って持ち出した。……立派な違法行為ですよ」

「それは知らなかったよお」と、パンナはいつもの調子でへらへらしている。

はあ、とため息を漏らしながら、エアが再びソファに腰を落ち着け、小さな紙袋に球体を入れて懐にしまった。

「知らなかったでは済みませんよ。私たちは法の番人でしょう？」

常日頃から、違法行為に対して断固たる意志を持って立ち向かわなければなりません。ましてや、今回のように民間の方々とお仕事を共にするならなおの事です。この都市に住む人達が、一体となってこの麻薬の被害を少しでも小さくしていかなければならない、そう思いま……ごほっ……思いませんか？」

エアはひとしきり喋った後、咳が止まらないようだった。

「エアさん大丈夫ですか？」少し目を赤くしたアイが、咳をしながら伏せるエアの様子を覗き込む。

「だい……大丈夫……です」

「風邪ですよ？ お薬なら持っているので、飲んでください」アイは、ベッド脇のサイドチェストの水差しからコップに水を入れ、薬と一緒にエアへ渡した。

「粒状なのでとても飲みやすいですよ」

「はい、ありがとうございます」

アメ玉のような薬をエアが飲む。パンナはその様子を食い入るように見ていた。

「おいパンナ、エアが飲んでるのはおまえの好きなキャンディじゃねえぞ。そんなところにまで食い意地張るなよな。おまえは少し反省してもんを覚えろ」

「僕はあの後、眠らずにずっとお仕事してたんだケドなあ。ずっと休んでたソレとは違うんだよお？」

「おまえは——」

と、こいつのペースに乗せられてはだめだ。落ち着け俺。

「なあ、連行されてきた若いやつら、どうしてた？」

「どうって？」

俺と同じ年頃の連中が、どういう処遇を受けるのかが気になる。なにかとその副作用が話題になっている麻薬に、わざわざ手を出すのは馬鹿のやる事だ。だからと言って、これからの人生が台無しになってしまうのはやはり可哀想だ。

「もしかして、心配してあげてるのお？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「他人の心配をするなんて優しいことだねえ。感心と同時に……ほとほと呆れるタル」と、パンナはやれやれと両手を上げて首を振った。

「なっ——」

「いい？ もうソレは部外者じゃないんだよお？ まだ外からこの事案を見ているつもりなのかもしれないけど、そういう甘さが命取りになるってことを忘れないでね」

「わかって——」

「死んじゃえばいいんだよ」

わかってる、そんなつもりじゃない、と言いかけたが、パンナの突き出た口は動きを止めずにそう漏らした。

「パンナさん！」 エアが再び立ち上がる。

「社会の秩序を乱す人間は、消えちゃった方がいいんだよ。あの若いーちゃん達も死刑になっちゃえばいいよ」

パンナの口から放たれたその言葉は、まるで氷のように冷たかった。

「あーあ、本格的にお腹も空いてきたし、風邪を移されたら困るから僕は先においとまするねえ」パンナは椅子の上から跳ね、「じゃあねえ！」と言って病室を出て行った。

「おい！ ……本当に行っちまいやがった。なんつー薄情者だよあいつは」

成金野郎の事を聞き逃したな。くそっ、あいつは何をしに来たんだ。

「なあ、エアは上級捜査官なんだろう？ さっきの件もあるし、あいつと一緒にやりたくないならチームから外してもいいんじゃないかな？」

「ソレ！ それはあんまりだよ」俺の提案に、アイが抗議の声を上げる。

エアはにっこりと笑ってソファに座ると、「そんなことはしませんよ。違法行為は許しがたいですが、まあお恥ずかしい話ですがこういう事はよくあるんです。それに彼は少々変わったところはありますが、昨夜話した通りとても優秀な捜査官です。……ソレさんも既にお分かりでしょう？」そう言って、コップをサイドチェストへ戻した。

「まあ……、まあそうかもしれない」

俺じゃあ代わりになれない事は確かだ。色んな意味で。

「若者達の件ですが、安心してください。死刑になったりはしませんよ」

「……そうか」

「ソレさんのお気持ちは分かりますよ。ですが罪を犯したとはいえ、まだ若い人達ですから更生する機会もたくさんあります。それに他の捜査官から聞いた話によると、まだ未遂のようです」

ガルカの隊員に首根っこを掴まれていたのが主犯格の青年だった。彼は、上層区に屋敷を構える名士の息子で、お金と暇を持て余すあまり、友人を連れ歩いては何かと騒ぎを起こしていた。

取調べによると、二百四十万ギルという『お小遣い』を父親から受け取り、そのほとんどを支払って白い球体と呼べるほどの大量のネオモスタミンを入手した。使用目的は、既存の麻薬と効果の比較。前科は無いが、今回の件で彼は懲役五年執行猶予無しの実刑に相当し、他の青年達も、懲役一年執行猶予三年相当、と見込まれる。大人からの注意では済まされない。薬物に関連する刑罰は重い。と、エアが若者達を担当した、知り合いの捜査官から耳に入れたことを話してくれた。

「そんな重い罰でも、この病院に入院してる重度の患者よりましだな」

「本当にそうだね……」そう呟いたアイの表情は暗かった。回復の見込みのない患者がいる辛さは、この中で一番知っているんだ。一度落ちてしまえば闇だ、それが浅かろうと深かろうと。

それを考慮してか、「未遂で逮捕できたのも、この都市の自浄作用のおかげですね」と、エアの言葉には、社会の光が窺えた。

「監視社会、か」

「ええ、……悪く捉えれば。ですが素晴らしい事ですよ。私の生まれたバストウーク共和国では、地域に住まう人達との関係はとても希薄ですから、見てみぬふり、触らぬ神に祟りなし、です。ジュノ大公国の人達は、関係は希薄ながらも公国民としての気高さがあります。中立国としての国民性、と言えるかもしれません」

「えらくジュノの事を買ってるんだな。バストウークとジュノと言えば、他の二国よりも相性が悪そうだけど」

「あはは、今の国交状態ではそう思われても仕方ありませんね。：私はジュノが好きですよ。小さな頃から、弟と一緒にジュノで働く事が夢だったくらいです」

「弟がいるのか。弟はバストウークに？」

「いえ、先を越されてしまいましたね。彼は十八の頃からこちらで仕事をしています。私はこの通り……、行ったり来たりで落ち着けません」エアは口元を緩めながら俯いた。

「弟さんとは会ってるんですか？」アイが気を回す。

俺もアイも一人っ子だから、離れて暮らす兄弟に顔を合わせる感覚は分らない。でも、家族に会いたいという気持ちは同じはずだ。「ええ、ジュノ本部へ異動になったので、挨拶に。私ばかりが喋っていて疲れてしまったと思います」

「そうか、会える時に会っておくのはいい事だな。俺達も今回の仕事片付いたら、一度戻るか」

「う、うん。そうだね」

連れ戻されるのを心配してるな。目が左右にひっきりなしだ。明らかな動揺が面白い。

「そういえば、さっきパンナがそれを食べようとしたけど、本当に死ぬのか？」エアの懷に指を指した。

エアは両膝に手を置いて、表情を強張らせた。

「はい。これは、経口摂取する種類の薬ではなく、注射器を用いて直接体内へ入れるんです。この大きさですと数十回分の量でしょう。飲み込めば例えここが病院であっても、治療も間に合わずに死に至るでしょうね」

俺とアイは同じ事を考えているだろう。パンナは何と恐ろしい事をしていたか。エアは続けた。

「それに、これは相当毒性の強い原料から作られているようです。噂……いえアイさんは知っておられると思いますが、本来の使い方で常用していても、人体にかなりの悪影響があります。未だに効果的な治療法も確立されていませんし、今後その見通しは暗い——はずだったんですよね」

「はずだった？」

エアは小さくうなずいた。

「パンナさんが連行してきたブローカー達を取り調べた結果、分かった事があります。新型麻薬には名前が付けられていなかったんですが、最近ブローカー達の間では『ネオモスタミン』と呼ばれるようになったようです。名前の通りであるなら、キノコが原料でしょう。新型麻薬を製造している密造グループ『青い歯車』がジュノ近辺でしか活動してない事を考えれば、原料の特定も時間の問題ですよ。治療法も見つかるかもしれませんが。本当にお手柄ですね」

「俺はあいつの独断行動を認める気はないけどな。こんな事が何度も起きるなら命がいくつあっても足りないぞ」

エアとアイは、その通りだ、と言わんばかりにうなずいていた。とは言っても二人の表情はとても嬉しそうだった。なにせ、新型麻薬が出回って一年、謎に包まれていた原料のしっぽを掴んだんだ。誰が新型麻薬に名前を付けたかは知らないが、馬鹿正直なネーミングセンスに感謝、だな。——いかに巧妙に隠していたとしても、青い歯車とやらが組織である以上はどこかに隙ができるもんだ。

話も尽きてきたところで、二人はそれぞれ用事があるということで病室を出て行った。エアは捜査本部へ、新情報を元に捜査方針を

固めに。アイは、俺が復帰するまでは病院の手伝いに戻るらしい。大きな事件を扱っているというのに、いつもの調子でいていいのか？ と、疑問を感じるが、アイとパンナを二人きりにすると、今回の二の舞になるかもしれないしな。これでいいだろう。

「――ソレ、起きろ」

「キョ……ウ？」

キョウも見舞いに来てくれたようだ。目を開けると、カーテンがうつすらと夕日に溶け込んでいた。夕方まで寝てしまったか。

「伝えたい事がある。起きてくれ」

重たいまぶたを開くと、眉間にしわを寄せて、肩で息をしているキョウがいた。着物の胸元が、派手にはだけている。走ってきたんだ。

「見舞いつて顔じゃないな。キョウ、今までどこへ？」

ただ事ではないと、一目で分かる。キョウが慌てる姿なんてそうそう見られるものじゃない。

どうやら俺は眠りの神様に見放されているらしい。

「わりい知らせだ。業突く張りのスコルニクスが、――死んじまつたぜ……」

三章 一節 大都市の光と影（後書き）

> i 1 5 9 8 2 — 2 2 1 9 <

三章 二節 閉ざされた事実

キヨウはベッドの左脇に立ち、襟を直しながら俺の反応を窺っていた。その意図がよく分からず、キヨウをじっと見つめる。おでこの左側が赤みを帯びていて、少し腫れている。打ち上げの時には無かった傷だ。

「どういうことだ？」

キヨウが、ちっ、と舌打ちをした。かなり苛立っているみたいだ。「……パンナはここに来たか？」

「来たけど、それとこれとどんな関係があるんだ？ 逃がしたならともかく、どうしてスコルニクスが死んだんだ？」

「パンナが殺しちまったんだ」と、吐き出すように言いながら頭を撫でている。はつきりと自分の口で言ったものの、それでも信じられない、と言った顔をしている。

俺も同じだ。パンナがスコルニクスを殺した、そう聞かされても相変わらず釈然としない。あいつがああ成金を殺す理由が見つからない。

「キヨウ、おまえが動揺するのも分かる。でも、ただ『パンナが殺した』とだけ聞かされても、何も言えない。俺が気を失った後に何が起こったのか話してくれよ」

まずは座ってくれ、と言ってアイが座っていたところへ指を向けた。

「すまねエ……」

キヨウが口元を握りこぶしで押さえながら一言言って、力なく椅子へ座る。そして、俺が気を失っていた空白の時間を話しだした。

「セイントの詰め所でぐっすりいってたら、アイが血相変えて来てよ。ソレとパンナが大事になってるてエから、ジェイを連れて下層区のスラムへ向かったんだ。……前にもあそこに足を運んだことはあるが、一層ひでエことになってたな。」

アイがおまえたちの所まで案内してくれるかと思っただがな、
どうやら道を覚えてないらしく、結局ジェイの勘に任せて修羅場に
辿りついたんだ。ソレが『手裏剣』で雇われどもに応戦した頃だ。
あの妙なマスクのゴブリン、アイが言ってたぜ、パンナはそのスコ
ルニクスを捕まえる気だッてよお。

百戦錬磨の俺だ、ゴブリン一匹捕まえるくらいわけはねエ。だが
よ、標的のスコルニクスが見たこともねエ型の銃を取り出したじゃ
ねエか。まずはあの得物をどうにかしなきゃ近づけもしねエ。俺が
屋根伝いにスコルニクスの背後に回ってるうちに、ジェイには狙撃
地点に行ってもらったんだ、もちろんあの銃を撃ち落とすためだ。
……ここまでは良かったんだがよ。わりい事に、ソレが撃たれちま
った」

キョウが親指と人差し指をくの字にして、手首をくいっと斜め上
に曲げる。『バンッ』だ。

「初めて銃で撃たれたよ。あの銃が量産されたら、剣の出る幕はな
いな」

「商人でもほとんど訓練なしで扱えるからな、傭兵も廃業だぜ」

まあ、と言ってキョウが続けた。

「俺なら、焦ッて矢を放ッてただろうが、さすがジェイだ。あいつ
は冷静に好条件の狙撃地点まで行ッて、見事にスコルニクスの腕に
命中させて銃を撃ち落とした。お膳立てしてもらえりゃあ、そッか
らは俺の出番だ。スコルニクスが慌てふためいてる所に、俺が背後
から一気に詰めるッて寸法だ。

……だが、ここでポカしちゃったんだ。好機を逃さんとしてたの
は、俺だけじゃなかったッて事だ。俺が飛び出した瞬間、屋根の下
からパンナがヒョイと現れてよ……、『ごっつんこ』だ。お互いが
面食らッてる間に、スコルニクスは煙幕爆弾を使ってとんずらだ。

そんな時の衝撃で思い出したんだがよ、このスコルニクスッてヤツ
は、以前『マッドニクス』ッて名で武器商やッてたヤツにそっくり
だったんだ。いや、そっくりッつつても、マスクをしてるから本当

の顔なんて知らねエが、同じマスクだッたんだよ。——お株急上場の、新しい麻薬密造グループに手を貸して、大儲けしようッて腹だッたんだな。

回収した銃から分かったんだが、スコルニクスは元バストウークの技術者と組んで強力な武器を開発してたみてエだな。あちらの国で使われてる技術がたんなり詰まッてた上に、丁寧に刻印までしてあッたぜ。銃の他にも、見たことのねエ技術で作られた道具もどツさりだ。……俺達を撒いた煙幕爆弾も強烈でな、ヤツが放り投げた瞬間に拡散して、辺り一帯は煙の世界だッたぜ。だが、ここで逃したんじゃパンナとソレに申し訳が立たねエ。既に走り出していたパンナを追ッて、俺もがむしゃらに走ッたんだが……」と、一気に話したところで、キヨウが一度話を区切った。

「それで？」

キヨウはぼつが悪そうに頭をぽりぽりと掻いている。

「踏み外しちゃッた……」

「え？」

「屋根から落ッちまッたんだよッ！」

……キヨウのおでこのたんこぶはその時のものか。俺も同じ様な失態を犯したぞ。

「ま、まあ、それはしょうがないだろ。朝露で屋根も濡れてたし、前が見えなかったんだからな」

「そうなんだよッ！ 足元が濡れてたからなッ！ ソレは分かッてくれるか、ありがとなッ！」

いわゆる、『痛いほどに分かる』とは、まさにこの事だ。これが痛みを共有して分かち合う恥ずかしさというものだ。俺は自分の失態の場面を思い出して赤面しそうになったので、キヨウに話の続きを促した。

「その後はどうなったんだ？」

キヨウは一つ咳払いをしてその後の事を話し出した。

「けどな、これが怪我の功名、屋根の下までは煙が来てなかつたん

だ。不思議なもので視界をさえぎるものが無くなると、平静さも戻ってくるツてもんだ。……耳を澄ましてみれば聞こえるじゃねエか、ヤツがどっちに逃げているかってな。

俺はヤツの足音を頼りに、足場の悪い狭い路地を全力で走った。どうやら足を少し悪くしてるようで、右足と左足のリズムが微妙に狂ってたな。まあ、逃げ足がガクツと遅くなるツて程じゃなかった。走りながら何度も上を見ていたが、遠くに離れるほど煙が薄くなっていた。そのうち、一瞬、足音が聞こえなくなっただ。きつと、へばって足を止めたんだろう。その後再び足音が聞こえたが、走る速度を落としたのか、足のリズムが正確になっただ。案外諦めの早いヤツだと思っただ。年貢の納め時もいいよだ。……だがよ、足音も近くなってきたようやく追いついたと思っただ時だ。

——ドサツ、と前方に何かが落ちてきやがった。……スコルニクスだった。捕まえようと、急いで駆け寄ったんだがな、仰向けになっただ。ピクリとも動かねエ。まあ、わけは一目瞭然だったがな。

胸からの大量出血、心臓への一突き。ジェイが放った矢で負った腕の傷を除けば、傷はただの一つだけ。殺意を持って一撃を与えたツてわけだ」

キヨウが、自分の左胸を親指でトントンツと二回叩く。その仕草に思わず息をのむ。

「しかも、だ」とキヨウが続ける。「あの傷……、スコルニクスの胸にあった傷は、おと——」キヨウは急に黙り込んで、眉間にしわを寄せて小さくうなっている。

「どうした？ おと？」

「いや、そんなはずはねエんだ。そんなはずは……」

キヨウは、一時ひどく狼狽していたが、とにかく最後まで話す、と言った。

「……目の前の死体に、ちツと頭が混乱して、呆然としちまっただ。そんな時に走ってくる小さな足音が聞こえてきて、パンナが煙の中からフツと現れたんだ。パンナのヤツ、屋根の上から俺とスコルニク

スを交互に見据えてこう言いやがったんだ。『あとの処理はよろしくね』ッてな」

事の顛末を全て言い終えたキョウは、ますます力無く肩を落としていた。

「この話は本当か？」

「嘘じゃねエ！ その後すぐにパンナは消えて、俺が代わりに警備隊の連中に話をつけたんだ。……汚ねエ話だが、死んだのはジュノの民でもねエゴ布林だ。一匹死んだところで誰も騒がねエよ」

「そうじゃないんだ。いや、すまん。そうか、パンナがそんなことを……」

一人でスコルニクスに立ち向かっていたパンナ。あの時は殺しをするなんて微塵も思わなかった。白痴みたいな綺麗言で正義を振りかざしてたあいつが殺しなんて。……でも、病室で感じたパンナの雰囲気ならやりかねない気がする。

事態の齟齬。違和感。

「おいソレ！ 今の話を聞いてそんだけか？ 何も思う事はねエのかよ！」

立ち上がったキョウに胸倉を掴まれる。その拍子に椅子が倒れ、木材の鳴らす、抜けるような乾いた音が静かな部屋に響き渡った。

「……この話は誰かに言ったのか？」

「ああッ？ 言ッてねエよ！ あらかた処理が終わって、いの一番でおまえの所に報告に来たんだ！ それにこんな話を誰に言えるッて言うんだ？」

キョウの気持ちは分かる。友人が、職権濫用で殺人を犯したんだ。団長であるティルダに報告をするならまだしも、ジェイやゾッド達には言えないだろう。だとしたら、俺に話した意図は――。

真っ直ぐキョウの目を見つめて、胸倉を掴むキョウの腕を掴み、そっと押し返して言った。

「分かってる。見張ればいいんだろ？ ——パンナを」

役割が見えてきた。考えたくも無かったけど、どうやら俺はパンナを追う宿命にあるみたいだ。昨日、病室で見たキヨウの顔が何度も頭をよぎる。『こんな事を頼んですまねエ。もし、あいつが暴走するような事があれば、次は俺が止めるからよ』そう言って、目も合わせずに決意を漏らした時の顔が。友を断罪の場に突き出さなければいけない心情は、計り知れない。

退院して、自室に戻って準備を整えたが、体が激しくだるい。アイいわく、治癒魔法は生命力の前借りなんだとか。寿命が縮むわけじゃないが、怪我の度合いによっては正常な体にある生命力が枯渇する。それがこの何とも言えない虚脱感を生むらしい。

けど俺が今休んでいる時間はない。キヨウには何か思惑がある。どうやら俺にそれを話すつもりはないらしいが、パンナがこの先さらに罪を重ねる可能性を示唆している事は確かだ。俺に監視をさせるのがその動かぬ証拠だ。

パンナが何をしようとしているのかも、キヨウが何を考えているのかも、自分で探りだす他ない。幸いにも、俺はつい先日パンナをよく知る人物と出会っている。彼女なら色んな角度からパンナを見ているはずだ。

ル・ルデの庭の、『オーロラ宮殿』、別名『大公宮』。ル・ルデの庭中心に位置する三国の大使館を十字で結んで、残った一本をずーっと行くと、眼前に広がって見えてくる。オーロラ宮殿は、大理石だか御影石だか分からないが、外観も内装も、そのほとんどを切り崩した石から造られている。外交使節が百人来ても宿泊でき、四国首脳会議もここで行われている。一度も見かけた事はないが、大公もこの宮殿で執務を執り行っている。建物も、その役割もとても大きい宮殿だ。

麻薬取締局ジュノ本部はこの中であつた。ジュノ警備隊本部もここにある。警備隊の連中とは、仕事上、何かと縁があつて月に一度は訪れる場所だ。厳粛な雰囲気とは裏腹に、建物から出てくる連中はそれとは程遠い雰囲気、見るからに荒くれの傭兵達だった。も

ちろん、礼服を着ている文官達や警備隊員も出入りをしているが、印象に残るのは見た目も声も『うるさい』人間達だ。

取締局の受付カウンターの前に行くと、受付のヒュームの女が視線を上げた。

「パーパ・ビツフェ捜査官と話がしたい。セイントのソレが来た、と伝えてくれ」

受付の女は、少々お待ちください、と言って受付帳簿をばらばらとめくりだした。清潔そうな白い制服を着崩す事無く着ている。山をかたどったピンク色のポケットチーフが印象的だ。パンナやパーパが付いていた小さな捜査官バッジは見当たらない。

「お待たせしました」受け付けの女はにこりと笑って、「第二応接室が廊下の突き当りを左に曲がってすぐ右にあるので、そちらでお待ちください」と、右手で廊下の奥を指し示した。

応接室に入ると、部屋を中心に置かれた移動式の暖房が、大きな獣が低くうなるような音を立てて動き出した。『クリスタル』という、エネルギーを内包する不思議な石を燃焼して使う型だ。冒険者連中は、クリスタルを使って製品を加工するらしいが、俺には全く仕組みが分からない。まあ、そんな訳の分からない力で動いているが、俺の部屋の隅にある暖炉よりは効率よく部屋が暖まりそうだ。

冷たい石の壁が、味気ない部屋をより冷えさせていた。身を縮ませて寒さに耐えていると、扉が開いてパーパが現れた。

「ソレさん、お久しぶりですね」パーパは一言挨拶をすると、ティーカップを二つ載せたトレイを机にゆっくり置いて、「ソレさんもどうぞ。体が温まりますよ」と、挨拶もそこそこに湯気の立つお茶を一口すすった。向かいに座っているパーパは、一昨日見た時よりも幾分か体が大きく見える。

「ああ、ありがとう。頂くよ」

ロイヤルティーのいい香りだ。ウィンドラス茶葉を使ったサンドリア風のお茶の中でも、厳選された高級茶だ。応接室は、机を挟んで

大きなソファアが二つあるだけの質素な雰囲気だ。取締局を訪れる客——この応接室で待たされるのは、ジュノ政府や他国のお偉いさんだろう——には、この高級茶がせめてものお持て成しってわけだろう。セイントが鼯肩にしているのは、安物のカモミールティー。：：ティルが猫舌なせいで、お茶に掛ける金はないようだ。

「今日は少し顔色が優れませんか？ 風邪でもひいてませんか？」
パーパは、ティーカップを机へ戻して言った。

「ああ、ちよつと色々あつて疲れてるだけだよ。心配されるほどじゃない」

「そうですか、この季節だから体調の変化には気をつけた方がいいですよ。あ！ 今日、ここへ初めて訪れたお客さんはソレさんなので、部屋が暖まるまで辛抱してくださいね」

「このくらいの寒さなら慣れてるよ。パーパの方こそ見るからに寒そうだぞ？」

パーパが着ているのは白を基調とした、ボタンが前面に二列あるダブルスーツ型の公国制式礼服だ。掛かっている二列のボタン部分が、はち切れんばかりに膨らんでいる。ティルと違って猫舌ではないようだが、ミスラらしく寒さに弱いようで、中に相当着込んでいると推測できた。

よほど俺の視線が勝手に物を言ったのか、パーパは、「あ！ すいません！ 着替えてから来るべきでした。不恰好な姿をお見せしてごめんなさい！」と、改めて自分の恰好を見て恥ずかしそうにしている。

「いや、別に構わないよ。俺も急に押しかけちゃったしな。でも、今日はバッジを付けてないんだな？」

「あ！ ……その、実は私、捜査官じゃないんです」

「一昨日は会った時は、捜査官だって名乗ってなかったか？」

「……ええ。嘘をついたわけではないんです。外に出てお話をお伺いする時は、捜査官の権限を持っていた方が何かと便利だと思ったので、上司に頼んで臨時捜査官のバッジを付けさせてもらっています」

した」

パーパが、「これを」と、名刺と小さなカプセルを差し出してきた。名刺には、『麻薬取締局研究室 薬系技官 パーパ・ビツフェ』と、長たらしく身分を示す文字が書かれていた。

「違法薬物は悪しき心を持った人たちによって研究され、日々進化しています。私のいる研究室では薬物の研究により、薬物汚染予防と症状の改善ができないかと考えているのです。……どうしても、後手に回ってしまうのが辛いところですが」

「このカプセルは？」

「まだ未完成ですが、精神錯乱状態の患者を正常な状態に改善する薬です。それで……」と、目を輝かせて話し出した。

——二十分くらいの間、プレやら、ポリなんとかやら耳慣れない言葉で説明を受けたが、湿った紙に黒鉛で物を書くかのように全然頭に入ってこない。パーパはというと、俺の興味など露知らず、夢中で話を続けていて止まる気配がなかった。

「話してるところ悪いんだが、今日は聞きたい事があって来たんだ」
「あ！ ご、ごめんなさい！ 私ったら自分の事ばかり話してしまつて……」と、パーパは顔を真っ赤にして俯いた。

自分の事というか自分の研究、いや、間違はなくパーパの趣味だ。「いいよ、話を聞くのは嫌いじゃないし、俺の身近にも好きな事に關しては話題に事欠かないヤツがいるからな。でも、まずは俺に協力してくれないか？」

「はい、もちろんです」

パーパの表情が、先程の趣味の話とは打って変わって大真面目になる。俺の疑問を解消する、いい回答が得られるかもしれない。

「……単刀直入に聞きたい。パンナについて知ってる事を話してくれ」

俺の言葉に、パーパは一瞬右耳をピクツと動かした。やはり、何か知っている。

「どうしてですか？ 確かに彼は迷惑を振りまくような人間ですが、

このように内偵される謂れはないですよ」

「本当にそうか？」

「え！ ……ええ、そうです。ソレさんこそ、パンナの友人である私に尋問みたいな真似をするんですから、それなりに根拠があるんですよね？」

「もちろん」嘘だ。そんなものはない。

だが、隠している事はもう明らかだろう。時にはハツタリをかますことも大事だ。俺は自分でも気持ちが悪いくらいに、自信満々の表情を作ってみせた。

うーん、と小さくうなり声を上げたパーパは、

「仮にパンナにやましいことがあったとして、ソレさんがパンナの事を教えろと言っても具体的に何を話せばいいのか……」と、ささやかな抵抗の色を見せた。

それは、考えていたよりも早く察知できた陥落の兆しだった。

「じゃあ、こう言えばいいか？ パンナの過去について、話してくれ」

『パンナの過去』というのも完全な当てずっぽうだ。ただ、俺の知らないパンナを知っている人物は周りにいる。ティル、キョウ、ジエイ、パーパ、そしてたぶんセイントの古参であるゾッドやしっぱも知っているはずだ。

『死んじゃえばいい』と、パンナは病室で冷たく言い放った。まるで一切の悪を、無慈悲に根絶やしにする事を願うような……。何か、きつと何か、パンナを突き動かす過去があるはずだ。それを知らなければ出発地点にも立てやしない。

「ま、参りましたね。まさかソレさんがパンナを疑うとは思いませんでしたよ。……私の当てはいい方に外れてしまいました」パーパはほっとしたのか、それとも少し呆れたのか微妙なあやのため息を一つ吐いた。

「当てが外れた……、どういことだ？」

「……本当は私がソレさんを当てにしていたんですよ。これであな

たは、この事案のキーマンに昇格決定ですね」

訳が分からない。……でも分かる、この感覚。服を着たまま、ぬるま湯に浸かっているような気持ち悪さ。思えばここ数日の間、感じていた気がする。無意識のうちに、違和感を体が捉えているんだ。……下っ腹が疼きだしている。

「ソレさんの事は調べさせて頂きました。もちろんセイントのみなさんも全員です。あなたと、あなたと一緒にジュノへ来られたアイさんには、特に不明な点は見つかりませんでした。何から何までごく自然なんですよ。……それが却って、セイントの方たちを異質なものにしてしまいました」

「調べるって、どうしてわざわざパーパが？ 技官の仕事とは全くの無縁のように思えるが？」

「そうですね。個人的な興味とも言えますし、この事案をどうにかしたいと思っているのも事実です。麻薬を根絶したいと願っているのは、何も捜査官だけではありませんから。……それに、私が見つけた足掛かりなら、私にも追求する権利がある。そう思いませんか？」パーパは自分の胸倉を軽く掴んで言った。「だから、上司に無理を言って一時的に捜査権限を頂いたんです」

「セイントの連中が信用ならないから、俺を選んで接触した。……いや、信用ならないどころか、この新型麻薬にまつわる出来事に、ただの傭兵として以上に関わりがある、そう言いたいんだな？」

——沈黙が訪れる。これは笑えない冗談か、それとも……。

パーパは重い口を開いて言った。「もちろん、ソレさんも完全に信用していたわけではありませんでした。あなたも噛んでいるなら、それはそれで好都合と判断しました。勝ち目のある賭けだったんです。——結果は大勝ちです」

「なぜセイントが関わっていると？ 見つけた足掛かりっていうのはもちろんセイントに繋がる証拠だよな？ それは一体何だ？」

「気分を害されましたか？」

「当たり前だ！」

ついカッとなり、拳を机に叩き付けた。衝撃で、ティーカップがソーサーから跳ねて、少しぬるくなったお茶をくるくると回りながら吐き出している。

——コトリ、と音を立ててティーカップは踊るのをやめた。

「前に見たことのある光景ですね。こんなソレさんを見るのは二度目ですよ」パーパは、黙っている俺を見て続ける。「残念ですが、ソレさんにその理由を教える事はできません。あなたは、その場所から先入観を捨てて挑まなければならないですよ。……それに、ソレさんも薄々気付いているんじゃないんですか？ あなたを取り巻く嘘に」

そうだ。違和感の正体とは、『嘘』だ。俺を取り巻く嘘だ。

「……ああ、その通りだよ。分かってるなら、この気持ち悪い感じをなんとかしてくれ。頼りにしてたパーパまでキョウと同じように隠し事をするんだ。一体何が起きてるって言うんだ」

パーパがふふつ、と笑って言う。「ですが、今日は私の話をする番ではないんですね？ それに隠し事をしているのはお互い様のようですし。さあ、ではパンナに関する資料を取りに行くので少々お待ちください」

パーパの少し勝ち誇った顔と笑いに釣られて、緊張の解けた俺も笑いをこぼす。「猫かと思ったらとんでもないな。あんたは狐か狸だよ」

「ふふふつ、男性をからかうのは好きですから」と、パーパは静かに笑って扉を開けて出て行った。

「これは？」

手渡された古い新聞記事に一通り目を通して、パーパに尋ねた。手の平二つ分程の小さな記事は、パーパが切り抜いたんだろう。内容は、麻薬取締局の捜査官が殺害されたという三面記事だった。天晶暦八十七年、今から二年前の事件だ。

“優秀な捜査官への報復か？ 昨日、三月十七日午後十時頃、上

層区おはじき通りのアパートの一室で、麻薬取締局ジュノ本部勤務、捜査官、イーガエガ・フゲティさん（30）が血を流して倒れているのを――”

働き者の優秀な捜査官が、仲間を逮捕された事で逆恨みしたゴブリンに殺されてしまった、という悲痛な事件だ。

「パンナの、そしてジュノ大公国の抱える闇ですよ」

記事から顔を上げると、パーパはティーカップの口を無表情に指でなぞっていた。部屋を出て行って戻ってきてからはこんな調子で、重く暗い雰囲気を発している。

パーパはしばらくそうしていたが、目を瞑って首を横に振った。

「まず初めに、捜査官及び、当局の全職員は本名を名乗れません。パンナの名前も当然偽名です。彼がソレさんにどこまで自分の事を話したのかは分かりませんが、捜査官の身元が割れるという事は捜査上の安全に深く関わる事なので、私の口からは話せません。」

そして、これからお話する内容は誰にも口外しないでください。特にその記事の件は、おいそれと部外者にお話できるような事ではありません。私自身覚悟の上ですが、私一人の責任で負える内容ではないので。……約束出来ますか？

「ああ、約束する。パーパに迷惑はかけない」

パーパは無表情のまま頷いて、束の間の沈黙の後、ゆっくりと話し出した。

「……その記事の内容は捏造されたものなんです。――真相はこうです。……ジュノ大公国だけでなく、サンドリア王国、バストウーク共和国、ウインダス連邦の四つの国で麻薬を密売している巨大麻薬密造組織があります。その組織の末端のバイヤーである一匹のゴブリンが、ある若い下級捜査官によって捕らえられました。」

ゴブリンは、『組織のジュノルートを手がける拠点の場所と、麻薬取締局にいる密偵を知っている』と言って、身柄の解放を条件に司法取引を持ちかけたのです。若く、野心に溢れる捜査官は、これは大手柄だ、と喜んで司法取引を内密に進めました。もちろん、彼

が独断で決められる事ではありませんでしたが、良い結果を出せば余りあるお釣りが返ってくる算段だったのでしょう。一つでも局全体が沸き立つ情報なのに、それが二つとなれば大出世は間違いありませんでした。

彼はゴブリンから得た情報を元に、バディであり先輩であった中級捜査官を連れて、局の裏切り者の自宅へ押し入りました。……この事件の被害者、イーガエガ捜査官の自宅へ。

中級捜査官も、自分が取締局へ入ったばかりの頃を考え、若い後輩のバディのわがままを聞いてやったつもりだったのでしょうかね。

イーガエガ捜査官は、自分には覚えが無い、何かの間違いだ、と主張しました。でも、若い捜査官は正義に酔い、そして功に焦り、イーガエガ捜査官を殺してしまいました。もちろん、初めから殺すつもりではなく、もみ合っているうちに頭に血が昇っての事だったのでしょう。『話を聞きに行くだけだ』と言って付いていった中級捜査官が止める暇も無く。――悲劇でした」

「もしかして、その中級捜査官が……？」

パーパは、そうです、と呟いた。

「パンナは、若い捜査官を止められませんでした。目の前でイーガエガ捜査官を見殺しにしてしまったのです。

そして最悪な事態は、これで終わりではありませんでした。……麻薬取締局付きの取調官によって、司法取引を持ちかけたゴブリンが、全くなのでたらめを言っていた事が明らかになったのです」

「なんてことだ。……それで、この事件は？」

「はい、皮肉な話ですがとても迅速な対応でした。……取締局。いえ、ジュノ政府はこの不祥事を隠蔽する事にしたのです。その捏造内容がソレさんにお見せした新聞記事です」

闇に葬られたのは、ゴブリンだけじゃない、のか。

「人一人、優秀な捜査官の死の真相は明らかにされなかったってことか。いや、この先も永遠に、か」

「殺されたイーガエガ捜査官はバストワーク共和国出身でした。今

なお続くジュノ大公国とバストワーク共和国との軋轢は、二年前の当時はより一層激しいものでした。ですから事実を公表する事はとても危険だと、ジュノ政府はそう判断したのでしよう。

この事件の若い捜査官は、今はサンドリア支局で閑職についています。彼にとってもすねに傷ですが、この事件が明るみにならないようにする処置です」

「飼い殺してやつだな」

「パンナは、二週間後に上級捜査官へ昇級する事になっていました。彼は甘いところもありましたが、とても優秀だったのです。だから、事件の場に居合わせた事も不問になりました。……きっとそれが、今も彼を苦しめているのでしようね」

パーパは相変わらず無表情のまま続けた。「……彼は、罰せられたかったでしょう。イーガエが捜査官を殺したのは自分だと、ずっと自身を責め続けていましたから。」

結局、昇級を蹴って自らウィンドス支局への転勤を願いました。それは永遠に罪を償う機会を失った彼の、せめてもの償いだったのかもしれない」

パーパは、葬られた真実を語り終えると、ふう、と一つため息をついてティーカップを両の手の中に収めた。

これがパンナの暴走の動機なのか。……あいつはずっと罪を抱えて、麻薬を憎んで生きてきたのか。止められるのか、俺に。……いや、俺にその資格があるんだろうか。

「ソレさんのご希望に沿えましたか？」

「あ、ああ。悪いな、こんな話をさせちゃって」

「いえ、私の方こそごめんなさい」パーパは悲しそうな表情をして言った。

「どうしてパーパが謝るんだ？」

「私じゃきつと、パンナを救えません。パンナがこれ以上傷付く姿を直視する事も、ましてや制裁を下す事など……、私には無理です」パーパは、パンナがスコルニクスを殺した事を知らないだろう。

それでもジュノで起きている『何か』に、セイントだけでなくパンナが関わっていると考えている。

「パーパ……、俺達、追ってるものは同じなのか？」

「分かりません。ですが、これが私の思い過ごしである事を切に願うばかりです。……私はこの件から手を引かせて頂きます。ずいぶん勝手ですが、あとは全てソレさんに託したいと思います」

「……ああ、俺なりにやってみる。パーパ以外にも似たような事を頼まれてるしな」

「はい、ありがと……ごさいま……す」

パーパは、頭を下げながら声を抑えて泣き出した。堰を切ったように長く、静かに。

三章 二節 閉ざされた事実（後書き）

>i15982—2219<

三章 三節 傭兵の休日

明けて十一月二十五日。まだ日が天に昇り切らない頃、俺は上層区から工房橋を渡って、『バタリア丘陵』に来ていた。この季節らしく、空には大きな灰色の雲が重なっていた。辺りには、古戦場らしく今でも土塁跡がいくつも残っている。十数年前は、ここでアルタナ連合軍と獣人連合軍の会戦、『ジュノ攻防戦』が繰り広げられた。朽ちた砦、崩れた防壁、流れた血を吸って、よく肥えた土壌。激戦の爪あとをいくつも残すこの地だが、今となっては誰も剣を交えることはない、……そのはずだった。

なのに、どうしてこんな事になってしまったんだろう。――俺達は、寒風吹きすさぶ中で互いの剣を交えていた。

「……ソレ、そんなものか」

ジェイの振り下ろした剣を、寸でのところで防ぐ。剣と剣がぶつかり、金属音と共に激しく火花が散る。

これで何度目の打ちあいになる？ ジェイの剣術はすさまじく、一切の無駄なく打ち込んでくる。俺の打つ手など、それら全てを必死で受け止める事だけだ。

「もうやめてえ！」アイの叫び声が聞こえる。

「ジェイっ！ どうしてこんな事を！」

問いかけに答える事なくジェイは打ちこんでくる。昨日パーパと別れてからやはり身が持たず、部屋に戻ってゆっくり過ごしたが、疲れが完全に癒えたとは言えない。このままじゃ負けは必至。しかし、いくら調子が悪いからと言っても、俺は片手剣一本でやってきたんだ。ジェイの剣に負ければ立つ瀬がない。

でも、……腕に力が入らない。息も絶え絶えで、こんなものを振り回してるところじゃない。ふんっふんっ、ジェイの呼吸がやたら大きく聞こえる。俺の聴覚がこれでもかと働いているようだ。きつと、ろくに息も出来ないせいで視覚が頼りにならないからだろう。

ここは一度距離を取って仕切り直した。

すうつ、と思い切り息を吸うが、空気が重量を持ったみたいうまく入ってこない。肺に何か引っかかっているような感覚も覚える。俺は剣を前に構えたまま、筋肉の極度な緊張で震える足をなんとか制御し、ジェイを見据えつつ素早く後退した。そして、ジェイの動きを牽制するために胸の投げナイフに手をやった。

——うまくいくはずがなかったんだ。ジェイがそのわずかな隙でさえ逃すはずがなかった。ジェイは背中に背負ったクロスボウを即座に構え、俺の頭に狙いを定めた。

「……ソレ、終わりだ——」

ジェイが言い終わるか終わらないかの内に矢が放たれた。その矢を額に受けた俺は、ゆっくりと後ろに倒れこんだ。

「ソレえっ！」アイが駆け寄ってくる。

「ジェイっ！　どういう事なの？　ソレは大怪我を負って、一昨日まで入院してたんだよっ！」なんでこんな事を……、と呟きながらアイが俺に覆いかぶさる。

息が……、できない。もう何も見えない。真っ暗な世界だ。……でも温かい——。

「——おもい」

「えっ？」

「……重いんだよっ！　アイ、早くどけ！」

力を振り絞ってアイを払いのけた。アイが、きゃっ、と言って飛びのく。

はぁはぁと全身で息をしても呼吸が間に合わない。アイのせいであやうく窒息死するところだった。

俺は半身を起こしてジェイを見た。「なあ……、何も……今訓練なんて……しなくてもいい……だろっ」息を切らしながら、額にびったりと張り付く吸盤付きの矢を引き剥がして言った。

「そうだよっ！　それに今日はすっごく寒いんだから、もう帰ろうよお」アイが、立てひざをついて言った。自分の体を抱えて縮こま

り、ぶるぶると震えている。

「……だめだ。おまえは勝手に病院を抜け出していただろう。それ程の元気があるなら、この程度の訓練など問題ない」ジェイは表情は真剣そのものだ。

「ちよっ……、ちよっと待て！ この程度っ……」息苦しさで言葉に詰まり、ごくっ、と生唾を飲む。「この程度っていうけどな！

俺とジェイじゃ力量差があり過ぎるだろっ！ 勝手に病院を抜け出した事は謝る！ せめて、休憩を……、休憩をさせてくれーっ！」

俺は病み上がりになだ広い丘陵で、懇願と謝罪の意を込めて叫んだ。遠くまで響き渡る明瞭な叫び声だった。

料理の苦手なアイでも手軽に作れるおいしい食べ物がある。クアールという長い髭を持つ、巨大な猫のような魔物の肉をソテーしたものと、ミスラントマト、ラテーヌキャベツに、ゴ布林族伝統の涙が出るほど辛いマスタード。これらをサンドリア小麦粉を練って作る白パンに挟めば、はい、出来上がり。アイと外出する時の定番携帯食、『クアールサンド』だ。

毎度飽きもせずに作ってくるので、『そんなに好きなら』と、俺もセイントのみんなも何も言えないでいる。厳密に言えば、新しい料理に挑戦させた事はあるけど、今でもクアールサンドを作っているのがその結果を示している。

野外訓練場で、アイと一緒にあつらえ向きの石の腰掛けに座って談笑を楽しむ。ふんわりと柔らかな白パンとトマトの爽やかな酸味が、体に活力をみなぎらせていく。クアールの肉の濃厚な旨みがマスタードと絡みあって、獣特有の臭味を抑えつつ口の中にしやりしやりと広がる。――しやりしやり？

背後からしやりしやりと訓練用の剣を研ぐ音が聞こえてくる。：現実逃避には無理があった。東のシュ・メーヨ海から吹きつける冷たい風の中で、やはり冷たいクアールサンドを震えながら食べる。そんな姿を見せつけても、やる気になっているジェイは止められない。

かった。

俺はジェイの方へ振り向いて、手に持ったクアールサンドを差し出した。

「な、なあジェイ。せめて食事中は……、一緒に食べないか？　ほら、ジェイがそうやってると、こう……、食事を楽しめないというか、ますます背中がうすら寒いというか。なあ、アイ？」

「う、うん。それに、今日はすごく冷えるし、もう帰った方がいいとおもうなあ」アイがちらちらとジェイに視線を送る。

「……ふむ」

ジェイは、一理あるな、といった面持ちで鞆を開き、中からアイの顔ほどもある大きさの干し肉を取り出し、むしゃむしゃと食べ始めた。そして、一分も経たない内に平らげてしまった。

「……早く食べて、早く訓練を終わらせる」そう言ってしゃりしゃりと、また剣を研ぎ始めた。

なあなあジェイよ。なあ、「というか……」

「……ん？」

ジェイが手を休めてこちらを見る。

「訓練用のなまくらをいくら研いでも意味ないだろ」

「……気分だ。問題ない」

いやいや、『刀は武士の魂だ。魂は常に磨くもの』ってハゲが言ってたけど、これはなんか違うだろ。

「……もう、投げナイフはやめろ。スコルニクスを追った時にもよく分かったはずだ。そんなものは子供のおもちやだ。……役に立たん」

「えっ。いや、だって携帯性も抜群だし、距離が開きすぎるとどうにもならないけど、牽制くらいにはなるぞ」

正直、凶星を突かれた。なんとなく自分でも分かってたんだよなあ。……恰好をつけるためだけに投げナイフを使ってたなんて、恥ずかしくて今更言えない。

「……午後からは射撃訓練だ。今のうちにクロスボウを扱えるよう

になっておけ」

ジェイは言った事を絶対に曲げない。言ってる事は間違っていないし、この人の判断はいつも正しい。

「はあ……、分かった分かった」俺はジェイの強硬な態度に早々お手上げをして、「でも、なんだってこんな急に？ 合同捜査が一段落してからでもよくないか？」と、最後のクールサンドを飲み込んで尋ねた。

横でアイが、うんうん、と頷いている。こいつは寒いから早く帰りたいだけだな。

ジェイは剣をひっくり返し、『かえり』を落としてから刃の反対側を研ぎ始め、

「……死んでもらっては困る」と、悲しむんだか迷惑になるからなのか分からない、相変わらず感情がこもらない声で答えた。

「あああ。……あの時は、運が悪かったんだ。なんせ、連射可能な新型の銃だぞ？ こっちは見たことも聞いたこともないっていうのに。それにスコルニクスってヤツは、昔武器商をやってたとかでかなり特殊な例だと思うぞ」

「……運や特殊な例とやらで落とせるほど、おまえの命は安くないだろう」

「いや、まあそうだけど……」

「……ソレ、おまえだけじゃない。そんな事でアイを守れるのか？」

アイが素早く俺に視線をやる。……なんだその目は。そんなに俺の実力が疑わしいか。

「……おまえがセイントに入って一年も経たない頃、おまえはスランプで仕事がうまくいかず、酒に酔って暴れた事があったな。覚えてるか？」

「や、やめてくれよ。もう昔の話だろ？ 時効だ！ 時効！」

「あー！ そんな事もあったねえ！」アイが嬉しそうな顔をして話に入ってきた。

「おまえまで……」

「ふふんっ！ あの時わたしは介抱してあげたんだよっ！」と、立ち上がって腰に手をやったが、すぐに身震いをしてまた座り込んだ。

こいつは自分の専門分野の話になると、本当に得意げになるな。

「……俺は今でもあの時ソレが言った事を覚えている」ジェイが、刃先の研ぎ具合を確認しながら言った。

「俺、なんか言ってたか？」

うーんとね、と、指を組みながらアイが目を輝かせた。「『アイっ！ 俺が立派になったら結婚してくれっ！』って言ってた気がするっ！」

「それは絶対に無い」

「絶対ってなに！ 絶対ってえ！ もう、知らない！ ふんっ！」

アイは俺の一言がよほど気に入らなかったのか、口を尖らせ、頬を膨らませて怒りだした。

「……アイ、今のはソレなりの照れ隠しだ。この前の打ち上げだって、アイと——」

「わー！ ちょっと、ちょっと待て！ そ、それより俺が酔った時に言った事ってなんだよ？」

アイはきよとした表情で、俺とジェイを交互に見て首を傾げている。危うく俺の考えが明るみになるところだったぞ、ジェイのヤツめ。

ジェイは両の刃を研ぎ終えて、柄を地面の石に、とんとん、と軽く叩いてかえりを落とした。そして鞘の中から布を取り出して、刃をきゅっきゅっと拭きだした。

「……ソレ、おまえは故郷を離れた事を悔いていたな。オークに殺された母親の敵討ちの機会を失ってしまった、父親の期待を裏切ってしまい、会わせる顔がない、と」

「……それは今でも思ってるよ。キョウには、『軍人が嫌で逃げ出した玉無し野郎』だと言われるしな。散々だよ」

「……他人がおまえの事をどう思っているかなど、どうでもいい事

だ。後悔の無い生き方などない。その時は正しいと思って決断したはずだ。……そして、これだけは言える。ソレ、おまえは全てを捨てたわけでも、失ったわけでもない。おまえの傍らにはいつもアイがいる。だから、絶対にアイだけは守り抜け。二度と大事なものを失わないためにな」

ジェイは言い終えると同時に、磨き上げたなまくらを空へと掲げた。生憎の天気、剣に当たった光が鈍くぼやっと浮いた。

「ああ、そうだな……。俺はまだ失っちゃいないよな」

いつだったかジェイは言っていた。『失ったものを取り戻すのはとても困難だ』と。それはきつとジェイの故郷である、今はオークに奪われたラヴォール村を想っての事だったんだろう。ジェイは、自身が絵画や彫刻の骨董品を収集するのも、心に隙間を感じるせいだ、と言っていた。——いつか、失ったものを取り戻せたらいいな。ジェイ、その時は一緒に……。

ふとアイを見ると、顔を赤くして、ぽーっと中空を見つめていた。……どこにトリップしてるんだこいつは。

ささやかな食事の後、俺達はジェイの立てた予定通りの訓練に励んだ。『魔力との親和性が低いエルヴァーンは、武術で他を圧倒するしかない』、全くジェイの言う通りだ。……最悪の事態は起こりえるかもしれない。もしパンナが暴走を続けるなら、俺のやれる限り止めなきゃいけないんだ。パンナの旧友であるキョウ、ましてや幼馴染であるパーパには荷が重い。

それに、……パンナは強い。正面切って剣を交えてたんじゃ、十中八九勝てない。けど、付け焼刃でもクロスボウの扱いを習得すればなんとかなるかもしれない。片手剣以外の武器を扱えるという選択肢、これだけの事が生死を分ける時が来るのかもな。

ジェイが、矢の射られた的を確認する。

「……上出来だ、ソレ。おまえはやれば出来るんだ。これから訓練を怠るな。……おまえの弱点は射撃そのものより、矢の装填速度だ。精進しろ」

「いや……、これ……これは、かなり……きついな」上出来だ、を訓練終了の合図と捉え、尻餅について地面へとへたりこんだ。

クロスボウの『つる』を引く作業は、ひどく腕の力を使う。射撃の腕は自分でも驚く程めきめき上達したが、矢の装填速度だけはどうにもならない。……というか、ジェイが人間離れしてるだけだろ、これは。

「……帰ろう」ジェイはくると背を向けると、ジュノへ向かって歩き出した。

まだ四時を回った頃だろうが、既に日は落ち始めていた。ジェイの足元からは大きな影が伸びていた。

——パーパの言っていた事を信じるなら、あんたも新型麻薬に特別な関わりがあるのか？ 何も話してはくれないけど、俺はあんたが裏切るような事をしているなんて思ってた。……信じるからな裏付けなんて一切必要じゃない、今まで通りジェイを信じてるからな。

「どうしたのソレ？ ぼーっとしちゃってえ。疲れた？」アイが横から顔を覗き込んできた。

いや別に、と少し顔を背ける。もしかしたら、自分が想像してないような表情をしてるかもしれない、そう思ったら恥ずかしかった。「大丈夫。もう歩けるから」

よっ、と言って立ち上がると、急にガタがきたみたいに体が重かった。

帰り支度をするために、荷物を置いた石の腰掛け辺りを見ると、無骨な作りのなまくらが二本とも忘れられたままになっていた。

ジェイのヤツ、持ってきた訓練用の剣を忘れてるじゃねえか。こっちはもう腕の力が限界だっていうのに、……ったく。

「アイ、一本持てるか？」

「うんっ！ 大丈夫だよっ！」

ずしりと重いなまくらを持つ——っ！ 予想以上に力が入らず手から滑り落ちていった。——スコッ。……スコッ？ 親指にひん

やりとした硬い物が触れる。足元を見ると、なまぐらのはずだった剣がブーツのつま先に垂直に突き刺さっていた。

……ジェイ、研ぎ過ぎだ。

ジュノ上層に着いても、先に帰ったジェイの姿はどこにも見当たらなかった。門で待っていてくれると思っていたけど、きつともう自室に戻って収集品をしげしげと眺めて愛でているに違いない。

帰り道の間、ずっとお腹が痛かった。寒さにやられて体調でも崩したかと思ったけど、あれだけやったんだ、お腹も空くよな。

「アイ、詰め所に戻った後、どこかで飯でも食べないか？ 希望があれば聞くぞ」

「そうだねえ……」アイは、上目遣いで少し考えて、「どうせパスタが食べたいんでしょっ？」と、にやりと顔を歪ませた。

「ま、まあ、俺の希望はそうだな。でも、今日は希望を聞くぞ？ 言ってみろよ」

「ソレが好きなものでいいよ！ わたしもパスタ好きだしっ」

「そうか。じゃあ、いつものハチミツ酒亭でいいか」

「うん！ ——あっ、待ってて！ 今日家で食べる予定だったから、ミクさんに言って夕飯断ってくるね！」

ほら、と手を差し出して、預けていた訓練用の剣を受け取った。

ミクロロもジュノへ来てもう五年だ。あの頃はミクロロ自身、サンドリアを離れる事になるなんて思ってもなかったろうな。侯爵家に代々住み込みで仕えるタルタルの使用人一家の娘が、わがままなお嬢様に付き合わされてジュノへ。運命の奔流に流された娘の物語。だが、この物語は後日語る事とするか、……なんてな。

今日の休みが終われば、明日からまた捜査が始まる。だから、今日いっぱい羽を伸ばしてやろう。打ち上げの日の埋め合わせだ、アイ、付き合ってもらうからな。

そんな事を考えながらセイント詰め所の扉を開けると、どこからか戻ってきたテイルとキョウが話していた。

入ってきた俺に気付くと、テイルが鋭く視線を向けてきた。そして再びキョウに視線を戻した。俺はテイルの視線に釘付けされて玄関に立ちつくしていた。

「でも……」

「うろたえるんじゃないよ！ あたしははなっからぶれちゃいないよ。いいからあんたは指示通りに動きな。分かったね？」

「……分かった」

二人の会話はキョウが無理矢理納得させられた形で終わり、キョウが玄関扉へ向かってきた。

「ソレ……、あの件は忘れてくれ」

キョウは俺に目も合わせず言って出て行った。

帽子掛けにマフラーを掛けて、なんとなくテイルの方を見ないように奥の物置部屋に行こうと足を向けた。

ちよいとお待ち、と呼び止められる。その声に思わず目をぎゅつと瞑った。

「こっちへきな」

無言で団長の机の前に行くと、椅子に座ったテイルが俺をじっと見つめてきた。

「あんた、あたしに言うべき事があるんじゃないかい？」

「あ、ああ、おかえり。本当、団長ってのは忙しいもんだな」

依然、テイルは黙ったままだ。その言外にたまらず言葉を継いだ。

「いや……、今日は休みらしくて。だから、ほら」と、訓練用の剣を見せた。「ジェイと訓練を……」

テイルは、はあ、とため息を漏らすと腕を組んだ。

「キョウシロウから聞いたよ。あんた今、パンナに探りを入れてるらしいじゃないか？」

「そ、それは……、あいつがあまりにも変人だから、逆に『俺はこんなにもまともなんだっ！』って思える材料を探してるだけだよ」

「無駄だからやめておきな」

テイルの射るような視線に耐え切れず目を逸らした。

「……時間のある時にやるだけだ。それは俺の自由だろ？」

「呆れたねえ。あたしの前で、あんたの旧友の身边を洗います、なんて宣言をするとはね」

ティルはゆっくり立ち上がると、玄関へ歩いていった。

「ティルはどこに行つてたんだ？」ティルの背中を追つて言った。

「バストワークへ、ね」

ティルは立ち止まつて、振り返らずに言った。

「バストワーク……、ゾッド達が今そっちで仕事してるんだよね？」

「そう。まかせた仕事の中間報告を受け取りにね」

「どうしてわざわざティルが？ ……そんなに急ぎの仕事なのか？ 合同捜査なんて大きな依頼をほっぽりだしてまでやるほどの？」

「まあね」ティルが短く答えた。

「依頼主は？」

「まああたあんたは賄賂だなんだって——」

「はぐらかさないで答えてくれよ！」

つい大きな声を出して問い詰めた後、ティルは振り返り、首を少し傾けて顔に笑顔を映していた。そして、ゆっくりと腕を組んだ。

……本気で怒ってる時の態度だ。

「あんた何様のつもりなんだい、えっ？ あたしがあんたにそれを報告する義務があると思ってるのかい？」

じつくりと、部下に分別を分からせようとする時の口ぶりだ。

「ないよ。……なら、俺が個人的な理由でパンナを調べるのも自由だよな？」

ティルは頭を抱え、はあ、とため息を漏らした。そして、人差し指を立てて口を開いた。

「あんたに一つ忠告しておくよ。……この合同捜査は、新型麻薬が看過出来ない事態を引き起こしているから始まったんだ。あの薬、ネオモスタミンは麻薬取締局で培われた技術で造られているんだ。どういう意味だか分かるかい？」言い終えると再び腕を組んだ。

「えっ？」

「呆けた顔をしてるんじゃないよ。……麻葉取締局の内部には間者なんて小物じゃなく、青い歯車の首謀者が潜んでいるかもね。……とにかく、あんたにパンナは止められないよ」

「それってどういう——」

「あたしは今から行かなきゃいけないところがあるんだ。……この件はあんたに任せてあるんだから、しっかりやんな」

ティルはくるりと向きを変えて、背中ごしに手をひらひらして詰め所を出て行った。びゅう、と強い風が吹いて扉が大きな音を立てて閉まった。

——俺は、ティルがこの合同捜査から完全に外れているものだと思うっていたけど、……そうじゃない。ティルがあれだけの大胆な推測を立てているんだ。何か情報を掴んでいるはずだ。……でも、ティルはその情報をどこで？ 仮にゾッド達から情報を得ていたとしても、ゾッド達をバストワークに派遣したのは十一月二十一日、俺のチームがゴ布林盗賊団を退治した日だ。となると、合同捜査の開始前から青い歯車の情報を知っていたみたいじゃないか。

まさか、セイントは青い歯車の企みに力を貸しているのか？ セイントが青い歯車のスパイそのもの。いや、そんなまさか。

悔しいけど、パーパの言っていた事はやはり間違いじゃなかった。パーパは『セイントの方たちは異質』、と言っていた。そして傭兵として以上に関わりがある事も否定しなかった。セイントは麻葉取締局との合同捜査ではなく、別の切り口から捜査をしているのか……、なぜ？ いや、パンナの過去を知っているからこそティル達もパンナを止めよう？

——だめだ！ 情報が不足したまま考えていても疑心暗鬼になるだけだ。パーパの言うとおり、俺は先入観を捨てて挑まなければならない。——でも、俺にできるだろうか。

ランプの薄明かりが、アイの横顔を優しく照らしている。アイはいつも以上に落ち着きが無くそわそわと店内を見回していた。俺達

が座ったのは、ハチミツ酒亭でも三つしかない窓際の二人掛けのテーブルだ。窓から見える通りは普段はジュノで一番賑わっているというのに、季節のせいで今は人もまばらに歩いていた。空からは雲に隠れた小さな月が、柔らかな影を通りに落としていた。

「ね、ねえソレ。どうしてこの席なの？」

「どうしてって……、一人で飲む時は店の奥だけど、せっかくおまえと来てるんだ。たまには、な」

「そ、そおなんだ」

「なんだよ？ 二人で飯を食べる事なんて、そう珍しいことじゃないだろ」

「う、うん。……でも、なんだか今日のソレは顔が怖いよ」

そうだろうな。誰に頼る事も出来ない現状じゃ、正直先が思いやられる。

ウェイトレスがテーブルに注文を聞きに来た。

「これとこれを頼む」

「はい、かしこまりました。それとお客様、このテーブルではお花のサービスも提供しておりますが、いかがされますか？」

そう言われても花なんてなあ。こいつなら植物に詳しいはずだ、と、アイに目配せをして助け舟を出したが、きよろきよると店内を見回してばかりでこちらに気付きもしない。……まるで、御上りさんみたいじゃないか。

「じゃあ、カーネーションをもらえるか？」

「かしこまりました」ウェイトレスが、にこりと笑顔を見せて注文を届けに行った。

「カーネーション……」アイがぼそりと呟いた。

それくらいしかわからねえよ。親父がいつも、これをお墓に手向けてこい、って渡してくれたのが白いカーネーションだったんだ。

……もう、五年もお袋に挨拶してないんだな。

「なあ、アイ。……今、俺が何を考えているか分かるか？」

「……えっ？ えっ！ ええ？」

「いや、分かるわけないよな。すまん」

「だ、だってえ……、そんな急に……」と、顔を真っ赤にしたアイは、ぶつぶつと何か言いながら俯いた。

そうだ。分かるわけない。人の気持ちや考えてる事が分かったら何も苦勞する事なんてないんだ。それでも、俺は知りたい。ジュノに来て五年、退屈に感じていた人生に未だかつて無い事態。これが、ティルからの挑戦なら受けて立ってやる。それぞれの胸に抱えた秘密のカードを、俺が『おもて』にしてやる！

食事を終えて外に出ると、店の窓の向こうには恋人同士と思われる男女が席についていた。俺達が座っていたテーブルだ。他の二つのテーブルにも男女が座っている。こうやって外から見てみるといい雰囲気だ。漂っているな。まるで絵の中に描かれた、愛し合う二人だ。

「ねえソレ……、あのテーブルはその……」

「ああ、ピンクのカーネーション、きれいだったな。……って、寒いな。早く帰ろうか」

顔を上気させて、寒さに震えるアイを見て歩き出した。

「ソレ、ピンクのカーネーションの花言葉を知ってるの？」

「いや、知らない。そういうのはアイの専門だろ？　それで、花言葉は？」

アイは少し足早に俺の前を歩くと、あのね、と呟いた。

「『あなたを熱愛しています』、だよ！」と、大きな声で言い残して走っていった。

あなたを熱愛……、えっ？

「えっ？　えええー！」

俺は立ち会った。恋人達のためのテーブル、怖い表情と謎の問いかけ、カーネーション、全く意図の違う一つ一つの事柄が、間違った線で結ばれた瞬間に。

三章 四節 晴天に願いをかけて

新聞の天気予報には今日から三日間雨が降るとあった。しかし、もう十二月も目前だというのにそんな予報を裏切って、太陽は強い熱と光で雲を追い払っている。

俺とアイはパンナに付いて回り、ジュノ下層区を中心に聞き込みを行っていた。一年前から続くネオモスタミン絡みの捜査によると、ジュノ国内での麻薬売買に限ってはこの下層区が一番盛んだそうだが、休日から三日目になるのに、一向に目ぼしい情報を得られない事にパンナは苛立っているようだ。――いや、俺がびったりと張り付いているせいで身動きができないことに、かもしれない。

本来ならこの聞き込み捜査によって地道に情報をかき集めて、スcolnixのようなバイヤーの後を追ひ、ルートを一つずつ潰して行くんだらう。今頃、エア達も同じようにどこかで聞き込みをしているはずだ。だが、俺とパンナの事情は違う。おそらくパンナの目的は、バイヤーを見つけて秘密裏に『処理』することだ。そして俺はその行き過ぎた凶行を止める。……イカレた捜査だ。

十一時を回った頃に少し休憩を取ろうという話になり、ワグデグ魔法書店の壁に三人でもたれこんだ。パンナの提案でこの時間を利用し、三日間の間に何か気付いた事はないか、と意見を出し合う事にした。通りを見渡すと昼間はやはり人が多く、行商人も冒険者も街の人間もみんな、本格的な冬に入る前の準備をしていた。アイが、『自分が気になった事』と称するろくでもない情報――老人を介護していた若者がお酒臭かったとか、主婦なのに指に包丁の傷痕が無かったとか――を一所懸命パンナに説明している。料理で手に傷を作ってしまうのは、おまえに技量がないからだ、と心の中で突っ込みを入れつつ、大半の話を聞き流しながら街行く人々を眺めていた。

すると、一匹のゴブリンがワグデグ魔法書店の前に立ち、拳

動不審な動きをして店へと入っていった。

「ゴブリンが魔法書店へ行くなんて珍しいねえ。少し話を聞いてくるタル」パンナも怪しげなゴブリンに気づき、その後を追っていった。

パンナが店の中に消えた丁度その時、アイの使用人であるミクロロが視界に入り、小走りで駆け寄ってきてアイに声をかけた。

「お嬢様、お手紙が来ておりましたのでお届けにあがりました」

ミクロロは以前会った時と同じ様に、赤く長い髪を小さく後ろに結っていた。料理の途中で出てきたのかエプロン姿のままだった。もちろん、手に傷などない。

「ミクさん！ またお父様から？ でも、わざわざ届けてくれなくてもいいのに」アイが眉をひそめている。

アイは、ジュノへ出てきて五年経った今でも、親父さんと二日に一度は手紙をやり取りしている。いつまでも子離れできない親父さんに、ほとほと困ってるようだ。

「いえ、ご主人様からではなく、立派な恰好をしたミスラの女性が家に来られて、『なるべく早くアイ様に渡してもらえますか』、とだけ言ってそそくさと去っていきました。もしかしたらお仕事の件でお急ぎかと思い、慌ててお嬢様を探しに来たのです」

ふうん、と言ってアイは封筒を受け取り、手のひらの上でまじまじと眺めている。「急いでるのに手紙なんて変なお。それに、わたしにはミスラさんのお友達なんていないのになあ……？」

手紙の入った封筒は、緑色の封蝋で閉じた簡素な趣だった。封筒には宛名も、差出人の名前も住所も書いていないようだ。

「では、私はこれで失礼します。……お嬢様、あまり危険な事はなさらぬように」言った後に、俺にぎょろりと目をむいて去っていった。

「ミクさん、ありがとねえ！」アイがミクロロの背中に大きく手を振った。

ミクロロは俺の事を相当嫌っている。サンドリアの屋敷を離れな

ければならない事、アイが傭兵になり危険な仕事をしている事、その原因となった俺が憎くて仕方がないようだ。……前に、アイの家にお邪魔した時は、ひどく塩辛い豆のスープをご馳走になった事があったな。その夜は、塩分の取りすぎで足がシモカブみたいにくんだ覚えがある。二度と行くものか。

アイが封筒を開封して中を覗く。

「あれえ？ 中に手紙ともう一つ封筒が入ってる！ ……んー」と、封筒の中に入っていた手紙をアイが声に出して読み始めた。

「アイ様、私はビツフェと申します。急なお手紙を差し上げる事をお許しください。早速ですが、お願いがあります。この手紙に同封してある封筒をソレ様に渡して頂けますか？ とても大事な用件でソレ様にお話があるのです。後日、改めてアイ様にも挨拶に伺いたいと思いますが、今はどうしてもはずせない用事があり、この手紙をもって挨拶に代えさせて頂きます。ご無礼をお許しください。」

ビツフェ……、パーパか。どうしてアイに手紙を送ったんだ？

手紙を読み上げたアイはぷるぷると小刻みに震えて黙っていた。

その様子に、ただならぬ予感を感じとり、静かに声をかける。

「ア、アイ？」

「誰……」

「えっ、いや、ただの友達だぞ！」

「友達って誰なの。ソレにミスラさんの女友達がいるなんて知らなかったなあ？ どこで知り合ったの？ ……前にエアさん達と顔合わせをした日、キョウシロウがミスラさんのえっちなお店の話をしてたけど、……あの時、様子がおかしかったよね？」

「げえ！ 妙に勘がいい！ なんでこんな時だけ名探偵ばりの勘の良さなんだよっ！」

「ち、違う！」 違わないけど。

「何が違うの？ この前の休日に私にあれだけの事をしておいて……」 と、言いかけて顔を真っ赤にしている。二人で飯を食べに行っ

た時の事を思い出して自滅したようだ。

「と、とにかく、ソレは説明する必要があるよ!」

「別にやましい事なんて何もないって! それ、よこせよ!」アイの持っていた封筒を奪い、「ちょっと外すから、パンナに言っておいてくれ! あと、絶対にパンナと一緒にいるんだぞ!」と、アイの表情を確認しないまま背を向けて走った。

「言われなくても、もうずっとパンナさんのそばにいるんだからっ! ソレのばっかっ!」

走り去りながら、アイのつんぎくような叫び声を浴びて呟いた。

……パーパの馬鹿……。

一人静かな路地へ入り、アイから奪った封筒を開封する。中には、手紙一枚と真珠の耳飾りが入っていた。

手紙には、“ソレさん、先日はあのような姿をお見せして申し訳ありませんでした。中途半端に投げ出す事は、自分だけでなく友人のパンナにとっても不義理な事でしたね。今更何を、と思われるかもしれません、微力ながらソレさんをお手伝いできたらと思っています。承知頂けたなら、人気のない場所と同封の耳飾りを着けて、指で二度弾いてください。それでは……”と、書かれていた。

……パーパ、助かる。

書いてある通り耳飾りを左耳に着け、人差し指でこつこつと二度弾くと、耳飾りが、ぶつつ……、と音を立てた。

「……ますか? ソレさん、聞こえますか?」

うおっ! と声を発して驚き、辺りを確認するが誰もいない。だが、なおも声は続いた。

「ソレさん、聞こえていたら話してください」パーパの声だ。

み、耳飾りから、か? 「あ、あー。き、聞こえてるぞ。……これでもいいのか?」

「はい、大丈夫です。まずは、……ありがとうございます。勝手に降りて、また勝手に戻ってきて……」

「いや、いいんだ。助かる」言いながら耳飾りを撫でる。「それよりこの耳飾りは一体何だ？」

「はい、その真珠の耳飾りは『リンクパール』と言って、遠く離れたもの同士でも会話をすることができる魔法の耳飾りです」

「ジュノにはこんな物まであるのか？」

「いえ、その原型は今より遙か昔に、ウィンドス連邦の英雄が開発したそうです。……失われた技術ではありませんが、近年ジュノ技術部では監視と防犯のための技術開発が進んでいるんです。まだ不完全ではありますが、リンクパールはその一環で蘇った物なんですよ」

なるほど。原理は全く分からないけど、こんな物を作ってしまったからバストワークも脅威とを感じるわけだ。

——ふと、左手の大通りから視線を感じてそちらに目を向けると、ヒュームの女の子がじつとこちらを見ていた。

「ママー、あのおじちゃん一人で喋ってるよー？」

「しっ！ 見ちゃいけません！」母親が、女の子の手を引っ張って立ち去っていった。

俺は麻薬でおかしくなったおじちゃん扱いか。

「……使いどころに困るなこれは」

「慣れですよ。……と、言っても、それは試作品の中でも質が悪く、廃棄された物を特別に譲ってもらったのです。慣れさせてくれる程、長くは持ちませんが」

「そうなのか。あと、どのくらい持つんだ？ ……いや、そんなことより、どうしてこんなまどろっこしい事を？ パーパのせいでアイに変な疑いを持たれたぞ」

ふふふ、と小さく笑い声が聞こえた。

「な、なんだよ？」

「すいません、わざとやりました。ふふふっ」

「はあー？ アイのやつ本気で——」

「冗談ですよ！ ソレさんをからかっただけです。……どうやら私

が動くのを良しとしない人物がいるようです」

「……パナナか？」

パーパは、「はい、おそらく」と、言っただけ黙りこんだ。パーパは耳飾りの向こうで思案を巡らせている様だ。しばらくしてパーパが話し始めた。

「……四日前、ソレさんが局へお越しになった時に、私がお見せしたカプセルを覚えていますか？」

「ああ、覚えてる。確か、プレなんとかっていう薬で、麻薬で精神錯乱を起こした患者を正常な状態に戻せるとか、……だよな？」

「そうです、『パナケイアパウダー』です」

一文字も合っていない。このだらしない脳みそもカプセルで治らないか？

「まだ治験の段階が二つ目に進んだばかりだったのですが、順調な成果に慢心し、外に持ち出した挙句パナナに奪われてしまったのです。私もサンプルの一つくらい良いかと思い、そのまま譲ったのですが……、その事が後に響くとは思いませんでした。私が彼を助長したも同然です。」

十一月二十六日、一昨日になって研究室に、ある報告が上がってきました。『モンブロー大病院に入院している、新型麻薬で精神錯乱を起こしていた患者の状態が何故か改善していた』、と。

どうやら、その患者のご家族が局へお礼を言いに来たそうなのです。『お礼はいりません。麻薬取締局研究室からの贈り物です』と、書かれた手紙を持って……。手紙は、ご家族の家の郵便受けに入っていたそうですが、二十五日の朝にはそのような手紙は無かったそうです」

「そのパナなんとかには副作用はないのか？」

「……もちろん、危険は絶対がない、とは言いきれませんが、現段階において副作用は確認されていません。ただ新型麻薬は、強力な毒性を持ったキノコ類から作られている事が最近分かったのですが、その毒に肺を侵されてしまうんです。そのせいで、何かの拍子に咳

をすると止まらなくなるので、カプセルを飲む時は注意が必要でしょうね。……きっと青い歯車の構成員達の体も無事では済まないでしょうね」

パンナはパナなんとかを使って、大病院にいた患者からスコルニクスの情報を聞きだしたってわけだ……。ついでに邪魔な幼馴染の機先を制した、と。どうやら、俺とパーパが繋がって情報をやり取りされると困るみたいだな。

……けど、パーパが全てを白状すれば、パーパもろとも自分も処分を受けることになるはずだ。……なぜ、そんな危険な賭けを……？
しかしパーパ、よりによってアイに手紙を出したのはどうなんだ……。アイのやつ、手紙の内容を平然と口に出して読み上げてたぞ。……アイという人物の調査不足だな。まあ、何事もなくリンクパールで連絡は取れるからよしとするか。

「その手紙の筆跡から誰が書いたものなのか分からなかったのか？」
「ええ、私がパナケイアパウダーを持ち出した事はお分かりの通りですが、内部監査も局内部に不正に外に持ち出した者がいると断定し、全職員の筆跡と照らし合わせたのですが……」

「ハズレ、か。……なら、ティルを。セイントのティルダの筆跡と照合してみてください」

「え！ どうしてソレさんがティルダさんを？」

「今更どうしてもこうしてもないだろ。パーパがセイントに目をつけてたんだろ？ ……パンナとティルが協力してる可能性だってあるんじゃないのか？」

ティルは俺がパンナに近づくのを嫌がっていた。考えたくないけど、ティルがパンナの凶行に手を貸している可能性はある。そうすると、ティルの言う、『麻薬取締局には青い歯車の首謀者がいるかもしれない』、つてのは、俺の目を他に向けるためのハツタリかもしれない。

前に進むためにもティルへの疑念を晴らすためにも、この筆跡鑑定は重要だ。……いや、それでも疑念が晴れるわけじゃない。ティ

ルが直接手紙を書く必要もないって事は分かってる。仮にティルが関わっていたとしても、筆跡なんて出てきやしないだろう。でも……

「……キョウシロウ、ジェイ、ゾッド、テール、ウォーフの鑑定もついでに頼む」こいつらのも出て来ないだろうが、こうなりやヤケだ。

俺のあまりのヤケっぷりに、パーパは言葉を失ってしまったようだ。驚きのあまり息を呑む姿がありありと目に浮かぶ。

「……いいんですか？」

「やってくれ。……パーパ、あまり時間がないんだろ？」

「……ええ、国から巨額の研究資金を貰って、ようやく実用レベルに近づいてきた薬ですから。そんな物が漏洩したとなれば、内部監査の手が緩む事はないでしょうね」

「パーパ……」

「いいんです。これは私の不注意がもたらした結果ですから」パーパの声には、諦め、とひとくくりにできない力強さが宿っていた。

「なら、パーパ。俺はこのままパーパの力を借りたい。……自分でもなぜだか分からないけど、この手でパンナを止めたいんだ。だから、内部監査に自白するのを待ってくれないか」

「ええ、もちろんそのつもりです！……ですが、パンナの目的が私の行動を制する事なら、私が表立ってソレさんに協力する事はできません。これ以上私が下手に動いて、彼がさらに強硬な手段を取ってこないとも限りませんから……。今後、連絡の一切はこのリンクパールで取り合うことにしましょう」

「ああ、分かった」

まだ疑い切れない。確認したいんだ、パンナの信念ってやつを。きっと俺が捨てちまった何かをあいつはまだ持つてる。それは、ずっと力強く握って歪んじまったものかもしれない。けど、それを感じられたら俺も取り戻せるかもしれない。

何にせよ、もうパーパは後には引けない。――なら俺だって。」

……赤魔道士に弱点はないのか？」

「弱点、ですか？ 赤魔道士は、魔法も剣術の腕も国からのお墨付きですよ……って。えっ！ もしかしてパンナと剣を交えるつもりで——」

「可能性の話だ。……今回の事でパンナがどのくらい本気なのかはもう分かったろ？ 俺だって覚悟を決めなきゃ返り討ちにあうかもしれないんだ。もし、弱点になるような事があるなら教えてくれ」

と聞いてみたものの、パンナとの共闘を思い返してみれば、そんなものあるのか？ と、不安になる。——風を操って空を舞い、剣に電撃を宿して触れれば気絶させる。……あれは剣術って次元じゃないぞ。

「……弱点、と言えるかは分かりません。ですが赤魔道士であり、麻薬取締局の捜査官であるパンナには足かせがあります」

「足か……せ？ そ、そんなものがあるのか？」

「あ！ 過度な期待は禁物ですよ！」

パーパは、うーん、と小さくうなり始めた。低音が響いて耳元がくすぐったい。

「ど、どうした？ どんな些細な事でもいいから教えてくれ！」

少しでも、敵を知らなければ勝ち目はないんだ。

「……赤魔道士のレイピアを用いた白兵戦魔法剣術は、主に、火と風と雷の精霊の力を行使します。精霊の力を行使するということは、すなわち自分の魔力を餌とし、対価として力を借りるということですよ。魔法剣はその特性上、剣にその力を宿し続けるため——」

「魔力を垂れ流し続ける、ってことだな？」

「はい、その通りです。そして、捜査官である以上、容疑者を捕える事が先決になります。……ここに、彼の足かせがあります。

火の魔法剣は、殺傷力が高く魔力の消耗も大した事はありません。ここに、赤魔道士の強さが集約されていると言っても過言ではないでしょう。ですが、風を巻き起こして自身を浮遊させたり、追い風で瞬発力を得る。剣に雷の力を宿して相手を傷つけず気絶させる等、

魔力の消耗が激しいだけでなく、魔力の調節が難しいものもあるのです。……膨大な魔力の消耗、そして調節。これらの事が術者を弱らせるのです」

「つまりパンナは容疑者を捕えるために、あえて消耗の激しい魔法を行使しなければいけないってことか。って事は……」

「そうです。……が、捕える必要がない場合、その力を効率よく使うでしょうね」

なんてこった。……これは、確かに弱点じゃない。

パンナが容疑者を捕えようとする時、それは同時に容疑者を殺しもしない時だ。ここにパンナを止める理由は無い。そして、殺そうとしている時は最小限の魔力で仕留め、余力で俺と戦える。——結局、『止められない』じゃないか。

「くそっ！」もたれている壁にこぶしで殴りつけた。

クロスボウを切り札にするしかない。……今のままじゃあまりにも頼りないが。

「……すみません。これでは逆にソレさんを不安にさせただけです」
「いや、パーパが声を落として言った。

「ソレさん……、気休めにしかありませんが、覚えておいてください。風と雷の魔法剣の使用限度は六回程度です。風を纏って五人も気絶させれば、魔力は尽きるでしょう」

「ああ、覚えておく。パンナに対してハツタリをかます程度にはなるかもしれないしな」

あ！ と、パーパの驚く声が聞こえ、後ろから何人かの声が混じりあって聞こえ始めた。どうやら、パーパのいる場所に誰かが来たようだった。

囁き声でパーパが話す。「ソレさん、内部監査人が来られました！ 情報を集めるなら、エア捜査官に会ってください！ 上級捜査官の彼なら貴重な情報をいくつも持っています。それに、パンナをセイントに配置したのも彼です！ それとリンクパールは外してお

いてく——」

ぶつつ、という音と共にパーパの声は途絶えた。

ふう、とため息を一つこぼして耳飾りを外す。壁に全身を預けて、

「……忙しい展開だな」と、一人ごちた。

パンナはこの先どう出る？ おまえの信念って本当は何だ……？

——ぼーっと焦点を合わさず、ただ目を開いていると、目下の建物の壁に、日の光が反射して一瞬目が眩んだ。こんな狭い路地にも光は届いてくれる。明日も明後日も、……この先もずっと天気予報なんて裏切って晴れて行けばいいと思った。

エアと二人でハチミツ酒亭に足を運んでいた。座ったのはカウンター席でも一番奥、店の中で最も静かに話をできる席だ。

「そうですか。アイさんは自分なりの視点で捜査をしているんですね」

エアはにこやかな顔で、俺達のチームで起きた三日間の出来事を聞いてくれている。既に旗印である赤い帽子も赤いマントも羽織っておらず、黄土色を基調とした地味目のコートが椅子に掛かっている。これこそエアの精神的な落ち着きを表すに相応しい恰好だな。

今日、パンナが捜査を切り上げたのが午後六時。俺がエアに、話がしたい、と持ちかけたのはそのすぐ後の事だ。けど、エアが仕事を終えたのは今から三十分前、夜十時を過ぎてからだった。早く自室に戻って休みたいはずなのに、エアは一切嫌な顔をしなかった。その疲れを見せない頑丈さと姿勢が、彼の経験の豊富さを物語っていた。

「でも、素人の意見なんて本当にくだらないだろ？俺達なんて、結局ただの護衛だよ。……いや、パンナは強いし、足手まといになってるかもな」

「いえ、そんな事はありませんよ。熟達しているからこそ見落とししてしまうこともあるんです。もしかしたら、アイさんのような視点が、この先どこかに取っ掛かりを作ってくれるかもしれません。私

は期待していますよ」エアはそう言って、ふふっ、と笑った。

これはさすがに慰めだと分かる。俺達のような素人が一週間もしないうちに本職と同じように出来たら、捜査官たちはあっという間に食いつぶされるだろう。

「ジェイとキヨウはしつかりやってるのか？」

「ええ、とても真面目に取り組んで頂いていますよ。キヨウさんは最近特に張り切っているみたいで、こちらも元気づけられます」

キヨウもまだ諦めていないんだろう。何を考えているのかは分からないけど、ティルに言われた通り『セイントの思惑』で動いているのは間違いない。

「ただ……」エアが水の入ったグラスを傾けて考えている。

「ただ？」

「ジェイさんは不思議な方ですね。聞き込み捜査を行っていて、ふと気付くと姿が見当たらない事が多々あるんです。……あの方も独特な視点を以って捜査に当たっているみたいですね」言って、あははっ、と頭を掻いて苦笑いを浮かべている。

「ジェイは昔からそうなんだ。強くて賢くて、やたら勘が働いて。身内最悪だって思うかもしれないけど、本当に頼りになるんだ。……俺はそんなジェイにいつも助けてもらってる」

「信頼しているんですね。ジェイさんの事を」

「まあ、そうかな。……俺は一人っ子だけど、たまに、兄貴ってジェイのような存在なんだろうなって思う」

「血は繋がっていないけど兄弟ですか。いい関係ですね」エアがうんうんと頷いている。

「でも、あれだぞ！ 口うるさいところもあるんだ。前の休日なんて、『おまえは強くならなければいけない』とか言って無理矢理訓練に引っ張り出されるし、『投げナイフはもうやめておけ、子供のおもちゃだ』、なんて注意されるし。……投げナイフは、俺がサンドリアにいた頃から訓練してたんだ。結構自信あるんだぞ」

腕を振り上げてナイフを投げるふりをして見せた。それを見てエ

アが体を揺すって笑った。

「あはは、まさに兄貴ですね。ソレさんと相性がいい証拠ですよ。それに、子供の頃から好きな事はなかなかやめられませんよね。私も……」と言って、エアは持っていた鞆をこそごと探りだした。そして小さな飛空艇の模型を取り出した。

現行の飛空艇だ。極めて忠実に再現されているが、主翼の回転翼の羽が一本折れて無くなっている。い。

「以前ソレさんが入院していた日、私はジュノが好きで、小さな頃から弟と一緒に働く事が夢だった、と話した事がありましたよね」

「ああ、言ってたな。それで、その模型は？」

「笑わないで聞いてくれますか？」

「うーん……、内容によるかな。エアが今でもそのおもちゃで遊んでるって話なら笑うのを禁じえないね」と、おどけて言った。

「ソレさん、意地悪しないでくださいよ。……これはジュノにあった小さな老舗模型玩具店が製造して販売していたおもちゃなんです。今はもう大きな会社になってしまっていますが。」

私が十歳の頃……、もう今から二十四年前になりますか。出張でジュノへ行っていた父から、お土産としてこの模型をもらったんです。大きな体で雲を切り裂いて頭上を飛ぶ、憧れの飛空艇がそのまま小さくなって手の平に乗っていたんですよ。子供心に、とても感動しました。それから毎日、この模型で弟と一緒に遊んでいました。そしていつか、こんな素敵で溢れるジュノへ一緒に行こうと約束をしたんです」

エアは手に持った模型を見つめて言った。きっと、家族で過ごした子供時代を思い出しているんだろう。

「……そういうのって手放せないよな」

「ええ。男というのはいつまでも子供ですから」

そうだな、と言って大きな声で笑いあった。

そろそろ頃合かな、とグラスに注がれた酒をグイッと飲んだ。「エア、本題なんだが、色々と聞きたい事があるんだ」

「ええ、私で分かる事ならなんなりと」エアが笑顔を向けて言った。
「……むしろ、上級捜査官でしか知りえない情報を知りたい、と言
ったら？」

エアは、ふむ、と言って頷いた。そして体ごとこちらを向いた。

「実は、青い歯車という麻薬密造組織は、バストワーク共和国の過
激派集団が前身になって構成された組織なんです。つまり——」

「それは知ってる」

エアの二の句をさえぎって短く答えると、エアは口を開けたまま
驚いて動きを止めた。

「……その情報をどこで？」少し間をおき、エアは首を振って、「
聞くのは野暮ですね」と、呟いた。

「では、こういうのはどうでしょう。……過激派が獣人達と手を結
んで青い歯車となる前——今から二年半ほど前の話になります。過
激派は、謎の傭兵団により活動拠点を次々と暴かれ、半壊した過去
があるって知っていましたか？」

「謎の傭兵団？」

「正確に言えば、雇い主もその所属国も不明なので傭兵と断定する
ことはできません。ですが、私はある『噂』を耳にしたことがある
んですよ。……知りたいですか？」

「噂？　なあ、もったいつけないで教えてくれよ。その噂ってのは
？」

「『上層区工房橋二十三部隊』、それが彼ら謎の傭兵団の名前だと
いうんです」

上層区工房橋二十三……部隊。どこかで、その名前を見た覚えが
あるような……。

エアは口の端を上げて声もなく笑い、話を続けた。

「面白いと思いませんか？　上層区工房橋といえば、私にはジュノ
大公国しか思い当たりません。なぜ、そんな名前で呼ばれているん
でしょうね。ジュノ大公国にはご存知の通り軍隊はなく、ソレさん
達のような傭兵団がその役割を果たしていますよね」

俺は黙ってエアの話聞き、二度頷いて相槌を打った。

「ジュノ大公国を狙う過激派集団と争ったからジュノ大公国側にくく組織である。実はジュノ大公国には対反乱作戦を目的とした秘匿部隊があつて、密かに暗躍している。……そんな噂がまことしやかに囁かれ、尾ひれがついた結果そう呼ばれ始めたのかもしれませんがね」

「面白いな、確かに。そんな連中が本当にいたんなら、なんとも泣ける話だ。でも、中途半端に叩いたせいで過激派が地下に潜り、やつらは獣人と組んでまでジュノと徹底抗戦を決めたって事だろ？そして、この異例の合同捜査に至るまでの深刻な問題になったんじゃないか？」

エアはカウンターに向き直って、あはは、と声を上げて笑った。

「その通りかもしれませんがね！……青い歯車の目的は過激派であつた頃と変わっていないでしょう。彼らが行う『反乱作戦』というのは、武力で訴えるよりも心理的に訴えた方がより効果的です。なので、麻薬汚染でじわじわと攻めるのはとても効率的と言えますよ」

「敵ながら小賢しくてうざったい話だ。敵を賞賛するのは面白くないけどな」

「ですが、作戦とは単一では意味を成しません」

エアは吸いもしないのに大きな灰皿を自分の手元に寄せ、水の入った細長いグラスと並べた。

エアが「こっちが青い歯車です」と、グラスを指差す。「そしてこっちが青い歯車より以前から、ジュノ大公国、並びに他三国での麻薬売買を牛耳る、巨大麻薬密造組織『ベルドガルドファミリー』です」と、灰皿を指差して言った。

「な、なんだ？」

「簡単な話ですよ。ジュノ大公国は、青い歯車以前より麻薬汚染が広がっていたんです。ベルドガルドファミリーには青い歯車のようには思想はなく、ただお金を稼ぐために麻薬を売っていました。ジュ

ノ大公国はベルドガルドファミリーの独壇場でした。さて、そこに新参者の青い歯車が現れ、自分達の商売の邪魔をしています。……どうなると思いますか？」

「うーん、まずは話し合いになるだろうな。強い方が、弱い方に上納金をよこせ！　ってな。それが通じない相手なら、最悪潰し合いだ」

「そうなりますね。……そして青い歯車には話は通じません。なぜなら彼らの目的はベルドガルドファミリーと違い、ジュノ大公国を混乱に陥れ、ジュノ大公国が持つ革新的な技術を公開させる事からです。ベルドガルドファミリーのように『程々に』とは思っていません。そして今まさに巨大麻薬密売ルートであるジュノを賭け、相容れぬ二つの組織が争いあおうとしている段階に入っただけです」

エアは俺をじっと見つめ、あなたの答えが知りたい、と待っているようだ。それに応えるよう、無い頭を振り絞って考えた。——答えは簡単だった。

「このまま放っておけば、両者が勝手に潰しあって弱体化するってことだな？」

「そうです。その通りです」エアが満足そうに、にこりと笑った。

「だったら、合同捜査なんて必要ないんじゃないか？　麻薬取締局が、二つの麻薬密造組織が争いあうって知ってるなら、黙って傍観していればいいだろ？」

「ええ、乱暴なやり方ですがその方が色々都合がいいですよ。私もそのように考えていたので、合同捜査の話が持ち上がった時に局の上部へ掛け合ってみたんですが……。どうやら、この合同捜査は麻薬取締局の長官の一存で決まった話ではないようです。と、言っても大公閣下から麻薬取締局の全てを任されている長官に指示を出せるのは、他ならぬ大公閣下だけです。……私からソレさんにお教えできる話はこの程度ですが、満足頂けましたか？」

「ああ、ありがとう。さすがに上級捜査官ともなると面白い話を持つてるな」

エアは頷くと、そろそろ帰りましょう、と言ってコートに手を掛けて立ち上がった。

——ジュノ大公国に味方する謎の傭兵団、潰し合う麻薬密造組織、追い討ちをかける麻薬取締局。この大きな流れの中に、個人の思惑が小さな傍流をいくつも作っていく。もしかしたら、その傍流を辿った先に答えを示す源泉があるのかもしれないな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3576j/>

赤のエージェント

2011年4月6日22時11分発行